

2023 年 4 月

食料安全保障月報 (第 22 号)



令和 5 年 4 月 28 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 4 月食料安全保障月報（第 22 号）

目 次

概要編

I	2023 年 4 月の主な動き	1
II	2023 年 4 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「米国の穀物の作付け・生産と輸出動向」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2023/24 年度の小麦の作付意向面積は前年度比 9 % 増加
	＜カナダ＞	2022/23 年度の春小麦・デュラム小麦の品質は良好
	＜豪州＞	2022/23 年度の生産量は史上最高の 39.0 百万トン
	＜EU27＞	2022/23 年度の輸出量はロシア等との競合により下方修正
	＜中国＞	2022/23 年度の輸入量は、豪州からの輸入が増加し上方修正
	＜ロシア＞	2022/23 年度の輸出量は史上最高の 45.0 百万トン
	＜ウクライナ＞	2022/23 年度の小麦の輸出量は EU 等への輸出増加から上方修正
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	2023/24 年度の作付意向面積は 3.9% 増加
	＜ブラジル＞	生産量は史上最高、輸出量は世界第 1 位の見通し
	＜アルゼンチン＞	干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）
	＜中国＞	生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し
	＜ウクライナ＞	ロシアによる侵攻により、生産量は前年度より 36% 減
3	コメ	15
	＜米国＞	2023/24 年度の作付面積は増加の見込み
	＜インド＞	2022/23 年度の実産量・消費量とも史上最高の見込み
	＜中国＞	南部で早場米の作付け開始
	＜タイ＞	乾季米（全作付面積の約 2 割を占める）は作付面積の 7 割が収穫済
	＜ベトナム＞	冬春作の生育・収穫が進展。輸出価格は 2020 年 8 月以来の高水準

II 油糧種子

大豆	21
＜米国＞	2023/24 年度の作付意向面積はほぼ前年並み
＜ブラジル＞	生産量、輸出量ともに史上最高の見通し
＜アルゼンチン＞	干ばつにより、生産量は対前年度 4 割減
＜中国＞	生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し
＜カナダ＞	2023/24 年度の実産量は収穫面積増で増産見込み
(参考 1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23 年度)...	27
(参考 2) 単位換算表	27
(参考 3) 各国のクロップカレンダー一覧 (主要品目毎)	

特別分析トピック

「世界食料需給の見通しについて」

【利用上の注意】

表紙写真：米国・ネブラスカ州でのとうもろこしの播種作業（4 月 4 日撮影）

(概要編)

I 2023 年 4 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球での収穫は終了し、南米では生育期から収穫期を迎えている。今後、北半球は 2023/24 年度の作付けを迎える。

品目別にみると、4 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、豪州やロシアの豊作で世界の生産量は前年度を上回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年 3 月には過去最高を更新した小麦の国際相場も侵攻前の水準まで戻している。ウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意は 3 月に再延長されたが、延長期間の合意が得られておらず今後も注視が必要。

とうもろこしについては、ウクライナの減産に加え、米国や EU、アルゼンチンにおける乾燥等の影響により、世界の生産量が前年度を下回る見通し。一方、大豆については、米国、アルゼンチンは減産も、ブラジルで増産となり、世界全体では前年度を上回る見通し。いずれの品目も旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、2 月の 129.7 から、3 月(最新値)は 126.9 に下落（参考：2022 年 3 月 159.7、2021 年 3 月 119.2、2020 年 3 月 95.2）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値の約 9 割の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2023 年 4 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の4月見通しによれば、ウクライナの2022/23年度の小麦の生産量は前月見通しから変更なく2,100万トン（対前年度比36%減）、輸出量は100万トン上方修正され1,450万トン（同23%減）の見通し。とうもろこしの生産量も前月見通しから変更なく、2,700万トン（同36%減）である一方、輸出量は前月見通しから200万トン上方修正され2,550万トン（同6%減）の見通し（参考1）。

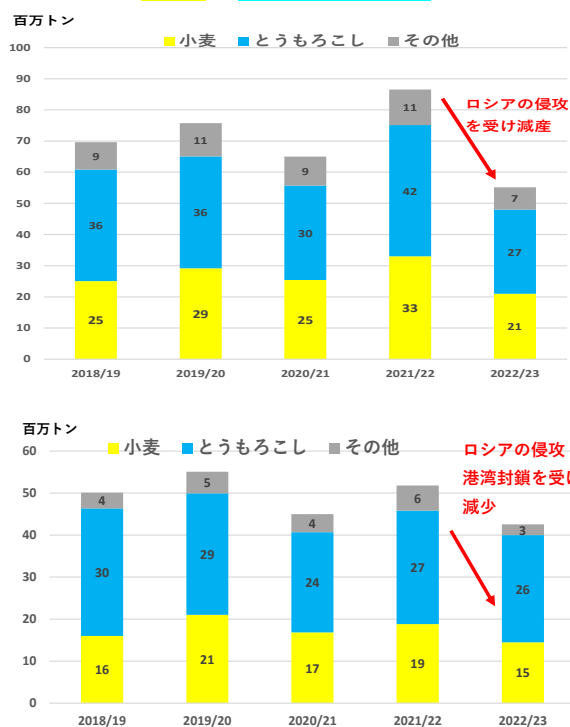
ウクライナ農業政策食料省による3月21日時点の予測によると、冬小麦の作付けがロシアの侵攻前であった2022/23年度と比較して減少したこと等から、2023/24年度の穀物・豆類の作付面積は2022/23年度比141万ヘクタール減の1,024万ヘクタール。そのうち、冬小麦は417万ヘクタール（同83万ヘクタール減）が作付けされ、春小麦は29万ヘクタール（同7万ヘクタール増）、とうもろこしは362万ヘクタール（同45万ヘクタール減）でそれぞれ作付け見込み。

同省による3月21日時点の2023/24年度の穀物等の生産量の見通しは4,430万トン（2022/23年度5,310万トン）。そのうち、小麦は1,660万トン（同2,050万トン）、とうもろこしは2,170万トン（同2,560万トン）の見通し。

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、前年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開され、2022年8月～23年3月累計の輸出量は2,649万トン（うち、とうもろこし1,321万トン、小麦723万トン他）。目的地は中国、スペイン、トルコ等。（参考2）。

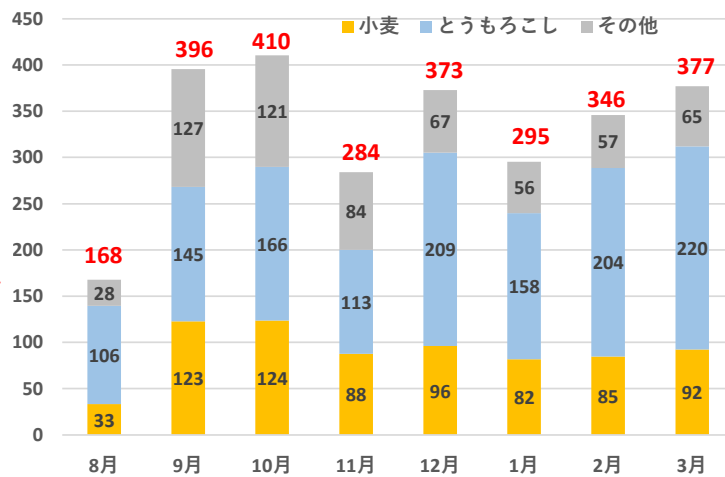
本合意（当初、前年11月18日まで、その後2023年3月18日まで延長）は、さらに3月19日以降延長されたものの、延長期間はウクライナは120日間、ロシアは60日間をそれぞれ主張している。5月中旬には、ロシアの主張する期限を迎える。

（参考1）小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.4） 注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）黒海からの輸出量の推移（月毎）



注：その他はひまわり油・大麦など

陸路による輸出を除く。

1 中国の 2022/23 年度の小麦輸入量は増加し、世界一となる見通し

中国の 2022/23 年度の小麦輸入量については、米国農務省（USDA）によると、過去最高であった 1995/96 年度の 1,250 万トンに迫り、世界 1 位の 1,200 万トンの見通し。背景には、豪州の 3 年連続の豊作などにより、最近数か月、小麦の国際価格が 400 ドル/トン以下となり、中国国内での小麦やとうもろこしの取引価格を下回っていることがあるとされている。中国による豪州産小麦の前年 7 月から本年 2 月までの輸入量は前年同期比 66%増、カナダ産は同 83%増となっている。

一方、中国の 2022 年の小麦の生産量は史上最高の 1 億 3,770 万トン。現在生育中の冬小麦は、降雨には恵まれているものの、降雨過多による病害の懸念があるとされている。

なお、訪中したブラジル・ルーラ大統領と習近平国家主席が 4 月 14 日に会談し、ブラジル産の大豆、とうもろこしに続き、ソルガムやコメ等の輸入について検疫協議を進めることとなった。

2 アルゼンチンの穀物生産は干ばつで大きく減産

アルゼンチンでは、ラニーニャ現象の影響を受け、60 年に 1 度とも言われる干ばつが継続し、穀物・油糧種子の生産に大きく影響した。ブエノスアイレス穀物取引所週報（4 月 13 日）によると、一部で収穫が開始されたとうもろこしは 3,600 万トン（前年度比 31%減）、同じく収穫が開始された大豆は 2,500 万トン（同 44%減）と見込まれている。収穫が終了した小麦は 1,240 万トン（同 43%減）。

アルゼンチン政府は財政赤字の補填のため、大豆に最大 33%、とうもろこしに 12%などの輸出税を賦課している。これに加え、とうもろこしの国内向けの安定供給を確保するために、2022/23 年度は 2,000 万トンの輸出上限数量を設定している。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、45 億ドルの融資、7 億 5 千万ドルの減税、運転資金の支援のための 15 億ドルの割引手形を発行するなどの施策を公表した。さらに 4 月 10 日には各種税の支払猶予などの政策を追加で公表した。

また、大豆輸出については、4 月 10 日から 5 月 31 日までの間のうち 45 日間を超えない期間、通常のレート（1 ドル＝210 ペソ程度：4 月中旬）に対し、優遇為替レート（1 ドル＝300 ペソ）の適用をすることとなった。ただし、この優遇レートについては、昨年も 2 度実施されているが、今般の干ばつで大豆そのものの生産量が大幅に減産しており、業界はブラジル産輸入大豆に依存していることから、効果については疑問の声もある。

3 インドネシアは備蓄形成でコメ輸入増

USDA の 4 月見通しによれば、2022/23 年度のコメの生産見通しは前年度より 1 %減の 3,400 万精米トン。

インドネシアは世界 4 位のコメ生産国として、従来からコメをほぼ自給しており、コメの輸入量はここ数年、消費量の 2 %程度に当たる 50～60 万トン程度で推移。しかしながら、2022/23 年産米の減産と政府備蓄量の低下により、政府は、コメの非常用備蓄の積み増しを輸入で充当することを決定しており、2022/23 年度の輸入量は前年度の 2 倍以上の 175 万トン、輸入先国はタイやベトナムとみられる。

II 2023 年 4 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、3月末、250ドル/トン台半ばで推移。4月に入り、黒海経由のウクライナ産穀物輸出の期間を巡る合意の不透明感がありながらも、米国主要小麦生産地での天候改善予報や、低調な輸出需要等から240ドル/トン台半ばに値を下げた。その後、ポーランド等東欧諸国によるウクライナ産の輸入禁止措置等から250ドル/トン台半ばに値を上げたものの、米国プレーンズでの降雨予報から値を下げ、4月下旬現在、240ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、3月末、250ドル/トン台後半で推移。米中西部での天候改善予報等から250ドル/トン台前半まで値を下げた。その後、ポーランド等によるウクライナ産の輸入禁止措置等から260ドル/トン台後半まで値を上げたものの、米国主産地での作付けに適した天候となるとの予報から値を下げ、4月下旬現在、240ドル/トン台半ばで推移。

コメは、3月末、500ドル/トン台半ばで推移。4月に入り、インドネシア政府による買付増の見込みや、アセアン・アフリカ諸国からの需要の継続等から、4月中旬に520ドル/トン台前後まで値を上げた。その後、需要の軟化により値を下げ、4月下旬現在、510ドル/トン台前半で推移。

大豆は、3月末、540ドル/トン台前半で推移。3月31日に米国農務省が発表した作付意向面積及び四半期在庫が市場予想を下回ったこと、4月2日にOPECプラスが発表した原油の追加減産の方針等を受け、550ドル/トン台後半まで上昇。その後、ブラジルの豊作見通しや原油安等により下落し、4月下旬現在、550ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 370 万トン下方修正され 27.3 億トン。消費量は、前月予測から 120 万トン上方修正され 27.6 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り 27.4%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前月予測から、小麦で上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.3 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.6 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、コメで上方修正も、小麦とうもろこしで下方修正され、4.8 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.6 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

(注：数値は4月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.3 億トン。消費量は前年度を上回り 6.2 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り、18.8%となる見込み。

(注：数値は4月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：米国の穀物の作付け・生産と輸出動向

4月に入り、2023/24年度の米国のとうもろこしや大豆、春小麦などの作付けが開始された。3月末に公表された作付意向面積調査ではとうもろこし、小麦は前年度より増加する見通しで、今のところ作付け時の天候も良好とみられる。一方、輸出については、ロシアや豪州、ブラジルなどに押されている。米国の生産と輸出動向をまとめた。

注：文中の「2023/24年度」等は穀物年度で、米国の小麦は2023年6月から2024年5月。国や作物によって異なる(品目別需給編P.27参照)。

1 米国の作付け・生産動向

(1) 小麦

2023/24年度の作付意向面積は2018万ヘクタールと、前年度を9.0%上回り2015年以来の高水準となる見通し。特に生育期を迎えている冬小麦の作付面積は小麦相場の高騰などから前年度を12.8%上回る1,518万ヘクタールと大幅に増加した。一方、これから作付け期を迎える春小麦は2.3%減の428万ヘクタール、デュラム小麦は9.1%増の72万ヘクタールの見通し。

冬小麦の生育状況は、4月16日時点で出穂進捗率10%（前年同期7%）と進展している。4月4日時点の冬小麦の主産地の干ばつ比率は48%で、11月時点の75%よりは改善しているものの、作柄評価（良からやや良の比率）は27%と前年同期の32%を下回っている。

一方、春小麦の作付けは、4月16日時点では進捗率3%（前年同期8%）で、初期段階ではあるが前年と比べやや遅れている。

(2) とうもろこし

2023/24年度の作付意向面積は3,723万ヘクタールと前年度を3.8%上回る見通し。肥料価格の高騰等を受け減少した前年度から回復する見通し。主産地48州のうち40州で前年度から増加又は維持し、特に前年度豪雨で作付けできなかったノースダコタ州で増加した。

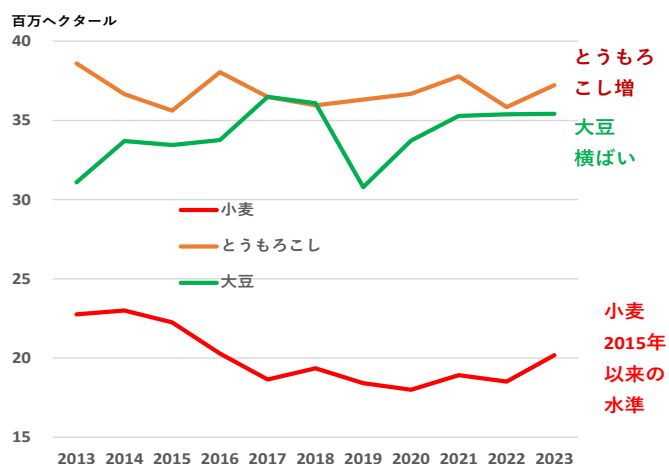
作付けは、4月16日時点で進捗率8%（前年同期4%）で、初期段階であるが前年と比べて進展している。

表1 米国の作付面積の推移（2023年は意向調査）

万ヘクタール、%				
品目	2021	2022	2023	対前年比
大豆	3,529	3,539	3,541	0.1
とうもろこし	3,778	3,585	3,723	3.8
小麦	1,892	1,851	2,018	9.0
冬小麦	1,363	1,346	1,518	12.8
その他春小麦	462	438	428	▲2.3
デュラム	66	66	72	9.1
綿花	454	557	456	▲18.1
コメ	102	90	105	16.7
長粒種	80	73	79	8.2
中粒種	21	16	24	50.0
短粒種	1	1	1	0.0
菜種	87	90	92	2.2

出典：米国農務省「PS&D」（2023.3）を農林水産省で加工

図1 米国の小麦、とうもろこし、大豆の作付面積の推移



出典：米国農務省「作付意向面積調査（2023.3）」を農林水産省で加工

(3) 大豆

2023/24年度の作付意向面積は、3,541万ヘクタールと前年度をわずかに上回る見通し。前年度豪雨で作付けが大きく減少したノースダコタ州で回復したものの、インディアナ州などで大きく減少するなど主産地の中西部で伸び悩んだことが要因とみられている。

作付けは、4月16日時点では進捗率4%（前年同期1%）となっている。

2 米国の輸出動向と期末在庫率

(1) 小麦

2022/23年度の輸出量は、2年連続で生産量が低水準であったことを受け、前年度比3.2%減の2,109万トンとなる見込み。輸出価格が他の輸出国と比べ競争力が乏しいため、輸出量は伸び悩んでいる。

期末在庫率は31.9%とここ数年低下している。

(2) とうもろこし

2022/23年度の輸出量は、夏季の高温乾燥の影響を受けた減産により前年度比25.9%減の4,699万トンと大きく減少した。世界の輸出に占めるシェアでも、増産が見込まれるブラジルに抜かれ2位に転落する見込み。

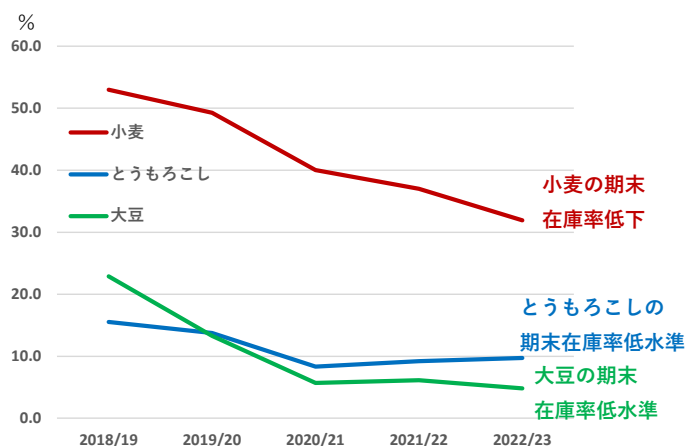
期末在庫率は9.7%と3年連続で10%を下回る低水準となっている。

(3) 大豆

2022/23年度の輸出量は、夏季の高温乾燥の影響を受けた減産により前年度比6.6%減の5,484万トンと減少した。世界の輸出に占めるシェアでもブラジルを大きく下回る見込み。

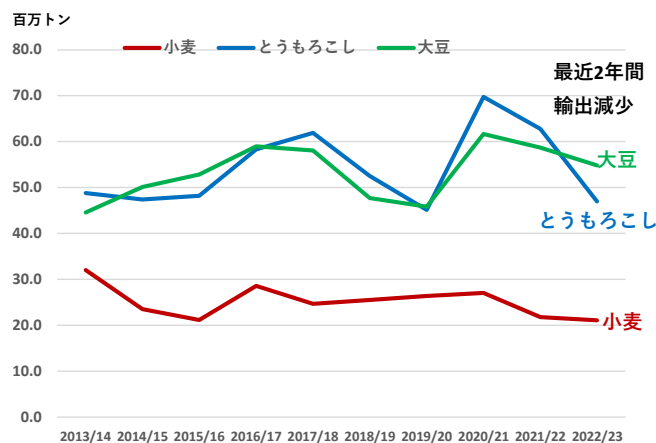
期末在庫率は4.8%と前年度期末在庫率（6.1%）を下回る低水準となっている。

図2 米国の小麦、とうもろこし、大豆の期末在庫率の推移



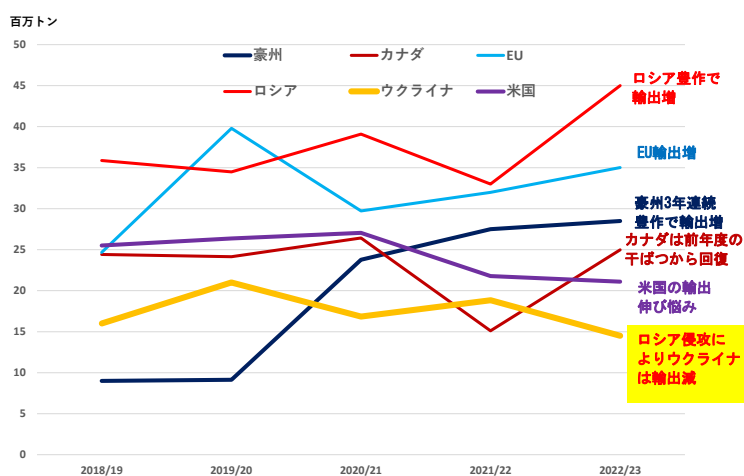
出典：米国農務省「PS&D」（2023.4）を農林水産省で加工

図3 米国の小麦、とうもろこし、大豆の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.4）を農林水産省で加工

図4 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.4）を農林水産省で加工

3 国際貿易の状況と輸入国の動向

(1) 小麦

輸出国では、史上最高の豊作となったロシアと3年連続豊作の豪州の輸出の増加が目立っている。ロシアは、輸出税の設定はあるものの、豊富な供給量を背景に、輸出価格について競争力があり、中近東向け輸出を増加させている。豪州は中国や東南アジアなど主要輸入国に地理的に近くフレートが安価になること等を背景として、2022年以降中国向け輸出を大幅に増加させている。

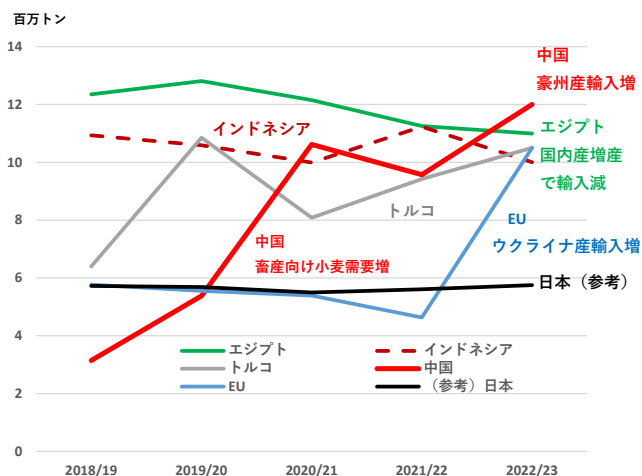
他の主要輸出国では、ロシアの侵攻を受けたウクライナと2年連続で生産量が低水準となった米国は輸出が減少するものの、小麦への干ばつ被害が少なかったEUや、2021/22年度の干ばつから一転して2022/23年度において天候に恵まれ増産となったカナダは輸出が増加する見通し。

主要輸入国では、USDAの4月見通しによると、中国が豪州産やカナダ産の輸入を増加させていることから、2022/23年度輸入量が1,200万トンとなり世界1位となる見通し。豪州等の主要輸出国の輸出価格が400ドル/トンを下回り、中国国内の小麦の取引価格の450ドル/トン、とうもろこしの取引価格400ドル/トンよりそれぞれ安価となり、飼料用としての小麦輸入が増えていることが要因。

以下、2位はエジプト(1,100万トン)、3位はトルコとEU(それぞれ1,050万トン)となっている。EUの小麦輸入増は、飼料向けにウクライナ産の輸入が増加したことが要因。

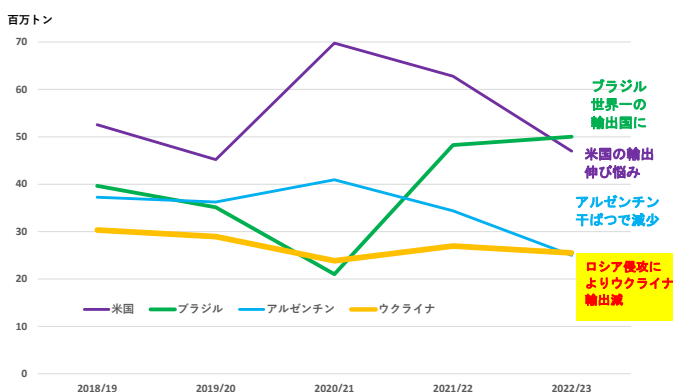
ただし、ウクライナと接するポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリアは、4月中旬に国内市場を保護するために、ウクライナ産農産物が国内市場に流入しないよう輸入を禁止した。なお、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア

図5 主要小麦輸入国の輸入量の推移（我が国9位）



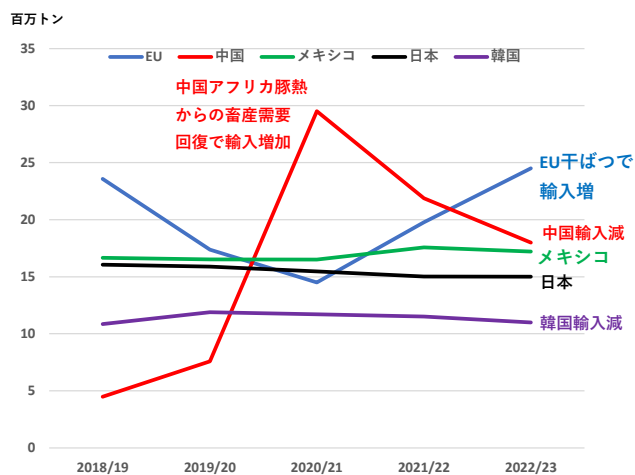
出典：米国農務省「PS&D」(2023.4)を農林水産省で加工

図6 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2023.4)を農林水産省で加工

図7 主要とうもろこし輸入国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2023.4)を農林水産省で加工

は、第3国向け（トランジット）のみ認めている。これに対し、欧州委員会は、輸入禁止対象を小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種に限定するなどの案を提示したところであり、今後のEU内での調整等の動向に注視する必要。

（2）とうもろこし

輸出国では、ブラジルが2年連続豊作見通しとなり、2022/23年度は、高温乾燥により減産となった米国を抜き、輸出量は5,000万トンと大豆とともに世界1位の輸出国になる見通し。前年末から中国向け輸出が開始されたが、本年の後半には輸出が本格化するとみられる。なお、主に輸出用として大豆収穫後に作付けされる冬とうもろこしは、現在、主産地の中西部のマット・グロッソ州で生育期を迎えており、3月から5月の降雨が単収を左右するが、今のところ生育状況はおおむね順調である。

一方、2022/23年度のアルゼンチンでは、ラニーニャ現象による干ばつの影響を受けて大きく減産となることに伴い、輸出量も減少する見込み。アルゼンチンのとうもろこし輸出は、8月以降黒海経由で輸出を実施しているウクライナを下回り、4位になる見通し。

主要輸入国では、EUは、2022/23年度の干ばつによるとうもろこしの減産に伴い輸入が大きく増加し、2022/23年度に史上最高の豊作で輸入増が一段落した中国を抜いて1位となっている。EU、中国ともにウクライナ産とうもろこしの主要輸入国であり、動向に注視が必要。

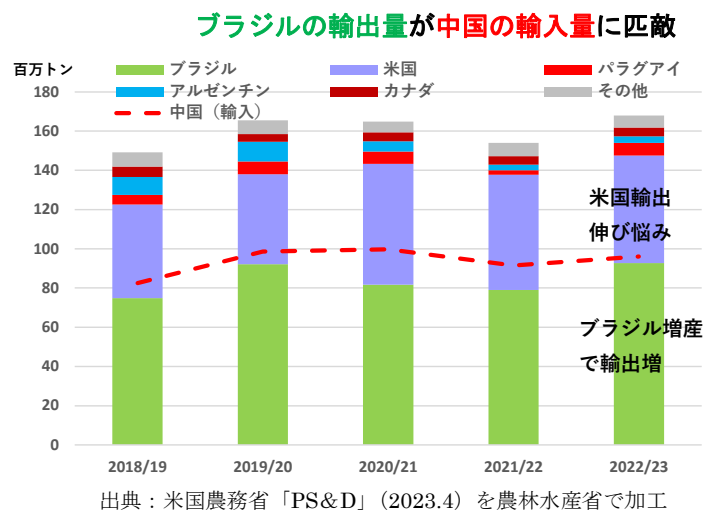
（3）大豆

輸出国では、ブラジルは、主産地のマット・グロッソ州等で生育期の適度な降雨に恵まれ、収穫も終了したことから、USDAの4月見通しによれば、2022/23年度の生産量が100万トン上方修正され1億5,400万トン、輸出量も前年度より大幅に増加し9,270万トンと、低調な米国の輸出量の減少分を補ってさらに余りある見通しとなり、世界の輸出量のうちブラジルが55%を占める見通し。一方、米国の輸出シェアは33%と大きく後退している。

他方、アルゼンチンはとうもろこし同様、干ばつの影響を受け、生産が減少するとともに、大豆粕、大豆油の加工向け輸入量が830万トンと大きく増加し、中国、EUに次ぐ世界3位の輸入国となる見通し。

なお、世界最大の輸入国である中国の2022/23年度の大豆輸入量は、9,600万トンの見通し。他方、2022年の海関統計では、大豆輸入量は前年比6%減の9,110万トンとなった。うち5,440万トンがブラジル産でシェアは6割。中国の習近平国家主席は、3月下旬にはロシア・プーチン大統領、4月上旬にはフランス・マクロン大統領、同月中旬にはブラジル・ルーラ大統領とそれぞれ会談した。いずれもウクライナ情勢や中国の農産物の安定的な輸入関連も含めて議論が行われたとみられる。特にブラジルに関しては、大豆のみならず、とうもろこしに続き、たんぱく飼料原料の輸入検疫に合意するとともに、ソルガムやコメなどの輸入についても検疫協議が促進されるとみられる。背景には、中国が穀物などの米国産の輸入比率を低下させる意向もあるとみられており、引き続き注視が必要。

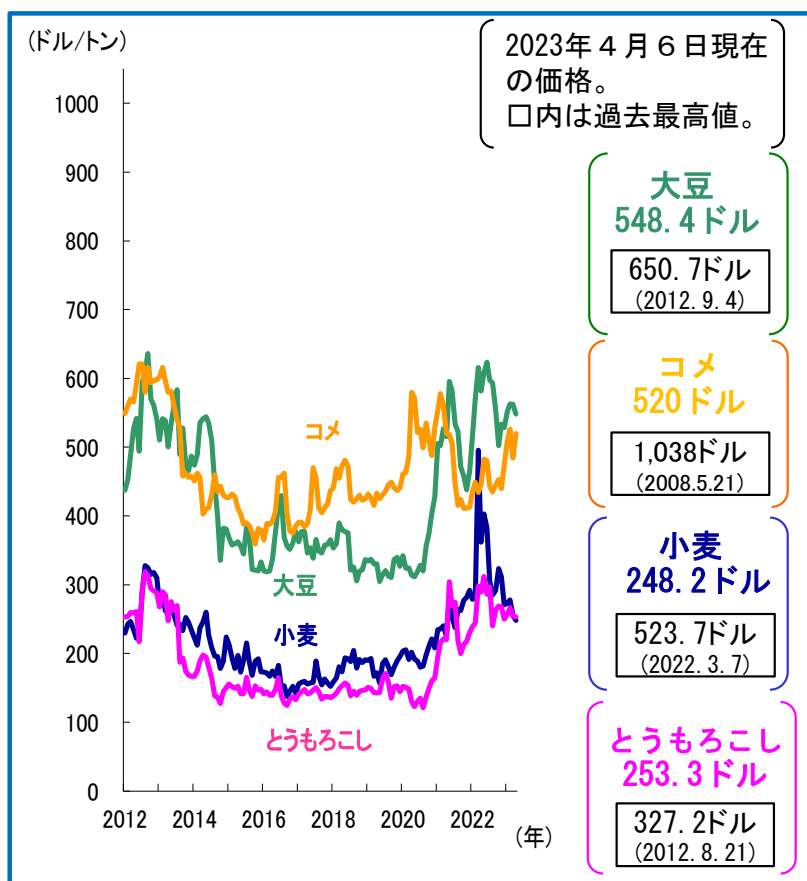
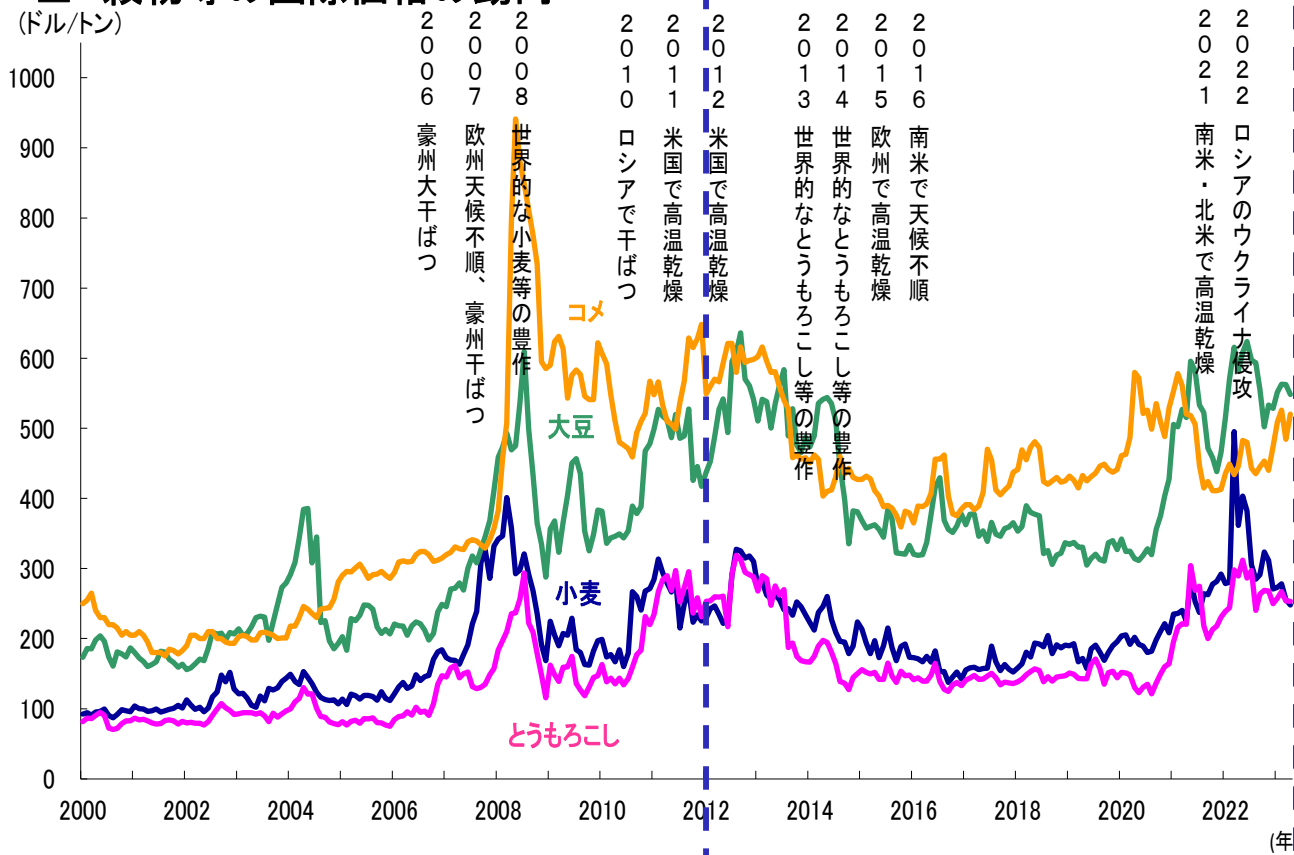
図8 主要大豆輸出国の輸出量の推移



資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下も、2022年9月以降、パキスタンの洪水やインドの輸出規制を背景に徐々に値を上げ、その後横ばいで推移。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



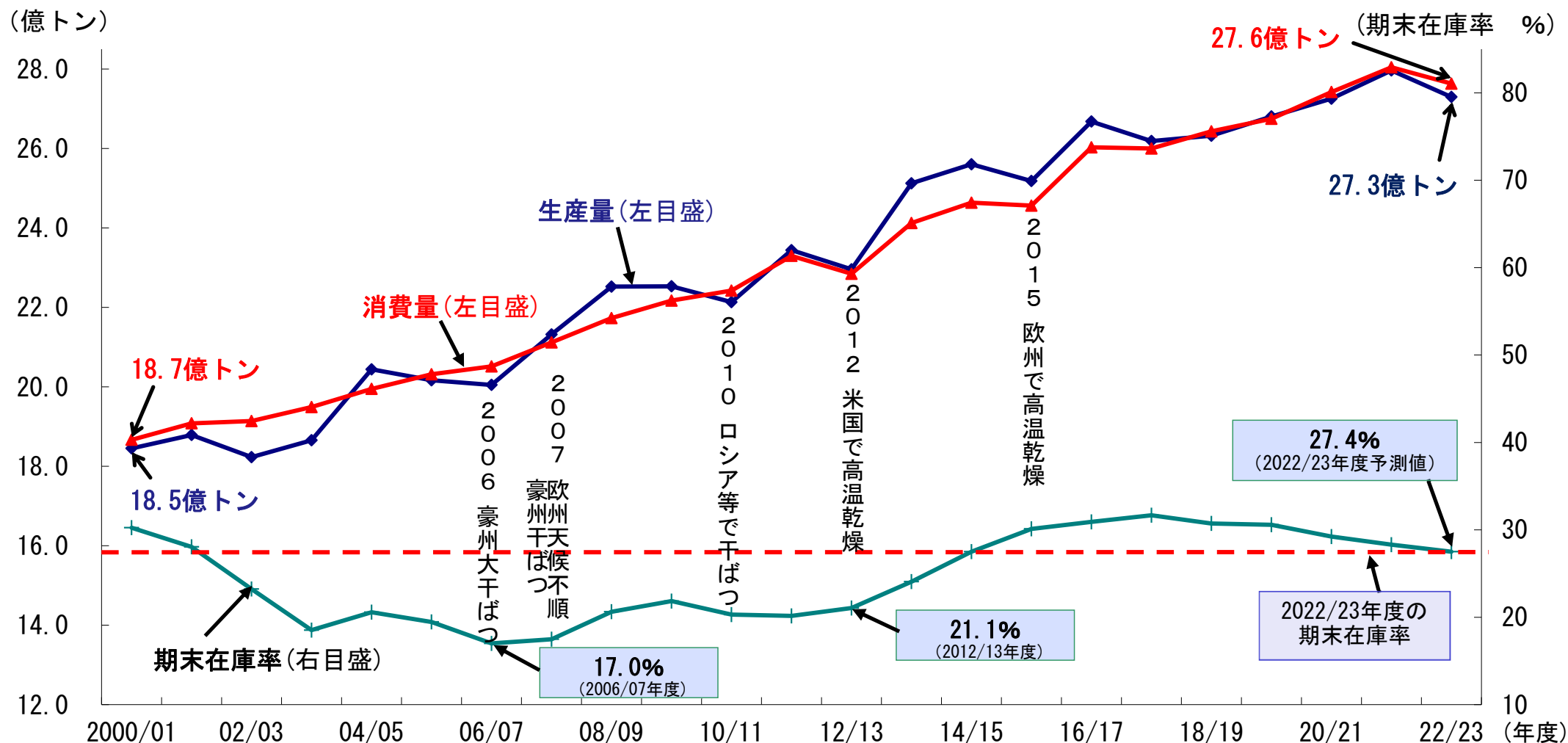
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セトルメント）である（但し、4月は7日が休場であったため、6日の価格）。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.5%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

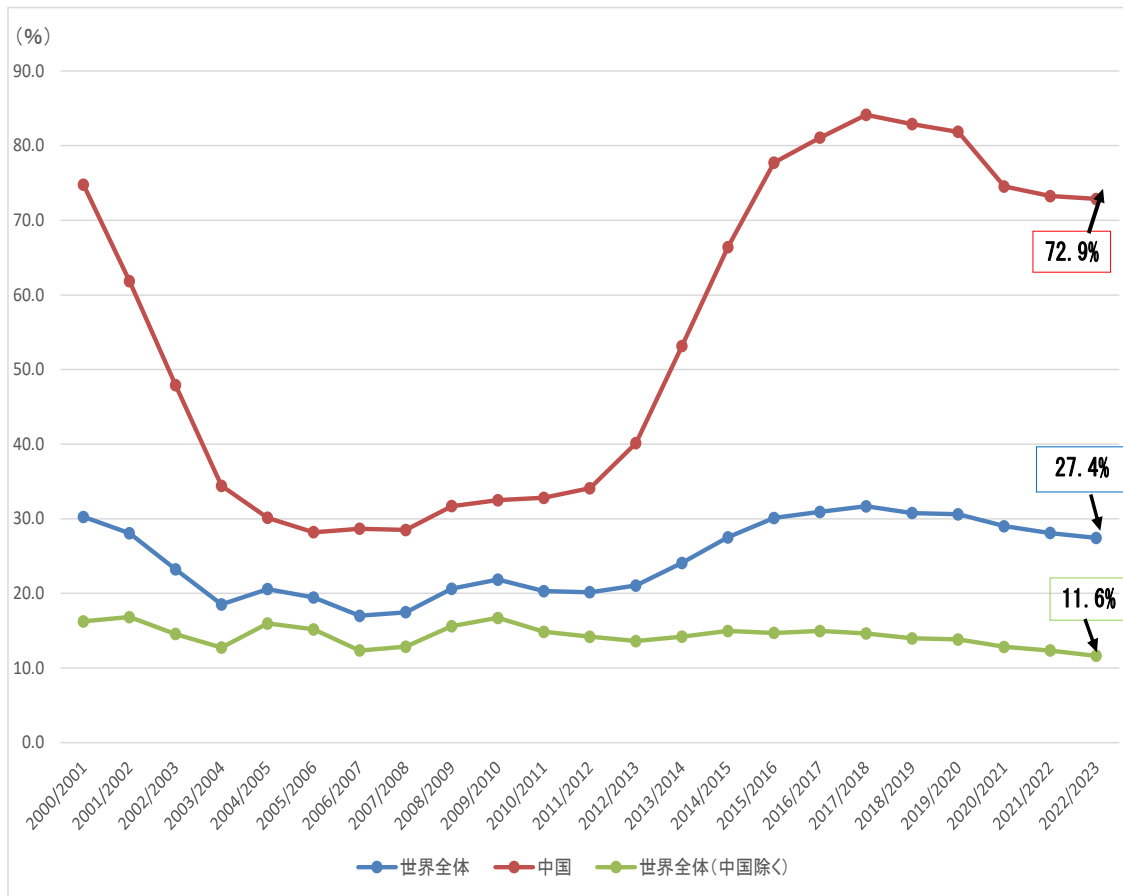


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(April 2023)、「PS&D」

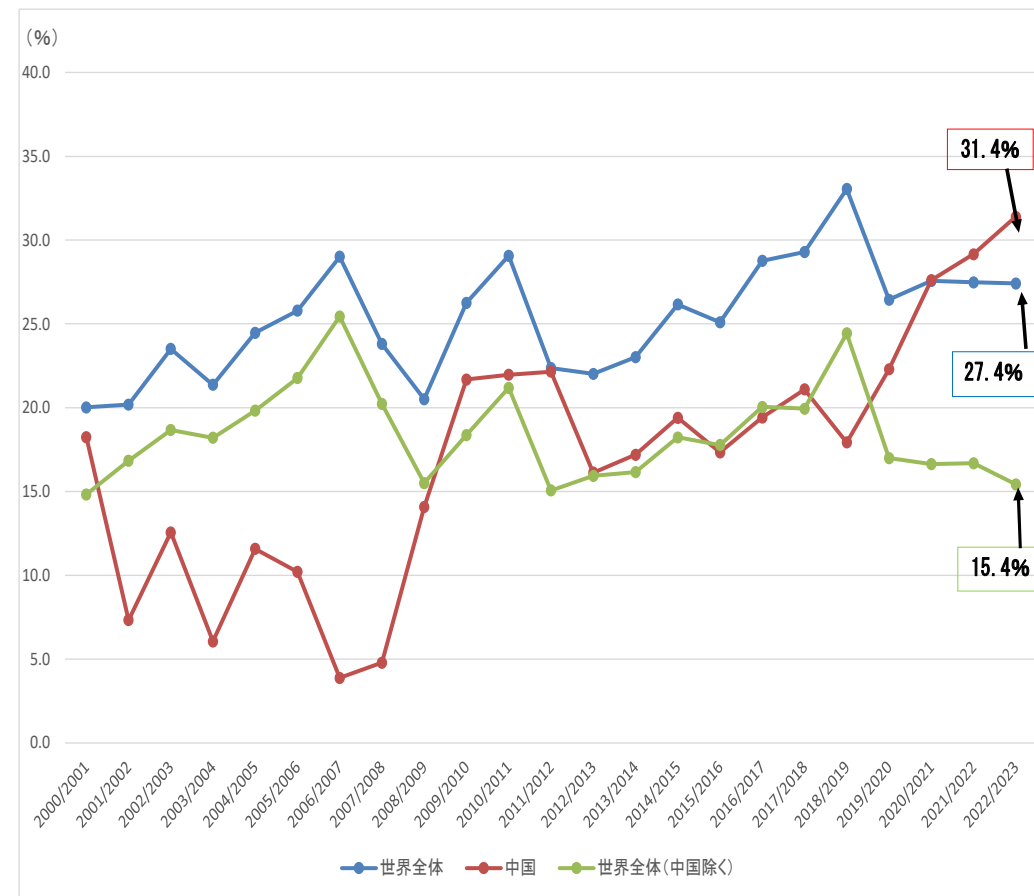
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。 - 10 -

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(April 11, 2023)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

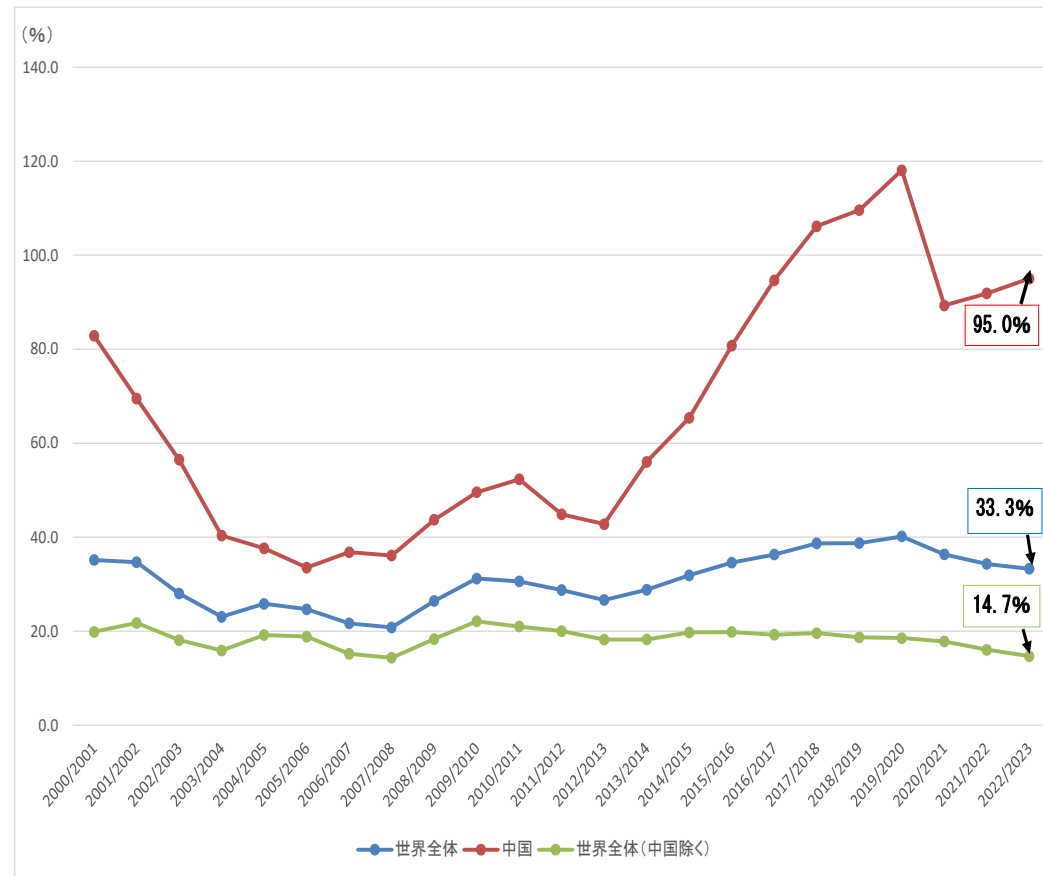
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

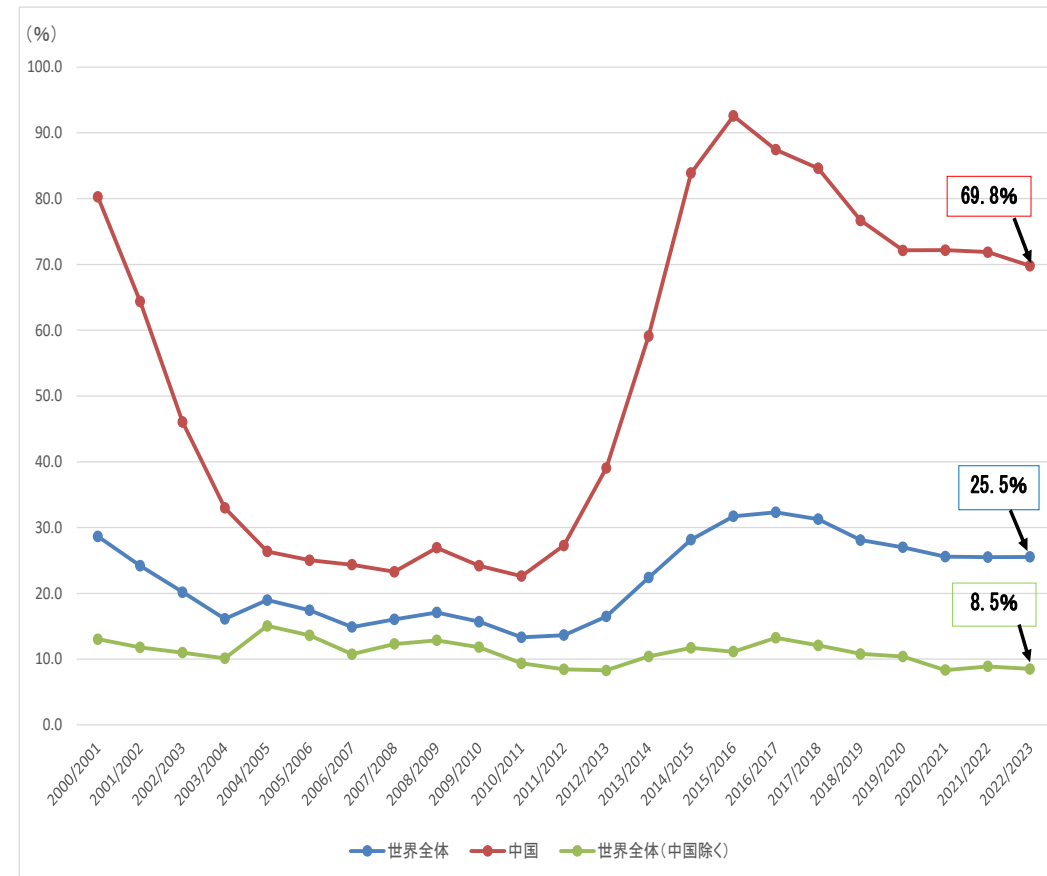
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(April 11, 2023)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

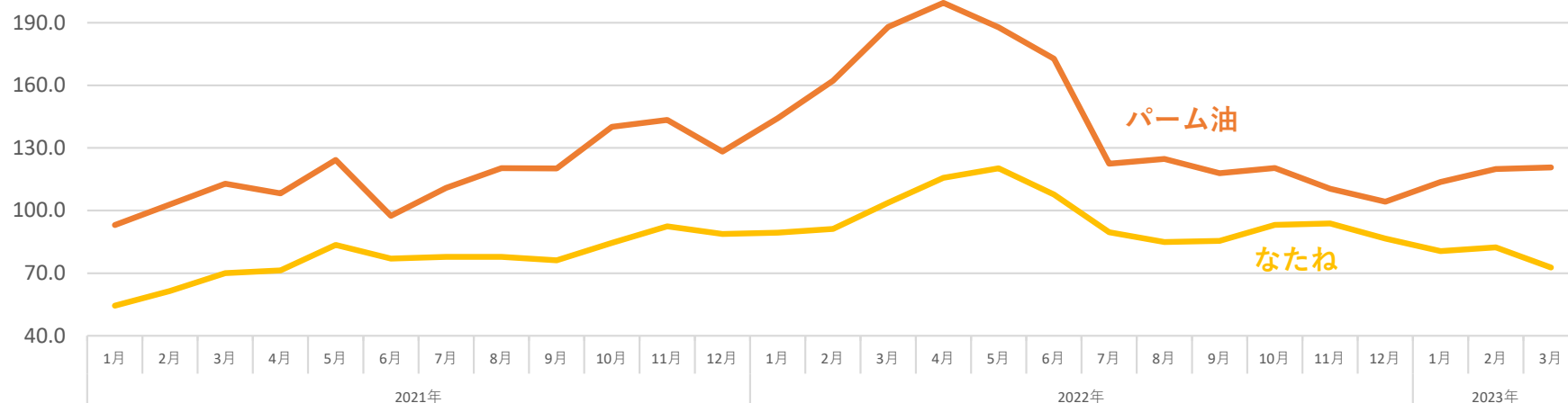
3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 4－1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年に熱波による減産があったが、2022年は回復基調から平年並みの収量に近づいた**。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも前年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことにより市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。

(千円/トン)

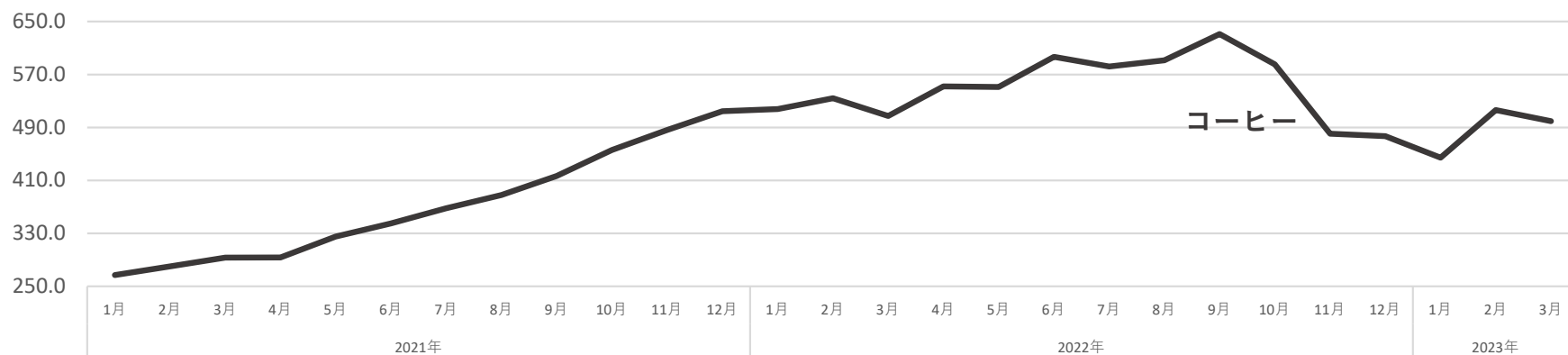


2023年4月20日現在
□内は2020年4月以降の最高値。

パーム油
120.6 千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
72.8千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

(千円/トン)



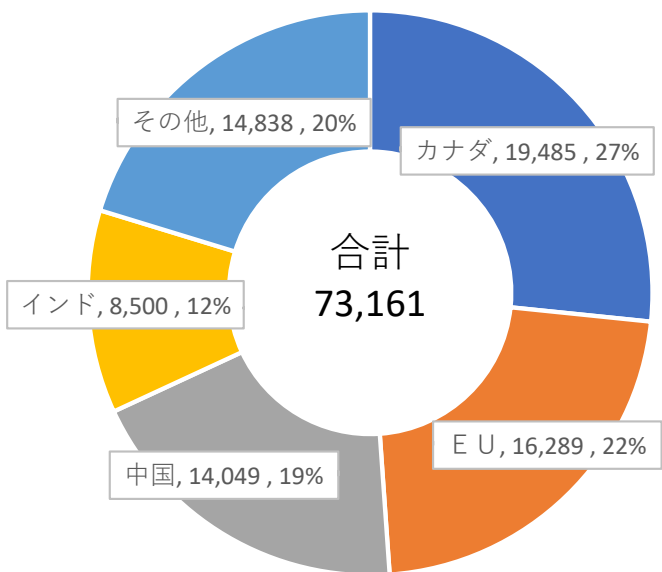
コーヒー
499.6千円/トン
631.1千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィネペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

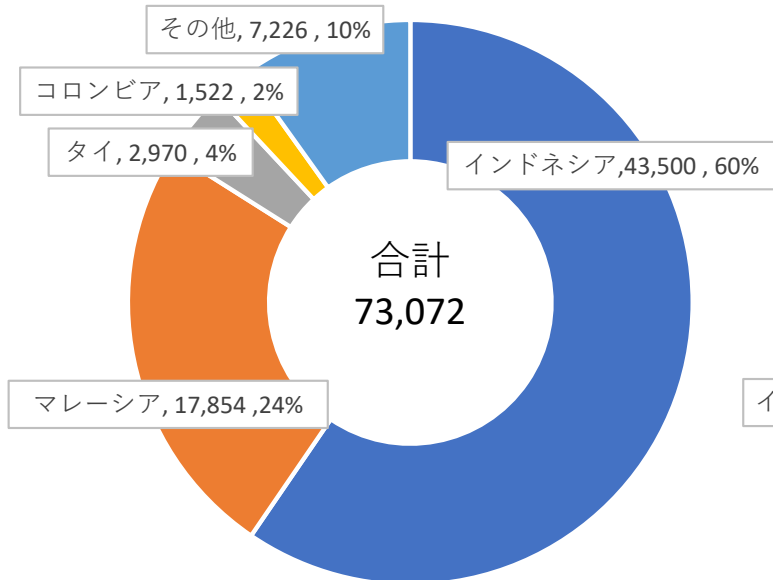
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



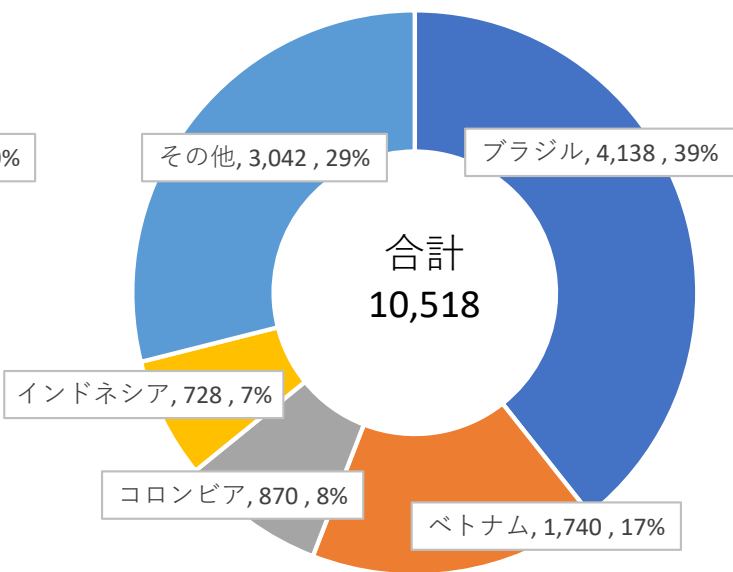
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コーヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
 注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
 2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年3月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.9～164.3（前年同月比で－0.9%～24.3%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年10月～令和5年3月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4			R5			
品目	平均	平均	平均	平均	平均	10月	11月	12月	1月	2月	3月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	113.7	114.2	114.1	115.0	115.0	114.3	6.7%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	112.3	114.2	111.6	113.1	114.6	113.1	12.2%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	108.3	109.1	109.9	110.3	110.4	112.0	8.8%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	160.2	162.7	162.5	164.0	163.9	164.3	24.3%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	103.6	104.9	104.4	104.5	105.9	106.5	6.5%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	133.7	136.1	137.4	137.3	137.2	139.0	15.6%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	117.1	118.6	117.5	119.2	121.4	121.9	22.7%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	98.8	98.5	98.7	98.6	98.6	98.9	－0.9%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	106.7	107.9	108.3	108.7	109.4	110.2	8.2%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年10月～令和5年4月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4			R5					
品 目	平均	平均	平均	平均	平均	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	110.9	111.3	112.2	111.5	110.7	111.3	111.3	0.0%	5.9%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	110.0	110.6	110.6	111.2	111.2	110.6	110.6	0.0%	11.7%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	107.2	107.2	107.6	108.5	108.1	110.2	113.7	3.2%	11.9%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	160.6	161.2	161.2	162.2	162.2	161.9	161.2	-0.4%	24.4%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	102.5	102.7	102.7	102.3	103.4	103.6	105.2	1.5%	6.3%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	126.2	128.9	128.3	129.6	128.9	130.3	137.9	5.8%	17.7%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	114.4	115.4	110.9	116.9	118.4	117.9	129.3	9.7%	23.1%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	98.6	98.6	98.6	98.6	98.6	98.4	108.9	10.7%	9.7%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2023年5月号（4月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）低調な牛肉輸出、今後も継続と予測

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002703.html

（カナダ）雌牛を中心に総飼養頭数が減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002704.html

（豪州）降雨量の減少予測などを背景に、肉牛価格は下落傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002705.html

（ウルグアイ）22年の牛肉輸出量は後半減速し、前年比8.5%減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002706.html

◆豚肉

（EU）繁殖母豚頭数は3年連続の減少、豚肉生産量は減少基調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002707.html

◆鶏肉

（タイ）22年の鶏肉生産量および輸出量は増加も鶏肉価格は下落傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002708.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）乳価はピーク時から下落基調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002709.html

（EU）生乳出荷量は5カ月連続で前年同月を上回り、乳価は下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002710.html

（NZ）22/23年度の生乳生産量、シーズン後半で好調に転じる

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002711.html

（中国）乳製品需給の緩和から乳価の下落傾向強まる

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002712.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）ブラジルと米国の輸出量の差が拡大し、5000万トンを見込む

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002718.html

（世界：大豆）大豆期末在庫は1億トン台を維持も、アルゼンチンは3カ月連続下方修正

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002719.html

（米国）米国の輸出量は前月から下方修正され、期末在庫は若干回復

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002720.html

（ブラジル）2022/23年度トウモロコシ、大豆生産は作業遅れが見られるものの、過去最大の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002722.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002721.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2023.4)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比 前月比

- ・サウジアラビア等で下方修正されたものの、エチオピア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

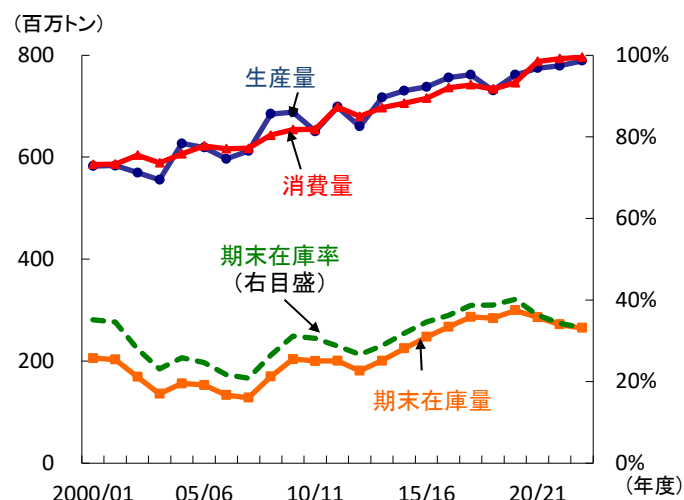
消費量 前年度比 前月比

- ・ロシア、インドネシア等で下方修正されたものの、インド、中国、EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

- ・ロシア、ウクライナ等で上方修正されたものの、EU、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。依然として、史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比



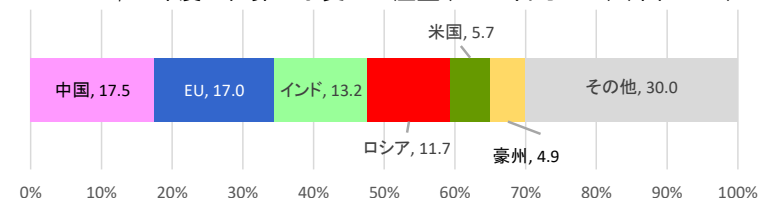
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

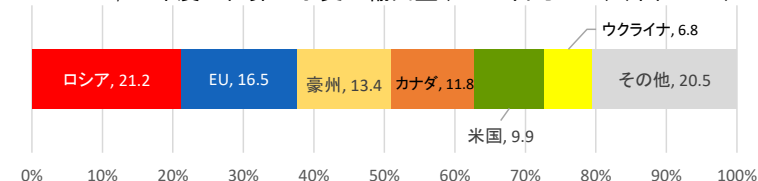
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	774.4	779.1	789.0	0.1	1.3
消 費 量	787.7	793.4	796.1	2.9	0.3
うち飼料用	163.7	161.5	160.3	1.8	▲ 0.7
輸 出 量	203.4	202.9	212.7	▲ 1.2	4.8
輸 入 量	194.8	199.2	206.3	▲ 2.1	3.5
期末在庫量	286.3	272.1	265.1	▲ 2.1	▲ 2.6
期末在庫率	36.3%	34.3%	33.3%	▲ 0.4	▲ 1.0

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (11 April 2023)

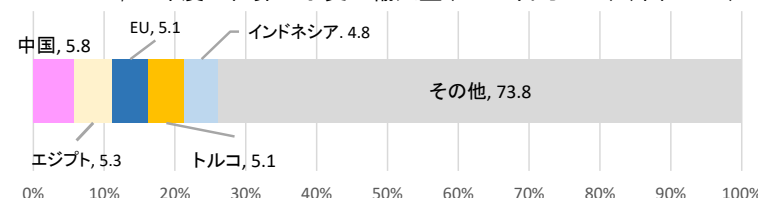
○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量(789.0百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量(212.7百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量(206.3百万トン)(単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の小麦の作付意向面積は前年度比 9 %増加

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく 44.9 百万トン。前年度に比べ 0.2%増加したものの、2003/04 年度以降で 2021/22 年度に次ぐ低水準。種類別には冬小麦が 30.0 百万トン、春小麦が 13.1 百万トン、デュラム小麦が 1.7 百万トン。

同「Prospective Plantings」(2023.3.31)によれば、2023/24 年度の小麦の作付意向面積は、20.18 百万ヘクタール(前年度比 9.0%増)。種類別では、冬小麦が 15.18 百万ヘクタール(同 12.8%増)、デュラム小麦が 0.72 百万ヘクタール(同 9.1%増)、春小麦が 4.28 百万ヘクタール(同 2.3%減)。冬小麦は、価格水準が高く収益が見込めることから、「Winter Wheat and Canola Seedings」(2023.1.12)の予想面積(14.95 百万ヘクタール)から 2 %上方修正され、2017/18 年度以降最高となる見込み。

同「Wheat Outlook」(2023.4.13)によれば、冬小麦の生産地では、依然として干ばつの影響が懸念されている。干ばつ地域にある冬小麦生産地の割合は、前年 11 月には約 75%に高まったが、ここ数か月でその割合は減少し、4 月 4 日現在、48% (前年度同時期 69%) となった。一方で、評価基準で最も厳しい「例外的な干ばつ」とされた地域にある小麦の作付面積の割合は 15%(前年度同時期 2%)と前年度に比べ増加している。

「Crop Progress」(2023.4.18)によれば、冬小麦の作柄評価(やや良い～良)は 27%と前年度(30%)に比べ 3 ポイント減少し、最も低かった 1996 年と並んでいる。州別には、テキサス州、モンタナ州では前年度より改善しているものの、干ばつが継続している影響でカンザス州、オクラホマ州等で作柄評価は悪化している。なお、現在の作柄評価と最終の単収との相関関係は限定的で、今後の天候が単収を決める重要な要因となる。

また、春小麦の作付けが開始されているものの、主要生産 6 州の作付進捗率は低温や積雪により作業が限定的なことから、3 %と前年度同時期の 8 %、過去 5 年平均の 7 %を下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、21.1 百万トンの見込み。他の主要輸出国に比べ輸出競争力が弱いいため、1972/73 年度以降最低の水準となる見込み。2022 年 6 月から 2023 年 3 月までの累計輸出量は、ほぼ前年度並みで過去 5 年平均を下回っている。2023 年 3 月の輸出先国は、メキシコ(18.5%)、中国(17.6%)、フィリピン(13.6%)の順。

小麦一米国(冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年6月～23年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	49.8	44.8	44.9	-	0.2
消費量	30.4	29.6	29.9	▲ 0.7	1.1
うち飼料用	2.5	1.6	1.5	▲ 0.7	▲ 6.3
輸 出 量	27.1	21.8	21.1	-	▲ 3.2
輸 入 量	2.7	2.6	3.4	0.1	31.3
期末在庫量	23.0	19.0	16.3	0.8	▲ 14.4
期末在庫率	40.0%	37.0%	31.9%	2.0	▲ 5.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	14.89	15.03	14.36	-	▲ 4.5
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.13	-	5.0

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(11 April 2023)

図:米国产小麦の作付面積の推移(2012/13～2023/24 年度)

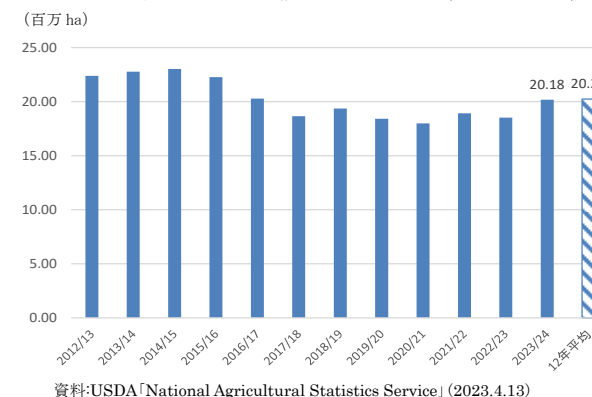
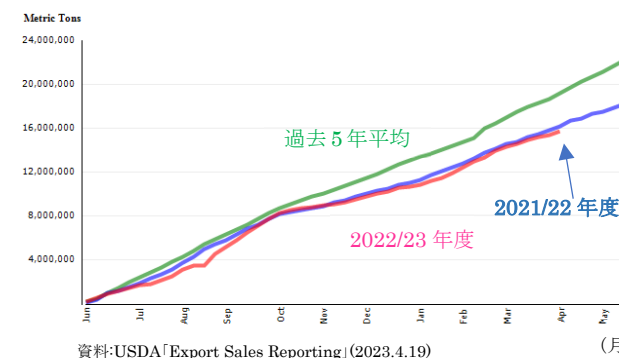


図:米国产小麦の輸出量の推移



＜ カナダ ＞ 2022/23 年度の春小麦・デュラム小麦の品質は良好

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.4.21)によれば、2022/23 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく、33.8 百万トン(前年度比 50.8%増、過去 5 年平均比 10.3%増)の見込み。品種別の生産量は、普通小麦が 28.4 百万トン、デュラム小麦が 5.4 百万トン。それぞれ干ばつの影響を受けた前年度から、収穫面積及び単収が増加した。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission: CGC)によれば、普通小麦及びデュラム小麦の品質は非常に良好で、それぞれ 93%、81%が 1、2 等に格付けされた。また、タンパク質含有量は、普通小麦は平均以上の 13.8%、デュラム小麦は平均レベルの 13.7%に回復した。

また、AAFC によれば、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、平年並みの天候に恵まれれば、前年度に比べ 1.5 %増の 34.3 百万トン。そのうち、普通小麦は播種面積が増加することから、同 1.8%増の 28.9 百万トン、デュラム小麦は、播種面積が他の作物の作付けへのシフトにより減少するものの、単収が上昇し、同 0.1%増の 5.4 百万トン。なお、生産量予測は、作付意向調査の結果をもとに 5 月に更新される。

USDA によれば、小麦主要生産地の平原 3 州では、低温に見舞われている他、3 月 31 日現在 83%が干ばつ状況にあり、小麦の播種、初期成育には融雪と今後の降雨が必要とされている。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度に比べ 61.2%増加の 24.4 百万トン。そのうち、普通小麦は好調な輸出ペースが継続しているため、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度に比べ 58.9%増加の 19.6 百万トンとなる見込み。また、デュラム小麦は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 76.7%増加の 4.8 百万トンの見込み。

CGC によれば、2022 年 8 月～2023 年 2 月の輸出量は、普通小麦が 11.6 百万トン、デュラム小麦が 3.2 百万トンの計 14.8 百万トン。種類別の輸出先国は、普通小麦は中国(19%)、インドネシア(7%)、日本(7%)の順で、アジア向けが多い。デュラム小麦は、イタリア(32%)、アルジェリア(16%)、モロッコ(15%)の順で、イタリアや北アフリカ向けが多い。

また、AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、前年度に比べ 1.6%減の 24.0 百万トンの見込みで、普通小麦が前年度と変わらず 19.6 百万トン、デュラム小麦は、欧州、米国との競合から減少が見込まれ、同 8.3%減少の 4.4 百万トンの見込み。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

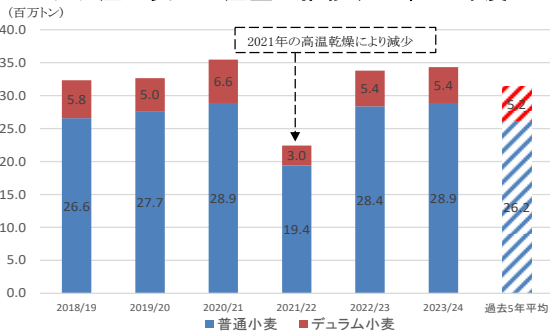
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、() は AAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	35.4	22.4	33.8 (33.8)	-	50.8
消費量	9.1	10.2	9.6 (8.9)	-	▲ 5.9
うち飼料用	4.2	5.2	4.5 (4.5)	-	▲ 12.6
輸出量	26.4	15.1	25.0 (24.4)	-	65.3
輸入量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1
期末在庫量	6.0	3.7	3.5 (4.3)	-	▲ 3.3
期末在庫率	16.7%	14.5%	10.2% (12.9%)	-	▲ 4.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.02	9.20	10.08 (10.08)	-	9.6
単収(t/ha)	3.54	2.44	3.35 (3.35)	-	37.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(11 April 2023)

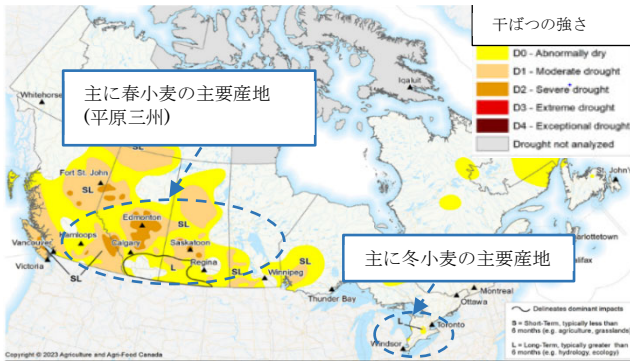
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(21 April 2023)

図 カナダ産小麦の生産量の推移 (2017/18 年度～2023/24 年



資料:AAFC 「OUTLOOK FOR PRINCIPAL FIELD CROPS」(2023.4.21)

図 カナダの干ばつ状況 (2023 年 3 月 31 日現在)



資料:AAFC 「Canadian Drought Monitor」(2023.3.31)

＜ 豪州 ＞2022/23 年度の生産量は史上最高の 39.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、39.0 百万トンと前年度の 36.2 百万トンを 7.6% 上回り、史上最高の見込み。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2023.3.7)によれば、2022/23 年度の実生産量は史上最高の 39.2 百万トンの見込み。

主要生産州では、ウェスタンオーストラリア州(WA 州)の実生産量は、良好な天候に恵まれたことから、史上最高であった前年度を 7% 上回る 13.8 百万トン(過去 5 年平均比 52.6% 増)の見込み。なお、春の低温により、タンパク質含有量が昨年より低い水準となった。また、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)の実生産量は、10.3 百万トンと前年度を 15% 下回るものの、過去 5 年平均を 53.9% 上回る見込み。懸念された洪水による品質への影響は、例年に比べ、同州中部及び南部で低タンパク質の小麦の割合が増加したものの、同州北部では高タンパク質含有量の小麦の割合は例年並みとなった。

豪州の小麦の作付けは、例年 4 月中旬から開始され 5 月にほぼ終了する。2023/24 年度の作付け前の 4 月半ば、小麦生産地域全体でにわか雨が多くなり、サウスオーストラリア州、WA 州では作付け前の土壌に水分が供給された。このため、地中の土壌水分量は平均値を上回っている。

なお、豪州気象局によれば、2022 年に記録的な降雨をもたらしたラニーニャ現象は終息し、乾燥天候となるエルニーニョが発生する可能性がある。ABARES「Agricultural commodities」(2023.3.7)によれば、乾燥天候になった場合、2023/24 年度の実生産量は 28.2 百万トンと前年度に比べ減少する見込み。

GIWA(ウェスタンオーストラリア州穀物団体)(2023.4.7)によれば、大麦価格が引き続き上昇しない限り、ここ数年続いた大麦から小麦へのシフトは 2023/24 年度も継続すると見られている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、4 月 5 日現在の豪州産の輸出価格(FOB)は、韓国と東南アジアにおける飼料用小麦の需要減退により、3 月 3 日から 10 ドル/トン低下し、329 ドル/トン。

2022/23 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、豊富な輸出余力から、史上最高の 28.5 百万トンとなる見込み。豪州産の輸出小麦は、豪州東部(NSW 州等)での生育期後半の降雨で品質が低下したため、輸出量に占める飼料用グレードの小麦の割合が平年以上となった。豪州は、主要なアジア市場に地理的に近く他の主要輸出国に比べ輸送コストが低いため、飼料グレード小麦を含むオーストラリア産小麦に対する東南アジアおよび東アジアからの需要は強い。

小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位: 百万トン)

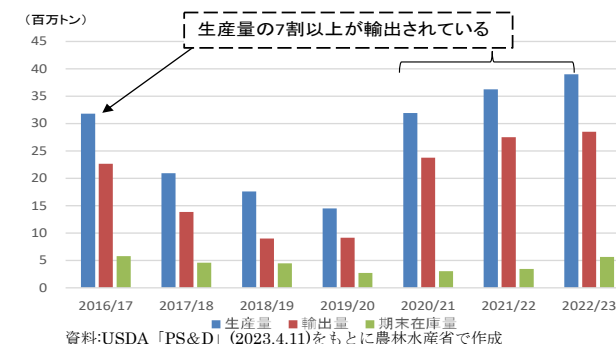
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年10月～23年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	31.9	36.2	39.0 (29.3)	-	7.6
消 費 量	8.0	8.5	8.5 (7.8)	-	▲ 0.4
うち飼料用	4.5	5.0	5.0 (4.2)	-	-
輸 出 量	23.8	27.5	28.5 (19.4)	-	3.6
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	▲ 4.8
期末在庫量	3.0	3.4	5.6 (5.9)	-	64.1
期末在庫率	9.5%	9.5%	15.2% (21.6%)	-	5.7

(参考)

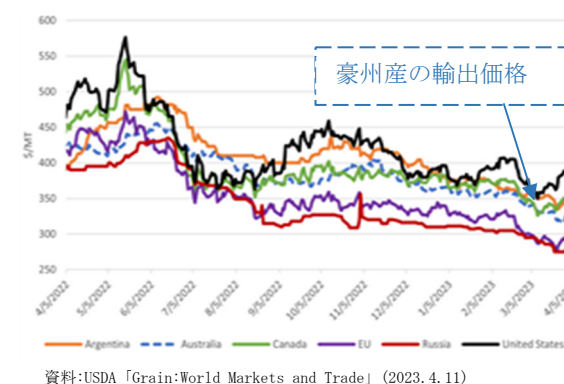
収穫面積(百万ha)	12.64	12.73	13.00 (13.0)	-	2.1
単収(t/ha)	2.52	2.85	3.00 (3.00)	-	5.3

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

図：豪州の生産量、輸出量、期末在庫量の推移



図：小麦主要輸出国の輸出価格(FOB)の推移



< EU27 > 2022/23 年度の輸出量はロシア等との競合により下方修正

【生育・生産状況】欧州委員会(2023.3.30)によれば、EU27 の 2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 2.9%減少の 134.1 百万トンの見込み。そのうち、普通小麦、デュラム小麦の実産量は、それぞれ 126.9 百万トン、7.1 百万トンの見込み。また、前年度に比べると、普通小麦は全体で 2.4%減少し、国別には、主にポーランドで 10.4%、ドイツで 5.2%増加したものの、スペインで 27.7%、ルーマニアで 12.1%、フランスで 4.9%減少した。一方、デュラム小麦は全体で 11.4%減少し、国別には、主にフランスで 15.9%、イタリアで 9.2%減少した。

2023/24 年度の実産量は、2022/23 年度に比べ 4.0%増加の 139.5 百万トンの見込み。そのうち、普通小麦は同 3.9%増加の 131.9 百万トン、デュラム小麦は同 5.5%増加の 7.5 百万トンの見込み。

生育状況は、3 月から 4 月上旬までの降雨で干ばつの懸念がなくなったフランス、ドイツでは、3 月末以降は例年と比べ気温が低く、生長が緩やかに進んでいる。一方、ポーランド等では 3 月下旬の気温が例年より高くなり、再生長が促進された。なお、スペイン、ポルトガルでは干ばつが続いている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/ 23 年度の輸入量は、前月予測から 1.5 百万トン上方修正され 10.5 百万トンと、前年度(4.6 百万トン)に比べ約 2 倍の増加。輸入されたウクライナ産小麦は、2022 年の高温乾燥で減産となった飼料向け EU 産とうもろこしの代替となるとみられる。

また、2022/23 年度の輸出量は、ロシア等の黒海諸国との競合から、前月予測から 2.0 百万トン下方修正され 35.0 百万トン。欧州委員会によれば、輸出先国は、普通小麦はアルジェリア(19.4%)、モロッコ(18.7%)の順で、北アフリカ諸国向けが多い。また、デュラム小麦はイスラエル(14.5%)、チュニジア(22.1%)、リビア(13.3%)の順で、中東、アフリカ向けが多い。

なお、4 月 5 日現在の EU 産の輸出価格 (FOB) はロシア、ウクライナの黒海諸国との価格競争が継続しており、3 月 3 日時点の 300 ドル/トンから 15 ドル/トン低下し、285 ドル/トンとなった。

ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題について、欧州委員会は 3 月、ブルガリア、ポーランド、ルーマニアの農家に対して、補助金の拠出を決定。一方、4 月中旬、ポーランド、ブルガリア、ハンガリー、スロバキアは、自国農業の保護を目的にウクライナ産穀物等の国内輸入禁止措置を発表。その後、欧州委員会は、6 月 30 日までのウクライナ産の小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種の輸入禁止措置（第 3 国へのトランジットを除く）案を提示した。

小麦－EU27（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	126.7	138.2	134.3 (133.7)	▲ 0.4	▲ 2.8
消 費 量	104.8	108.3	111.0 (108.4)	2.0	2.5
うち飼料用	42.5	45.0	47.0 (44.5)	2.0	4.4
輸 出 量	29.7	32.0	35.0 (34.4)	▲ 2.0	9.4
輸 入 量	5.4	4.6	10.5 (8.8)	1.5	126.8
期末在庫量	10.7	13.3	12.2 (15.6)	1.1	▲ 8.7
期末在庫率	8.0%	9.5%	8.3% (11.0%)	0.8	▲ 1.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	22.97	24.28	24.35 (24.17)	0.05	0.3
単収(t/ha)	5.51	5.69	5.52 (5.53)	▲ 0.02	▲ 3.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

図 EU27 の普通小麦及びデュラム小麦の輸出先

(普通小麦)

2023年1月			2022年7月～2023年1月		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
アルジェリア	40.6	19.4%	モロッコ	287.3	14.2%
モロッコ	39.3	18.7%	アルジェリア	267.2	13.2%
ナイジェリア	21.6	10.3%	エジプト	162.9	8.1%
ヨルダン	8.5	4.1%	ナイジェリア	157.9	7.8%
中国	7.9	3.8%	サウジアラビア	106.7	5.3%
スーダン	6.6	3.1%	中国	103.0	5.1%
その他	85.0	40.6%	その他	932.6	46.2%
総計	209.5	100.0%	総計	2,017.6	100.0%

(デュラム小麦)

2023年1月			2022年7月～2023年1月		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
チュニジア	1.0	22.1%	イスラエル	6.5	12.4%
リビア	0.6	13.3%	アラブ首長国連邦	6.3	12.1%
サウジアラビア	0.5	12.0%	チュニジア	5.4	10.3%
トルコ	0.5	10.5%	タンザニア	4.9	9.3%
スイス	0.4	9.4%	英国	3.5	6.6%
マリ	0.3	6.4%	アルジェリア	3.1	6.0%
その他	1.2	26.4%	その他	22.5	43.1%
総計	4.5	100.0%	総計	52.1	100.0%

資料：EU 委員会 Cereals export and imports(2023.3.20)をもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2022/23 年度の輸入量は、豪州からの輸入が増加し上方修正

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 0.6%増加の 137.7 百万トンと史上最高となる見込み。中国国家糧食物資備蓄局によれば、品質評価は、収穫された小麦の 63%が 1 等となり、全体の 96%以上が 3 等以上となった。

USDA 「Grain and Feed Annual」(2023.4.6)によれば、2023/24 年度の実産量は、単収の上昇と安定した作付面積の継続から、前年度をわずかに上回る見込み。生産コストは増加しているものの、価格水準が高く、高い収益性が見込まれることから、冬小麦の作付面積は前年度と同様の 22 百万ヘクタールとなっている。

3 月初旬の冬小麦の生育状況は、前年度に比べ良好で、3 月末現在、南東部の生産地域では分げつ期から出穂期を迎え、中部及び東部では再生長期に入っている。天候も良好で降水量も十分であるものの、春の気温が平年よりも高くなるとみられ、さび病や病害の発生が懸念されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸入量は、豪州からの輸入増により前月予測から 2.0 百万トン上方修正され、前年度を 25.4%上回る 12.0 百万トンとなり、史上最高の 1995/96 年度の 12.5 百万トンに迫る見込み。輸入量は、2020/21 年度に 10.6 百万トンと前年度(5.4 百万トン)から大きく増加し、2022/23 年度には、世界の輸入量に占める中国の割合は世界第 1 位となった。

この輸入量の増加は、豊作が 3 年連続した豪州や、EU、カナダの豊富な輸出余力で、最近数か月、小麦の国際価格が 400 ドル/トン以下となり、中国国内の小麦、とうもろこしの取引価格を下回ったことによるとみられる。輸入量は、前年 7 月から本年 2 月までで、前年同期比で豪州産は 66%増加、カナダ産は 83%とそれぞれ増加した。

なお、中国の一部飼料メーカーは、飼料に配合するとうもろこしを相対的に安価な輸入小麦で代替したものの、とうもろこしの飼料用消費の回復に伴い、小麦の飼料向け消費は前年比で減少している。しかし、飼料用の小麦消費量は小麦消費量の 22%を占める。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 2 月号」によれば、2 月の国内市場に小麦は十分に供給された一方、小麦粉の販売は低調となったことから製粉企業の需要は弱い。このため、今後の小麦価格は低下するとみられる。

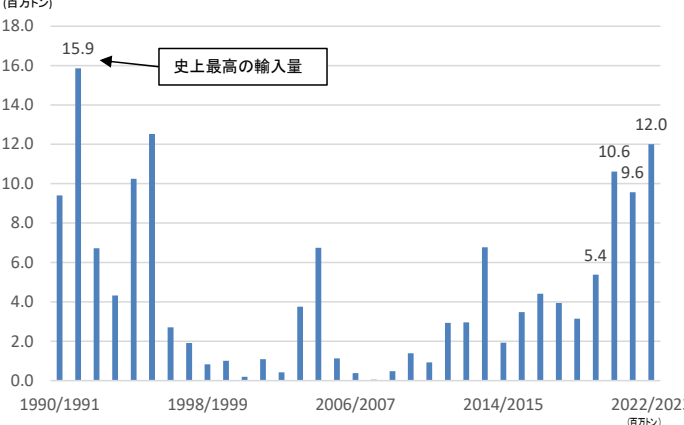
USDA によれば、世界の期末在庫量に占める中国の割合は、62.4%と半分を超えている。

小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	134.3	137.0	137.7 (135.0)	-	0.6	
消 費 量	155.0	148.0	146.0 (132.0)	2.0	▲ 1.4	
うち飼料用	45.0	35.0	32.0 (21.0)	2.0	▲ 8.6	
輸 出 量	0.8	0.9	0.9 (1.3)	-	2.3	
輸 入 量	10.6	9.6	12.0 (7.9)	2.0	25.4	
期末在庫量	139.1	136.8	139.6 (139.8)	-	2.1	
期末在庫率	89.3%	91.9%	95.0% (104.9%)	▲ 1.3	3.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.52 (23.6)	-	▲ 0.2	
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.86 (5.83)	-	0.9	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

図中国の小麦輸入量と世界に占める輸入割合の推移



2018/2019年度		2019/2020年度		2020/2021年度		2021/2022年度		2022/2023年度	
エジプト	12.4	エジプト	12.8	エジプト	12.1	エジプト	11.3	中国	12.0
インドネシア	10.9	トルコ	10.9	中国	10.6	インドネシア	11.2	エジプト	11.0
フィリピン	7.6	インドネシア	10.6	インドネシア	10.0	中国	9.6	EU	10.5
アルジェリア	7.5	アルジェリア	7.1	トルコ	8.1	トルコ	9.4	トルコ	10.5
ブラジル	7.0	フィリピン	7.1	アルジェリア	7.7	アルジェリア	8.3	インドネシア	10.0
トルコ	6.4	ブラジル	7.0	バングラデシュ	7.2	イラン	7.3	アルジェリア	8.2
EU	5.8	バングラデシュ	6.8	ナイジェリア	6.6	フィリピン	6.9	モロッコ	7.5
その他	116.7	その他	126.1	その他	132.5	その他	135.3	その他	104.6
合計	174.3	合計	188.4	合計	194.8	合計	199.2	合計	174.3

資料：USDA 「PS&D」(2023.4.11)をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2022/23 年度の輸出量は史上最高の 45.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく、史上最高の 92.0 百万トン(前年度比 22.4%増)となる見込み。作期別生産量は、冬小麦、春小麦とも前月予測からの変更はなく、それぞれ 68.0 百万トン(前年度比 30.3%増)、24.0 百万トン(同 4.5%増、史上最高)。なお、ロシア連邦統計庁(2023.3.10)によれば、2022/23 年度の実生産量は前年度比 37.0%増の 104.2 百万トン(冬小麦：74.0 百万トン、春小麦：30.2 百万トン)の見込み。

2023/24 年度の冬小麦の生育状況は、ロシアヨーロッパ部南部では土壌水分は十分で、分けつ期に入っている。また、作柄は概ね良好である。ヨーロッパ部北部では天候は平年並みとなっている。

また、ロシア農業省によれば、ロシア南部を中心に春小麦の播種が開始されており、播種面積は 0.72 百万ヘクタール(前年度同時期 0.16 百万ヘクタール)で、4 月 7 日現在の播種進捗率は 0.6%である。

一方、現地情報会社によれば、冬小麦の播種面積は 29.05 百万ヘクタール(前年度比 1.4%減)。

なお、ロシア穀物同盟によれば、2022/23 年度の小麦栽培では無機肥料の使用量が前年度比 5 %減少するなど、小麦価格低下等による収益の悪化から小麦生産は影響を受けた。また、2023/24 年度は生産コストが 30～50%上昇するとみられ、肥料、農薬、高品質な種子の使用の減少、経済制裁により農機補修部品の入手が困難になる等の問題が深刻化するリスクがある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、ロシア産小麦の輸出価格(FOB)は、豊富な輸出余力から、4 月 5 日時点で 275 ドル/トンと前月(3 月 3 日時点で 295 ドル/トン)より下落し、主要小麦輸出国の中で最低となった(最高は米国の 386 ドル/トン)。また、2022/23 年度の実輸出量は、価格競争力が高いことから前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、前年度に比べ 36.4%増加の 45.0 百万トンの見込み。

現地情報会社によれば、旧来の輸出先である中東、アフリカ諸国向けの輸出量は、ウクライナ侵攻前後(注)で比較すると、国ごとで増減があるものの大きな変化はみられない。国別では、伝統的な輸出先国であるイラン向けは減少も、当初減少していたトルコ向けは 2022 年 10 月から輸出が増加している。

また、2023 年 3 月の輸出量は、前月に比べ 45.7%増加し、同月の過去 3 年平均(184.6 万トン)を上回る 454.6 万トンと高い水準にある。輸出先国は、エジプト(22.0%)、トルコ(20.5%)の順。なお、4 月の小麦輸出量は同月としては過去最高に近い 420～450 万トンになる見込み。

(注) (2020/21 年度及び 2021/22 年度(7 月～翌年 3 月)の平均と 2022/23 年度(7 月～翌年 3 月)の輸出数量比較)

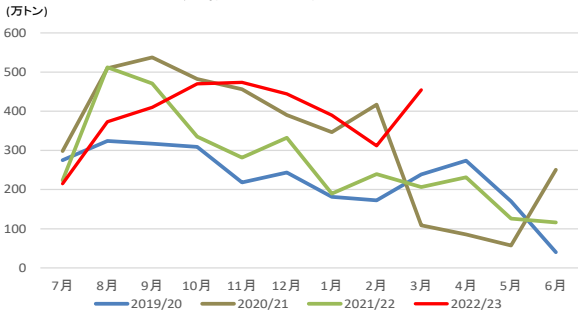
小麦一口ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	85.4	75.2	92.0	(83.5)	-	22.4
消 費 量	42.5	42.8	44.0	(42.9)	▲ 1.5	2.9
うち飼料用	19.0	19.5	20.5	(18.7)	▲ 1.0	5.1
輸 出 量	39.1	33.0	45.0	(38.9)	1.5	36.4
輸 入 量	0.4	0.3	0.3	(0.3)	-	-
期末在庫量	11.4	11.1	14.4	(11.0)	-	29.8
期末在庫率	13.9%	14.6%	16.2%	(13.4%)	-	1.5
(参考)						
収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	29.00	(28.7)	▲ 0.10	5.0
単収(t/ha)	2.98	2.72	3.17	(3.32)	0.01	16.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

図：ロシアの月別小麦輸出量の推移



資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

表：ロシア産小麦の主なアフリカ諸国、中東諸国への輸出量と輸出先国

(輸出量:万吨、増減率:%)							
アフリカ諸国	2020/21年度 2021/22年度 輸出量の平均	2022/23年度 輸出量	増減率	中東諸国	2020/21年度 2021/22年度 輸出量の平均	2022/23年度 輸出量	増減率
	国名	侵攻前			侵攻後	国名	
エジプト	616.2	643.1	4.4	トルコ	589.9	631.6	7.1
ナイジェリア	63.2	16.2	-74.3	イラン	305.0	174.7	-42.7
スーダン	87.0	135.6	55.9	イエメン	48.0	75.4	57.2
ケニア	46.6	97.2	108.8	イスラエル	44.7	79.3	77.4
タンザニア	37.9	48.8	28.8	UAE	20.9	42.8	104.8
南アフリカ	34.4	33.2	-3.3	レバノン	26.6	17.4	-34.6
セネガル	53.7	17.0	-68.3	オマーン	14.3	43.6	206.0
リビア	27.9	102.6	268.4	シリア	36.9	58.2	57.9
合計	966.6	1,093.7	13.1	合計	1,086.2	1,123.0	3.4

(注) 各年度の期間は7月から翌年3月

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2022/23 年度の小麦の輸出量は EU 等への輸出増加から上方修正

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく、21.0百万トン。史上最高だった前年度(33.0百万トン)から36.4%減少、過去5年平均(27.9百万トン)と比べても24.8%減少の見込み。また、ウクライナ農業政策食料省2023年度第1回生産見通し(2023.3.21)によれば、2022/23年度の実生産量は20.5百万トン。

また、2023/24年度の実生産量は、16.6百万トン(前年度比19.0%減)の見込み。2023/24年度の播種面積は、冬小麦が4.17百万ヘクタール(前年度比16.7%減)、春小麦が0.29百万ヘクタール(同30.7%増)の見込み。なお、4月14日時点の春小麦の播種面積は0.14百万ヘクタール。

2023/24年度の冬小麦の生育段階は、南部地域で3月初旬に再生長を開始し、分けつ期から第3葉形成期に入っている。作柄はオデッサ州等の一部で平年並みとなっている以外は、概ね良好から非常に良好である。また、3月末に降雨があり、土壌水分量は十分となっている。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、EU等への輸出増加から、前月予測から1.0百万トン上方修正され14.5百万トン。ロシアの侵攻の影響を受け前年度に比べ減少したものの、「黒海穀物イニシアチブ」と陸上輸送等の輸出継続で、前年度に比べ23.0%の減少に留まっている。

ウクライナ政府等によれば、2022/23年度のうち2022年7月～2023年3月のウクライナの小麦の輸出量は前年度同期比28.3%減の1,300.4万トン(海上輸送、陸路等での全ての輸出が含まれる)。また、輸出先国は、トルコ(22.3%)、ルーマニア(19.4%)、スペイン(12.5%)の順。前年度に比べ、スペイン、ルーマニア、ポーランド等の一部のEU諸国向けが増加した。

また、黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、合意に基づく2022年8月から2023年3月までの黒海港湾からの小麦輸出量は722.5万トンで、輸出先国は、スペイン(24.0%)、トルコ(17.1%)の順。なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、2023年3月19日以降延長されたが、延長期間は未決着。

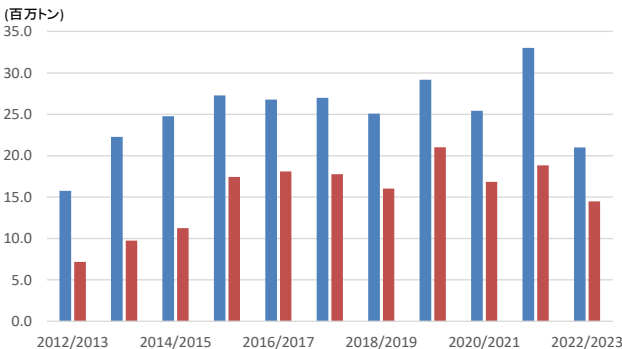
また、ポーランド、ルーマニア等の東欧諸国ではウクライナ産農産物の流入による国内市場への影響に懸念が高まり、4月中旬にポーランド、ハンガリー、スロバキア、ブルガリアはウクライナ産の輸入禁止措置を発表した。なお、ルーマニア、ハンガリー、ポーランドでは第3国向け輸出による通過(トランジット)に関して合意している。

小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	25.4	33.0	21.0 (25.5)	-	▲ 36.4
消費量	8.7	10.0	9.0 (8.6)	▲ 0.2	▲ 10.0
うち飼料用	2.6	4.0	4.0 (2.1)	-	-
輸 出 量	16.9	18.8	14.5 (17.0)	1.0	▲ 23.0
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	▲ 0.0	▲ 20.0
期末在庫量	1.5	5.8	3.3 (1.1)	▲ 0.8	▲ 42.1
期末在庫率	5.9%	20.0%	14.2% (4.3%)	▲ 4.2	▲ 5.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.35 (6.6)	-	▲ 27.8
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.93 (3.84)	-	▲ 11.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 March 2023)

図：ウクライナの小麦生産量、輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2023.4.11)をもとに農林水産省で作成

表：ウクライナ産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2023年3月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年3月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年2月※)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
トルコ	37.2	22.3	トルコ	258.5	19.9	エジプト	273.8	15.1
ルーマニア	32.4	19.4	ルーマニア	216.0	16.6	インドネシア	265.5	14.7
スペイン	20.8	12.5	スペイン	182.5	14.0	トルコ	178.7	9.9
バングラデシュ	12.7	7.6	ポーランド	86.0	6.6	パキスタン	146.9	8.1
イエメン	8.3	5.0	バングラデシュ	73.2	5.6	サウジアラビア	75.1	4.1
エジプト	6.4	3.8	イタリア	47.6	3.7	イエメン	64.7	3.6
ポーランド	6.3	3.8	エジプト	45.7	3.5	バングラデシュ	63.2	3.5
その他	42.6	25.6	その他	390.9	30.1	その他	743.4	41.0
計	166.7	100.0	計	1,300.4	100.0	計	1,811.3	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成
※2022年3月の輸出データはロシアのウクライナ侵攻により不明

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ロシア等で上方修正も、アルゼンチン、EU 等で下方修正され、前月から下方修正された。

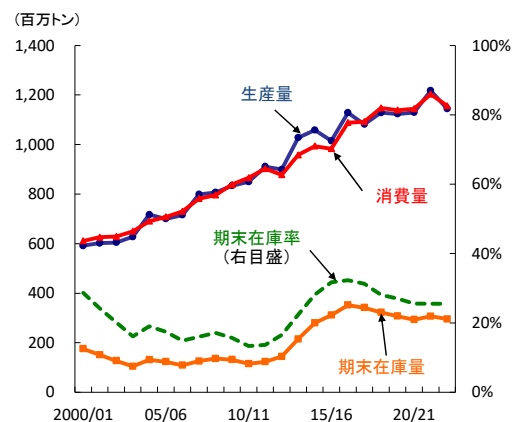
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ロシア、メキシコ等で上方修正も、エジプト、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ウクライナ、ロシア等で上方修正も、アルゼンチン、メキシコ等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2023. 4. 11）をもとに農林水産省にて作成

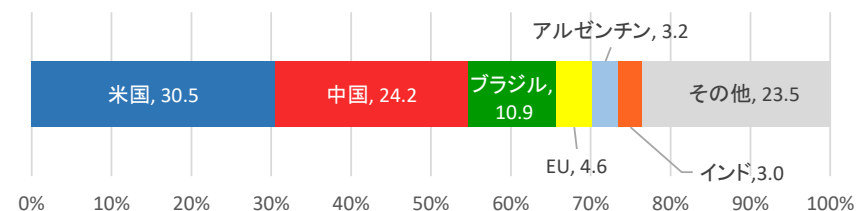
◎世界のとうもろこし需給

（単位：百万トン）

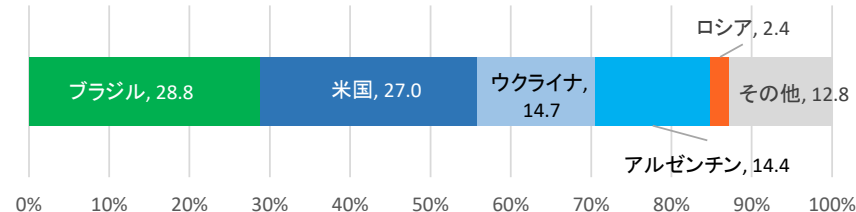
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,129.4	1,217.0	1,144.5	▲ 3.0	▲ 6.0
消費量	1,144.0	1,202.9	1,156.1	▲ 0.7	▲ 3.9
うち飼料用	723.9	748.9	726.9	▲ 0.0	▲ 2.9
輸出量	182.7	205.7	173.8	▲ 0.9	▲ 15.5
輸入量	184.9	184.6	174.0	▲ 0.5	▲ 5.8
期末在庫量	292.8	306.9	295.4	▲ 1.1	▲ 3.8
期末在庫率	25.6%	25.5%	25.5%	▲ 0.1	0.03

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（11 April 2023）

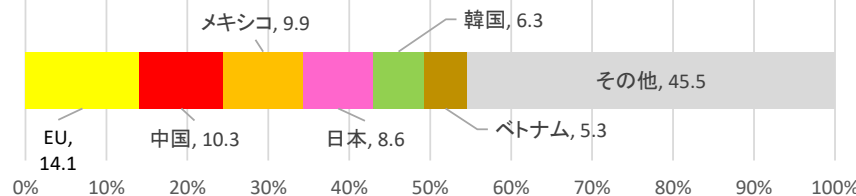
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,144.5 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(173.8 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(174.0 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の作付意向面積は 3.9%増加

【生育・生産状況】2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、夏季のコーンベルトの一部での乾燥により前年度より 8.9%減の 348.8 百万トンの見通し。

米国農務省（USDA）「Prospective Plantings」（2023.3.31）によれば、2023/24 年度の作付面積は 3,723 万ヘクタールと、肥料価格の高騰により減少した前年度に比べ 3.9%増加。市場の事前予想を上回った。USDA「Crop Progress」（2023.4.17）によれば、4 月 16 日現在で作付け進捗率は 8 %と、天候に恵まれたため、前年度同期（4 %）、過去 5 年平均（5 %）を上回っている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、加工用需要の減少により前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、303.7 百万トン。生産量の減少に伴い、前年度に比べ 4.2%減少する見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 25.2%減の 47.0 百万トンの見込みであり、2019/20 年度（45.2 百万トン）以来の低水準の見込み。輸出量減少の背景には、主要輸出先国の一つである中国が輸入先の多角化を進めるため、2023 年以降ブラジル産の輸入を本格化させていることもあるとみられる。

一方、米国はメキシコ向けの輸出を増大させている。USDA によれば、2022/23 年度の最初の 7 か月（2022 年 9 月～2023 年 3 月）で、メキシコ向け輸出量は 13.5 百万トン（史上最高の前年同期には及ばないが、過去 3 番目に高い水準）に達した。メキシコでは、増大する肉類消費に伴い、飼料需要が増加している中、米国・メキシコ・カナダ協定（USMCA）による自由化（関税及び割当数量制限なし）と米国・メキシコ間の鉄道輸送による低コストにより、ブラジル産やアルゼンチン産に対しても価格優位性を有する。このため、メキシコは米国のとうもろこし輸出の最大の相手国となっている。

USDA によれば、2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 2.6%減の 34.1 百万トンの見込み。期末在庫率は 9.7%で、前年度より上昇するものの、引き続き低水準の見込み。

とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

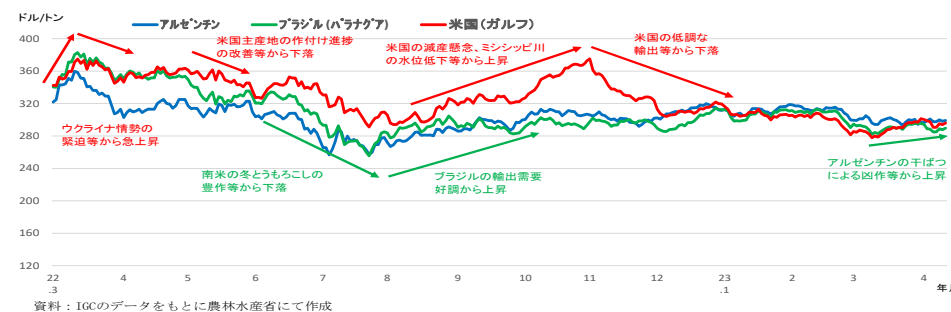
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	358.5	382.9	348.8	－	▲ 8.9
消費量	306.7	317.1	303.7	▲ 0.3	▲ 4.2
うち飼料用	142.4	145.3	134.0	－	▲ 7.8
エタノール用等	127.7	135.3	133.4	－	▲ 1.4
輸 出 量	69.8	62.8	47.0	－	▲ 25.2
輸 入 量	0.6	0.6	1.0	▲ 0.3	64.5
期末在庫量	31.4	35.0	34.1	－	▲ 2.6
期末在庫率	8.3%	9.2%	9.7%	0.0	0.5

（参考）

収穫面積(百万ha)	33.31	34.53	32.05	－	▲ 7.2
単収(t/ha)	10.76	11.09	10.88	－	▲ 1.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（11 April 2023）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



＜ ブラジル ＞ 生産量は史上最高、輸出量は世界第 1 位の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加により、前年度より 7.8%増の 125.0 百万トンで史上最高の見込み。

現在、冬とうもろこしが生育期を迎えている。4月上旬から中旬にかけて南部リオ・グランデ・ド・スール州等の一部地域では高温・乾燥傾向が続いている。一方、中部マット・グロッソ州や北東部の州等では降雨に恵まれた。ただし、冬とうもろこしの生育には3月～5月の降雨が重要とされており、今後数週間で更なる降雨が必要と見られている。

ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2023.4.13）によれば、収穫中の 2022/23 年度の夏とうもろこしの生産量は、前年度比 8.8%増の 27.2 百万トンの見込み。一方、大豆収穫後の2月以降に作付けされた冬とうもろこしの生産量は、前年度比 10.8%増の 97.6 百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比 10.4%増の 124.9 百万トンで史上最高の見込み。（P.23 大豆ーブラジルのクロップカレンダー参照）。

夏とうもろこしの収穫進捗率は、南部のリオ・グランデ・ド・スール州で4月13日現在、80%（前年並み）。冬とうもろこしについては、南部のパラナ州で4月13日現在、作付は終了し、9%が開花している。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 3.5%増の 73.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 3.6%増の 50.0 百万トンで史上最高となり、世界第 1 位の輸出国となる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1～3 月の輸出量は 978.1 万トンで、前年同期（351.2 万トン）と比べ 2.8 倍となっている。内訳は、1 位が日本 180.5 万トン、2 位が韓国 110.6 万トン、3 位が中国 105.4 万トンの順。前年 11 月末以降、中国向け輸出が開始され、大豆の輸出が一巡する本年後半以降、冬とうもろこしの収穫を受け輸出が本格化するとみられる。

とうもろこしーブラジル

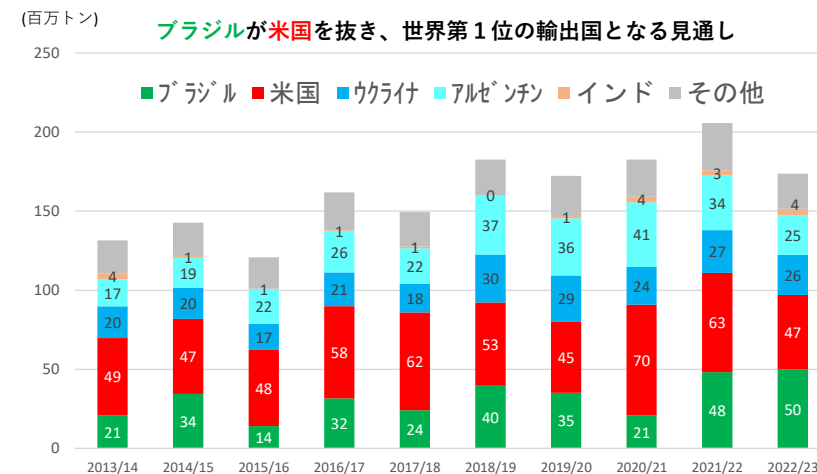
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約 8 割、夏とうもろこしは約 2 割）

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 （見込み）	2022/23（23年3月～24年2月）			
			予測値、（ ）はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率（%）	
生 産 量	87.0	116.0	125.0 (123.1)	-	7.8	
消 費 量	70.0	70.5	73.0 (74.2)	-	3.5	
うち飼料用	59.5	59.5	61.5 (52.5)	-	3.4	
輸 出 量	21.0	48.3	50.0 (49.0)	-	3.6	
輸 入 量	2.9	2.6	1.3 (1.5)	-	▲ 50.0	
期末在庫量	4.2	4.0	7.3 (4.6)	0.2	83.1	
期末在庫率	4.6%	3.3%	5.9% (3.8%)	0.2	2.6	
（参考）						
収穫面積（百万ha）	19.90	21.80	22.70 (22.02)	-	4.1	
単収（t/ha）	4.37	5.32	5.51 (5.59)	-	3.6	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（11 April 2023）
IGC「Grain Market Report」（16 March 2023）

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2023.4.11）のデータをもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、2 月から 3 月の高温・乾燥により、単収が下方修正され、前月予測から 3.0 百万トン下方修正されて 37.0 百万トン（前年度比 25.3%減少）。生産量は、2017/18 年度（32.0 百万トン）以来の低水準となる見込み。4 月上旬には、ラ・パンパ州やブエノスアイレス州北部で降雨があったが、とうもろこしなどの夏作物の単収改善には遅すぎた。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.4.13）によれば、収穫進捗率は 13%であり、前年同期（19%）より遅れている。生産量は、長引く乾燥の影響で 36.0 百万トンと前年度（52.0 百万トン）から大幅に減少し、21 年ぶりの低水準の見通し。過去 60 年間で最悪の干ばつとも言われている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 18.9%減の 12.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から 3.0 百万トン下方修正され、前年度より 27.3%減の 25.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1 月・2 月の輸出量は 259.9 万トンで、前年同期（359.6 万トン）より 27.7%減。内訳は、1 位がペルー 35.1 万トン、2 位がマレーシア 25.7 万トン、3 位がベトナム 24.1 万トンの順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧水産大臣は、とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。4 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンに設定されている。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形を発行するなどの救済施策を公表した。しかし、農業者から救済措置が不十分という抗議活動があったため、さらに、4 月 10 日には、各種税の支払い猶予措置などの救済施策を公表した。

とうもろこしーアルゼンチン

(単位: 百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	52.0	49.5	37.0 (46.0)	▲ 3.0	▲ 25.3
消 費 量	13.5	14.8	12.0 (19.6)	-	▲ 18.9
うち飼料用	9.5	10.9	8.0 (14.9)	-	▲ 26.6
輸 出 量	40.9	34.4	25.0 (28.0)	▲ 3.0	▲ 27.3
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.3)	-	-
期末在庫量	1.2	1.5	1.5 (2.2)	-	-
期末在庫率	2.2%	3.0%	4.0% (4.7%)	0.3	1.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.55	7.10	6.70 (7.80)	-	▲ 5.6
単収(t/ha)	7.94	6.97	5.52 (5.90)	▲ 0.45	▲ 20.8

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

写真: 北部サンタフェ州の第 2 期作とうもろこしの圃場風景 (4 月 3 日撮影)

3 月に降雨があったが、早期に作付けられた夏作物の単収改善には遅すぎた。第 2 期作の作柄は圃場によっては良好。



< 中国 > 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、主産地の黒竜江省等東北地区及び華北平原で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことから、単収の増加により、前年度より1.7%増の277.2百万トンで史上最高の見込み。

例年4月上旬、四川省では播種期を迎え、主産地の黒竜江省等で今後播種が開始される見通し。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より2.1%増の297.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内産の豊作等を受け、前年度より17.7%減の18.0百万トンの見込み。

USDA「Grain and Feed Annual」(2023.4.6)によれば、2023年1月・2月の輸入量は5.3百万トンで、前年同期比で14%増。内訳は、米国産2.4百万トン(45%)、ブラジル産1.5百万トン(28%)、ウクライナ産1.2百万トン(23%)。前年11月以降、ブラジル産とうもろこしの輸入が開始したことで、ブラジル産の輸入が本格化している。

なお、黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された前年8月から3月までの黒海経由のとうもろこしを、中国は394万トン(ウクライナ産とうもろこし輸出量全体の30%)輸入しており、ウクライナ産とうもろこしの最大の輸入国となっている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報2023年2月号」によると、2月の国内価格は、温暖な気候で貯蔵が難しくなったため、農家の売却意欲が高まり、市場供給が増加した一方、飼料需要が少なかったことから、2,980円/トンと前月(3,040円/トン)から下落した。飼料・加工メーカーの在庫補充の意欲は高くなく、農家は引き続き余剰穀物の売却を迫られるため、国内価格は軟調で推移するとみられる。また、2月の輸入価格は、2,760円/トンと前月(2,820円/トン)から下落した。

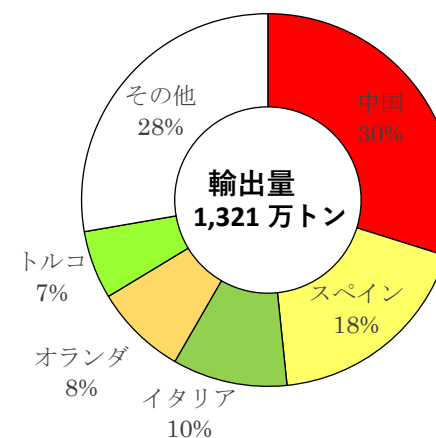
とうもろこしー中国

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	260.7	272.6	277.2	(277.2)	-	1.7
消 費 量	285.0	291.0	297.0	(308.4)	-	2.1
うち飼料用	203.0	209.0	216.0	(207.0)	-	3.3
輸 出 量	0.0	0.0	0.0	(0.1)	-	-
輸 入 量	29.5	21.9	18.0	(19.0)	-	▲ 17.7
期末在庫量	205.7	209.1	207.3	(176.0)	-	▲ 0.9
期末在庫率	72.2%	71.9%	69.8%	(57.0%)	-	▲ 2.1
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.07	(43.00)	-	▲ 0.6
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.44	(6.45)	-	2.4

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 March 2023)

図：黒海穀物イニシアチブによるウクライナ産とうもろこしの
主要輸出先 (2022年8月1日～2023年3月31日現在)
(中国がウクライナ産とうもろこしの最大の輸入国)



資料：国連ホームページ

< ウクライナ > ロシアによる侵攻により、生産量は前年度より 36%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫期の前年 10 月～11 月の記録的な降雨に加え、労働力不足、燃料費の高騰、輸送や貯蔵の問題といったロシアによる侵攻の影響を受け、主産地の収穫が著しく遅れたこと、一部のとうもろこしが刈り残され、圃場に放置されていることなどから、収穫面積及び単収が減少し、史上最高の生産量となった前年度より 35.9%減の 27.0 百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省 2023 年度第 1 回生産見通し（2023.3.21）によれば、2023/24 年度の作付面積は 3.6 百万ヘクタール（2022/23 年度比 11.1%減）、生産量は 21.7 百万トン（2022/23 年度 25.6 百万トンから 15.2%減）と更なる減産の見通し。ウクライナ最高議会の 3 月末の報告会によれば、代わりに大豆、エンドウ豆、春播き大麦の播種が増える見込み。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 37.4%減の 6.2 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、EU 及び中国向けの輸出増加を受けて前月予測から 2.0 百万トン上方修正され、前年度より 5.5%減の 23.5 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022/23 年度（2022 年 10 月～2023 年 9 月）のうち、2022 年 10 月～2023 年 3 月の輸出量は 1,760 万トンであり（輸出量には、海上輸送に加え、陸路等での輸出分も含まれる）、前年度（2,484 万トン）の輸出ペースに近づきつつある。輸出先国は、中国、ルーマニア、スペイン、ハンガリー、イタリア、ポーランドの順となっている。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された前年 8 月 1 日～3 月 31 日の黒海港湾からのとうもろこし輸出量は 1,321 万トンであり、輸出先国は、中国（394 万トン）、スペイン（245 万トン）、イタリア（132 万トン）、オランダ（106 万トン）の順となっている。

なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、2023 年 3 月 19 日以降延長された。延長期間は未決着（ウクライナは 120 日間延長、ロシアは 60 日間延長を主張）。また、4 月中旬、ポーランド、ブルガリア、ハンガリー、スロバキアについては、自国農業の保護を目的にウクライナ産穀物について国内輸入禁止を発表した（詳細は P.14 小麦－ウクライナ参照）。

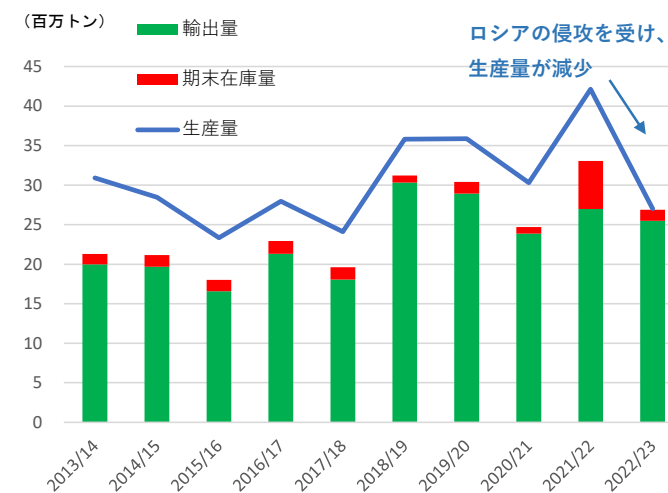
とうもろこし－ウクライナ

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	30.3	42.1	27.0 (27.0)	-	▲ 35.9
消 費 量	7.1	9.9	6.2 (8.9)	-	▲ 37.4
うち飼料用	5.9	8.7	5.0 (5.5)	-	▲ 42.5
輸 出 量	23.9	27.0	25.5 (20.5)	2.0	▲ 5.5
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 100.0
期末在庫量	0.8	6.1	1.4 (4.5)	▲ 1.0	▲ 77.2
期末在庫率	2.7%	16.5%	4.4% (15.5%)	▲ 3.7	▲ 12.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.00 (4.00)	-	▲ 27.1
単収(t/ha)	5.62	7.68	6.75 (6.75)	-	▲ 12.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2023. 4. 11) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量

前年度比



前月比



- ・バングラデシュ等で上方修正も、インドネシア、ブラジル等で下方修正され、前月から下方修正された。

消費量

前年度比



前月比



- ・タイ、ブラジル等で下方修正も、米国、インドネシア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量

前年度比



前月比



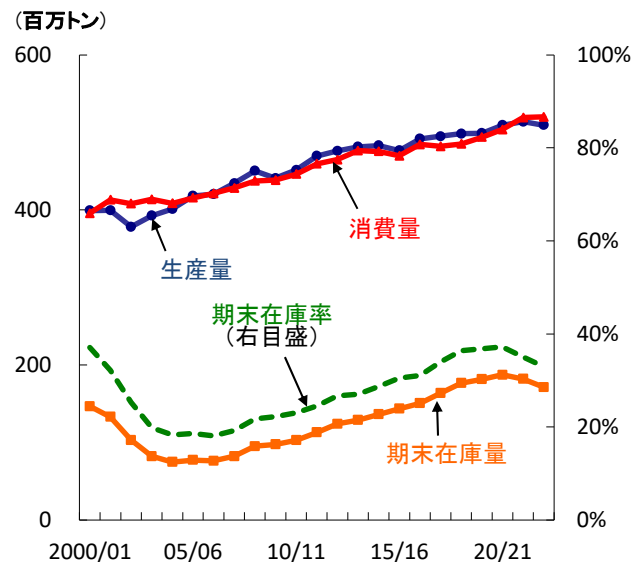
- ・中国等で下方修正も、タイ、ベトナム等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量

前年度比



前月比



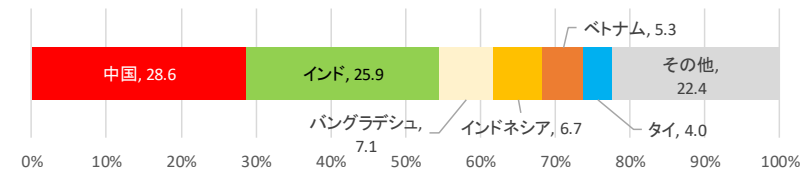
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

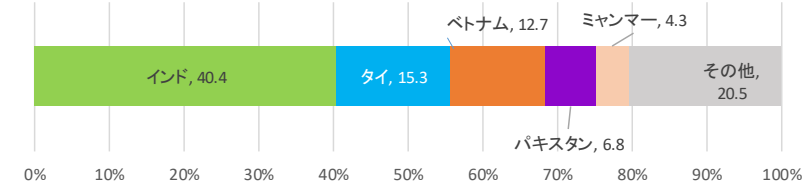
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	513.9	509.4	▲ 0.4	▲ 0.9
消 費 量	503.7	519.2	520.1	0.1	0.2
輸 出 量	51.2	56.8	55.7	0.8	▲ 1.9
輸 入 量	46.5	54.5	54.3	0.6	▲ 0.3
期末在庫量	187.3	182.0	171.4	▲ 2.0	▲ 5.8
期末在庫率	37.2%	35.1%	33.0%	▲ 0.4	▲ 2.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（11 April, 2023）

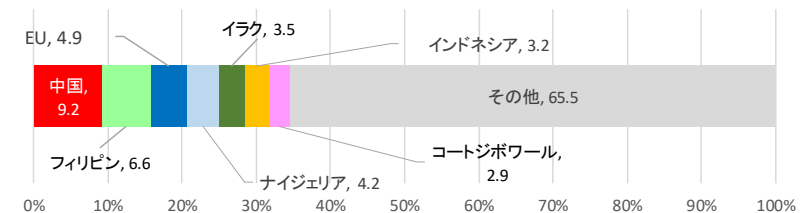
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(509.4百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(55.7百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(54.3百万トン)（単位：%）



（２）国別のコメの需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の作付面積は増加の見込み

【生育・生産動向】米国農務省（USDA）によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、長粒種、中・短粒種とも収穫面積及び単収の減少により、対前年度比 16.3%減の 5.1 百万トンと、1993/94 年度以来の低水準となる見込み。

同「Prospective Plantings」（2023.3.31）によれば、2023/24 年度の作付意向面積は 104.5 万ヘクタールと、前年度（89.9 万ヘクタール）から 16.2%増加する見込み。中・短粒種の面積は 25.3 万ヘクタールと、前年度（17.0 万ヘクタール）から 49.1%増加する見込み。深刻な干ばつで 2 年連続作付面積が減少していた主産地のカリフォルニア州において、平年以上の灌漑用水供給見込みや、史上最高の価格水準等から、作付面積が飛躍的に増加すること等による。また長粒種の作付面積も、高水準の価格等から、79.2 万ヘクタールと、前年度（72.9 万ヘクタール）から 8.6%増加する見込み。

同「Crop Progress」（2023.4.17）によれば、主要生産 6 州の 4 月 16 日時点の作付進捗率は 38%と、前年同期（21%）、過去 5 年平均（28%）よりも進展している。なお、カリフォルニア州ではまだ作付けが開始されていない。発芽率は 18%と、前年同期（13%）、過去 5 年平均（15%）より高い。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、消費ペースが予想を上回ったため、前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたが、対前年度比 0.2%減の 4.8 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸入量は、2 月のタイ産の香り米輸入量が予想よりも少なかったことから、前月予測から 0.1 百万トン下方修正されたものの、対前年度比 5.8%増の 1.3 百万トンと史上最高の見込み。

2022/23 年度の輸出量は、本年 2 月の輸出量が予想よりも多かったことや、3 月末のイラクへの追加輸出から、前月予測から 0.1 百万トン上方修正された。しかしながら、対前年度比 25.7%減の 1.9 百万トンと、1985/86 年度以来の低水準の見込み。

USDA 「Rice Outlook」（2023.4.13）によれば、4 月 4 日までの週のイラク向け長粒種（2 等、碎米 4 %混入）の価格は 760 ドル/トンと、本年 1 月末以降、2008 年 10 月初旬（772 ドル/トン）以来の高値となっている（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。また中粒種（地中海向けカリフォルニア米（1 等、碎米 4 %混入））の価格は 1,650 ドル/トンと、前年 12 月末以降、史上最高となっている。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年 8 月～23年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	7.2	6.1	5.1	-	▲ 16.3
消 費 量	4.9	4.8	4.8	0.1	▲ 0.2
輸 出 量	3.0	2.6	1.9	0.1	▲ 25.7
輸 入 量	1.1	1.2	1.3	▲ 0.1	5.8
期末在庫量	1.4	1.3	0.9	▲ 0.3	▲ 29.4
期末在庫率	17.8%	17.0%	13.2%	▲ 4.4	▲ 3.8

（参考）

収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.88	-	▲ 12.9
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.28	-	▲ 4.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (11 April, 2023)

写真：アーカンソー州の播種前の土壌準備の風景

（4月 10 日撮影。圃場を耕して施肥をしているところ。）



< インド > 2022/23 年度の生産量・消費量とも史上最高の見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 2.0%増の 132.0 百万トンと史上最高の見込み。インドのコメ生産量の 30%を占めるラビ米の作付けが前年度より 25%増加し、モンスーン期の降雨の遅れによるカリフ米の減産分が相殺される見通し。

ラビ米は、灌漑用水が十分供給されたことから、平年以上の作柄となるとみられる。収穫は4月末に終了する予定。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度に引き続き政府の低所得世帯向け食料配給プログラム（約8億人が対象）向けにコメを供給していることから、前年度より 0.5%増の 111.0 百万トンと史上最高の見込み。

2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 2.1%増の 22.5 百万トンの見込み。

インドは、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を抑制する観点から、前年9月9日に輸出規制を発動（碎米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））。ただ、引き続き他のアジア諸国と比べ価格競争力があること等から、2022/23 年度の輸出量は史上最高となる見込み。また、依然として世界の輸出量の 40%を占め、世界第1位の輸出国となる見込み。

なお、現地情報によると、3月末に、特別措置として、セネガル（25 万トン）、ガンビア（10 万トン）、ジブチ及びエチオピア（各 1 万トン）への碎米輸出（合計 37 万トン）を財務省が許可した。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.4.11）によれば、インド産米（碎米5%混入）の4月4日までの週の輸出価格は 435 ドル/トンと、1月末から横ばいも、依然アジア主要輸出国中、最低の価格水準となっている（P.20の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測からの修正はなく、対前年度比 4.4%減の 32.5 百万トンの見込み。

※国際連合「世界人口予測2022」報告書（2022.7.11）によれば、2023 年 7 月 1 日時点で、インドの人口は推定 14 億 2,863 万人と、年央には中国の人口（14 億 2,567 万人）を上回り世界第1位となる見込み。

コメ・インド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	124.4	129.5	132.0 (130.8)	-	2.0	
消 費 量	101.1	110.5	111.0 (110.1)	-	0.5	
輸 出 量	20.2	22.0	22.5 (20.6)	-	2.1	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	37.0	34.0	32.5 (32.3)	-	▲ 4.4	
期末在庫率	30.5%	25.7%	24.3% (24.7%)	-	▲ 1.3	

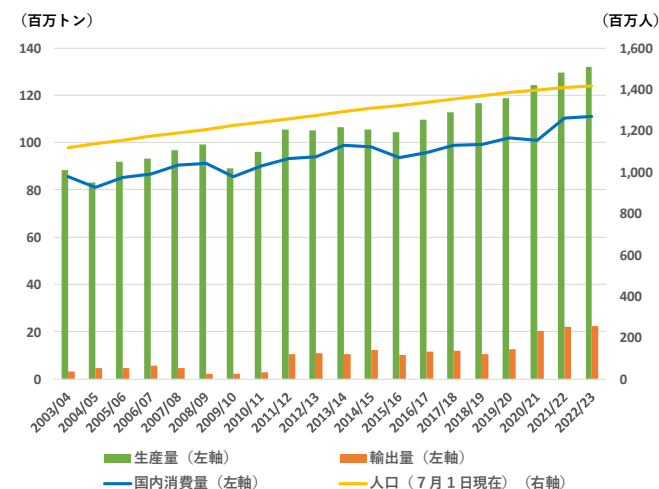
(参考)

収穫面積(百万ha)	45.77	46.28	47.00 (45.75)	-	1.6
単収(もみt/ha)	4.08	4.20	4.21 (2.86)	-	0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April, 2023)

IGC「Grain Market Report」(16 March, 2023) (単収は精米t/ha)

図：インドのコメ生産量・消費量・輸出量と人口の推移



資料：USDA「PS&D」(2023.4.11)及び国連「World Population Prospects 2022」をもとに農林水産省にて作成。なお2022年の人口は推計値。

< 中国 > 南部で早場米の作付け開始

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 2.0%減の 146.0 百万トンと、2013/14 年度以来の低水準の見込み。

3月上旬に南部で早場米の播種が始まった。早場米の作付け地は広東、海南、湖北、安徽、江西の各地区で、合計 2.48 百万ヘクタール。中央政府が穀物の増産を推進していることから、南部の各州政府は農家にコメの増産を奨励しているほか、多様な栽培方法による増産方法を模索している。なお、南東部では、3月下旬から4月上旬にかけて豪雨があり、土壌水分が改善して稲の生育が促進された。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用米の消費量の減少から、対前年度比 0.9%減の 155.0 百万トンとなる見込み。

2022/23年度の輸入量は、輸入価格高騰や、それに伴う中国の輸入ペースの減少等から、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、史上最高となった前年度に比し 16.0%減の 5.0 百万トンの見込み。中国はこれまで、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の砕米をインド等から輸入してきた。

なお、USDAによれば、2022年にコメの関税割当て制度が設けられてから初めて、割当数量（5.32 百万トン）を超える輸入となった。

また、中国外交部によれば、4月14日にブラジル農業畜産省と中国税関総署が、コメを含むブラジル産農産物の中国への輸出に関する衛生検疫手続の協議の促進に合意した。

中国海関統計によれば、2022年の年間輸入量は、前年の 492.6 万トンから 25.0%増加し、615.6 万トンとなった。輸入先はインドが 218.0 万トンと最も多く、対前年同期比で 99.9%の増加。次いでパキスタンが 119.7 万トン（対前年同期比 24.5%の増加）となっている。なお、2022年11月以降、インドの輸出規制やパキスタンの洪水による減産の影響から、輸入量は2020年及び2021年の同時期を下回った。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位：百万精米トン)

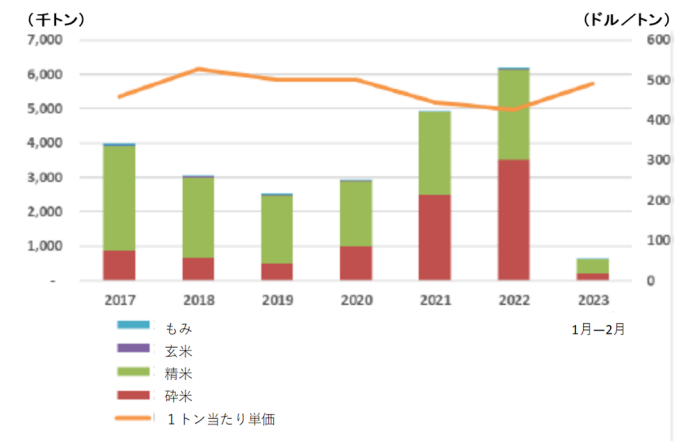
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	148.3	149.0	146.0 (146.0)	-	▲ 2.0	
消費量	150.3	156.4	155.0 (151.1)	-	▲ 0.9	
輸出量	2.2	2.1	2.1 (2.2)	▲ 0.1	1.0	
輸入量	4.2	6.0	5.0 (4.3)	▲ 0.5	▲ 16.0	
期末在庫量	116.5	113.0	106.9 (104.9)	▲ 0.4	▲ 5.4	
期末在庫率	76.4%	71.3%	68.1% (68.4%)	▲ 0.2	▲ 3.3	

(参考)

収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	29.45 (30.03)	-	▲ 1.6
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.08 (4.86)	-	▲ 0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April, 2023)、
IGC「Grain Market Report」(16 March, 2023) (単収は精米t/ha)

図：中国のコメ輸入量の推移（2017－2023年）



資料：USDA「Grain and Feed Annual: China」(2023.4.6)より。

なお、2023年は1-2月の値。

< タイ > 乾季米（全作付面積の約 2 割を占める）は作付面積の 7 割が収穫済

【生育・生産動向】USDA によれば、2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、良好な天候と十分な降雨により、2020/21 年度比 5.3%増の 19.9 百万トンの見込み。

2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、作付面積・単収ともに増加することが見込まれることから、対前年度比 1.6%増の 20.2 百万トンの見込み。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.4）によると、乾季米の作付面積は 1.9 百万ヘクタールと、豊富な灌漑用水と高水準の価格から政府計画水準よりも 47%増加している。収穫は作付面積の 7 割で終了。豊富な灌漑用水と良好な天候から単収もよく、収量は前年度よりも増加の見込み。なお、政府は、雨季米の作付けに向けて、3～4 月にかけて農業用水の供給を制限しており、6 月末から 7 月初旬にかけての降雨不足による干ばつに備えるよう警告を発している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、2023 年にインドネシアへの輸出拡大が見込まれることから、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、対前年度比 10.7%増の 8.5 百万トンとなる見込み。インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、2020/21 年度比 22.1%増の 7.7 百万トンの見込み。

タイ米輸出業者協会によれば、2023 年 1～2 月の輸出量は、前年同期の 109.6 万トンから 31.0 百万トン増加し、140.5 万トンとなった。特にインドネシアは、政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していることから、前年同期の 0.2 万トンから急増して 25.4 万トンとなった。そのほか、検疫問題で 7 年間停止していたタイ産米の輸入を 2022 年に再開したイラクが 16.4 万トン（前年同期 13.0 万トン）、米国が 10.9 万トン（同 14.3 万トン）、バングラデシュが 10.7 万トン（前年同期 0 トン）となった。なお、タイ政府は 3 月 22 日、世界経済が回復途上にあること、タイ国内の収穫量増加から、2023 年の輸出目標値を従来の 7.5 百万トンから 8.0 百万トンに引き上げた。ただし不安定な為替相場が懸案材料とのこと。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」（2023.4.11）によれば、4 月 4 日までの週のタイ産米（長粒、2 等精米）の輸出価格は、特にインドネシアからの需要増大により前月から 26 ドル上昇し、499 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

コメータイ

夏の雨季作と冬の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1 月～23年12月)			
			予測値、()は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	18.9	19.9	20.2 (20.2)	-	1.6	
消 費 量	12.7	12.8	12.8 (12.4)	▲ 0.2	-	
輸 出 量	6.3	7.7	8.5 (8.1)	0.3	10.7	
輸 入 量	0.2	0.1	0.2 (0.3)	-	15.4	
期末在庫量	4.0	3.5	2.6 (6.5)	▲ 0.1	▲ 27.1	
期末在庫率	21.0%	17.1%	12.0% (31.8%)	▲ 0.5	▲ 5.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.51	10.70	10.85 (10.85)	-	1.4	
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.82 (1.86)	-	0.4	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (11 April, 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (16 March, 2023) （単収は精米t/ha）

表：タイの国別輸出量

（単位：万トン）

国名	2022 年 1～2 月	2023 年 1～2 月	増減
1 インドネシア	0.2	25.4	25.2
2 イラク	13.0	16.4	3.4
3 米国	14.3	10.9	▲ 3.4
4 バングラデシュ	0.0	10.7	10.7
5 セネガル	3.5	9.9	6.3
6 南アフリカ	6.1	8.9	2.8
7 日本	7.4	7.9	0.5
8 カメルーン	0.7	6.9	6.2
9 中国	16.5	6.7	▲ 9.8
10 モザンビーク	1.5	4.8	3.3
計	109.6	140.5	31.0

資料：タイ米輸出業者協会（2023. 4）

< ベトナム > 冬春作の生育・収穫が進展。輸出価格は2020年8月以来の高水準

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度比0.9%増の27.0百万トンの見込み。

2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、2020/21年度比2.2%減の26.8百万トンの見込み。なお、2021/22年度は、全ての作期で、主として肥料高騰や高収益作物（果物・野菜・養殖）への転換等により、収穫面積が減少した。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.4）によると、2022/23年度の生育状況に関し、北部では冬春作が分けつ期から幼穂育成期にある。十分な灌漑用水と良好な天候から、単収増加が見込まれる。南部では冬春作は収穫期にある。作付済み面積（188.0万ヘクタール）に対し、収穫済み面積は現時点で108.0万ヘクタール（進捗率57.4%）となっている。十分な灌漑用水と肥料価格の下落から、単収は7.1もみトン/ヘクタールと、前年度より1.8%高くなっている。特に南部のメコンデルタ地域では、土壌水分が十分なことから、夏秋作の播種が昨年度よりも速いペースで順調に進んでおり、播種済み面積は0.29百万ヘクタール。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2020/21年度比12.7%増の7.1百万トンの見込み。

2022/23年度の輸出量は、2023年にインドネシアへの輸出拡大が見込まれることから、前月予測から0.3百万トン上方修正され、前年度比0.7%増の7.1百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2023年1～3月の輸出量は196.3万トンで、上位からフィリピン（89.4万トン）、中国（34.0万トン）、インドネシア（14.9万トン）、マレーシア（7.7万トン）となっている。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.4.11）によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の4月4日までの週の価格は、インドネシア等からの需要が増大したことから、前月の価格から25ドル/トン上昇して485ドル/トンと、2020年8月以来の水準となった。

なお、インドネシア政府はコメの国内価格安定化や政府備蓄積み増しのため、3月24日に、2023年内にコメ200万トンを輸入することを決定。このうち50万トンをベトナム、タイ、パキスタン、ミャンマーの4か国から輸入する計画を3月29日に公表。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

(単位: 百万精米トン)

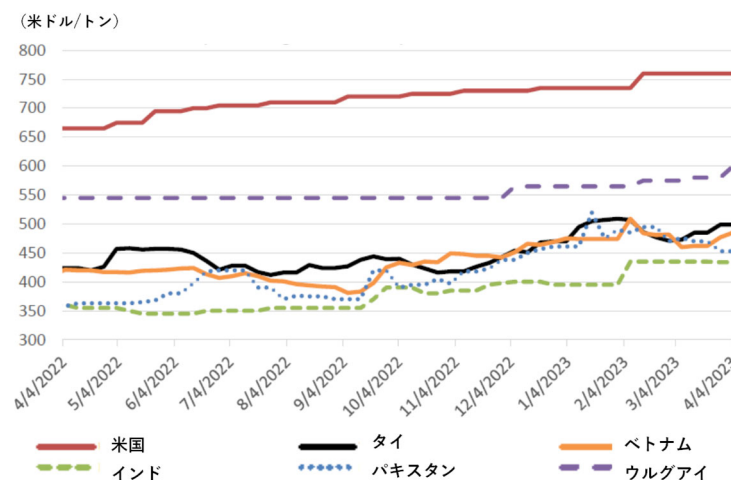
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年1月～23年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	27.4	26.8	27.0 (28.3)	-	0.9	
消費量	21.5	21.5	21.5 (22.5)	▲ 0.1	-	
輸出量	6.3	7.1	7.1 (7.0)	0.3	0.7	
輸入量	1.8	1.5	1.1 (1.1)	-	▲ 26.7	
期末在庫量	2.6	2.4	1.9 (3.3)	▲ 0.2	▲ 21.3	
期末在庫率	9.5%	8.2%	6.5% (11.2%)	▲ 0.8	▲ 1.8	

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.31	7.19	7.17 (7.22)	-	▲ 0.3
単収(もみt/ha)	6.00	5.96	6.03 (3.92)	-	1.2

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April, 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 March, 2023) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料: USDA「Grain: World Markets and Trade」(2023.4.11)より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

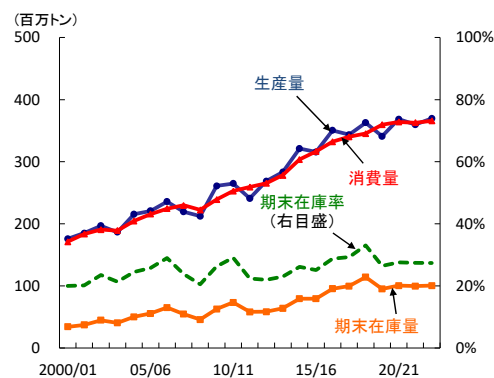
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・アルゼンチン、中国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ウルグアイ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」（2023. 4. 11）をもとに農林水産省で作成

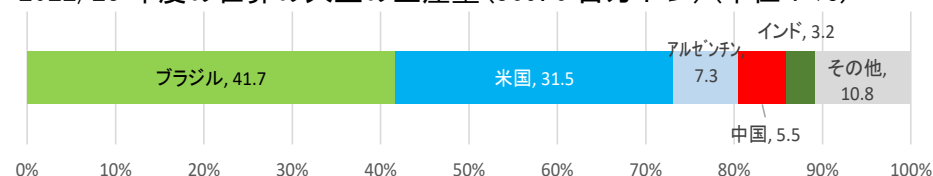
◎ 世界の大豆需給

(単位：百万トン)

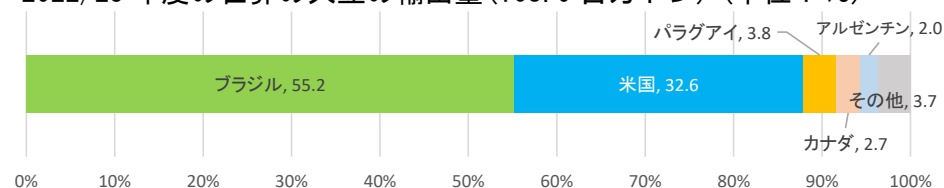
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	368.6	359.8	369.6	▲ 5.5	2.7
消費量	364.0	363.0	365.8	▲ 5.3	0.8
うち搾油用	315.8	313.8	315.2	▲ 4.8	0.4
輸出量	164.9	154.0	168.0	▲ 0.4	9.1
輸入量	165.5	156.6	164.8	▲ 0.6	5.2
期末在庫量	100.4	99.7	100.3	0.3	0.6
期末在庫率	27.6%	27.5%	27.4%	0.5	▲ 0.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(11 April 2023)

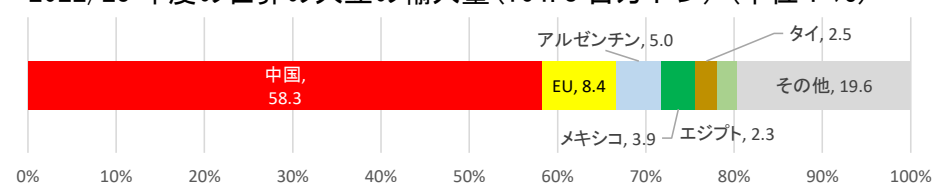
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (369.6 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出量 (168.0 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (164.8 百万トン) (単位：%)



（２）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の作付意向面積はほぼ前年並み

【生育・生産状況】米国農務省（USDA）「Prospective Plantings」（2023.3.31）によれば、2023/24 年度の作付面積は 3,541 万ヘクタールと前年度に比べ 0.1%増の見込み。市場の事前予想を下回った。USDA「Crop Progress」（2023.4.17）によれば、4 月 16 日現在で作付け進捗率は 4 %と、天候に恵まれ前年度同期（1 %）、過去 5 年平均（1 %）を上回っている。

2022/23 年度の生産量は、前月予測から変更なく、夏季のコーンベルトの一部での乾燥により前年度より 4.2%減の 116.4 万トンの見通し。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 1.5%増の 63.7 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少、ブラジル産の豊作見通しによる価格下落を背景に、米国の輸出競争力が弱くなっており、前年度より 6.6%減の 54.8 百万トンの見込み。

USDA によれば、2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測から変更はなく、前年度より 23.4%減の 5.7 百万トンの見込み。

なお、期末在庫率は 4.8%で、前年度を下回っており、2013/14 年度（2.6%）以来の低水準の見込み。

米国の輸出価格は、前年 12 月以降、ブラジル産に比べ割高で推移しており、2 月以降、ブラジル産の収穫期を迎え価格差が広がった（右図参照）。

USDA「Oilseeds」によれば、大豆輸出価格は、ブラジルの史上最高の生産量を背景に全体的に低下した。特に、ブラジルの価格が最も下落しており、米国やアルゼンチンとの価格差が拡大している。他の植物油の十分な供給がある中、大豆油の輸出価格が割高なこともあり、大豆搾油の利潤が加工業者にとって魅力的でなくなっていることも下押し圧力となっている。

大豆－米国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	114.8	121.5	116.4	－	▲ 4.2
消費量	60.9	62.8	63.7	－	1.5
うち搾油用	58.3	60.0	60.4	－	0.7
輸出量	61.7	58.7	54.8	－	▲ 6.6
輸入量	0.5	0.4	0.4	－	▲ 4.7
期末在庫量	7.0	7.5	5.7	－	▲ 23.4
期末在庫率	5.7%	6.1%	4.8%	－	▲ 1.3

(参考)

収穫面積(百万ha)	33.43	34.93	34.94	－	0.0
単収(t/ha)	3.43	3.48	3.33	－	▲ 4.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（11 April 2023）

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、中西部で天候に恵まれ前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度より 18.0%増の 154.0 百万トンと史上最高の見込み。

また、ブラジル食料供給公社（Conab）月例報告（2023.4.13）によれば、2022/23 年度の実産量は、南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受けた前年度より 22.4%増の 153.6 百万トンで史上最高の見込み。なお、収穫面積は、特に中西部のマット・グロッソ州（最大生産州）、マット・グロッド・ド・ソル州等で増加見込み。

USDA 「World Agricultural Production」(2023.4.11) によれば、4 月初期時点で、収穫進捗率は 75%で、前年度（81%）を下回っている。マット・グロッソ州では収穫が完了。南部のパラナ州で 4 月 10 日現在、収穫進捗率は 94%。干ばつの被害を受けた南部のリオ・グランデ・ド・スール州では 4 月 18 日現在、17%が生殖生長期から充実期、収穫進捗率は 32%。なお、同州では、単収が 30%減少する見込み。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の実消費量は、搾油用需要が前月予測から上方修正され、前年度より 5.4%増の 56.9 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、前月予測から変更はなく、前年度より 17.3%増の 92.7 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1 月～3 月の輸出量は 1,913 万トンで、前年同期（2,098 万トン）に比べ 8.8%減となっている。輸出先の内訳は、1 位が中国 1,404 万トン、2 位がスペイン 778 万トン、3 位がタイ 517 万トンとなっている。豊作見通しの 2022/23 年産の収穫に伴い、4 月以降、輸出量が増加する見込み。

大豆—ブラジル

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	139.5	130.5	154.0 (149.8)	1.0	18.0
消 費 量	49.7	54.0	56.9 (56.1)	0.5	5.4
うち搾油用	46.5	50.7	53.3 (53.3)	0.5	5.0
輸 出 量	81.7	79.1	92.7 (92.6)	-	17.3
輸 入 量	1.0	0.5	0.8 (0.6)	-	38.9
期末在庫量	29.6	27.6	32.8 (3.6)	1.2	18.7
期末在庫率	22.5%	20.7%	21.9% (2.4%)	0.7	1.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	39.50	41.60	43.70 (43.46)	0.30	5.0
単収(t/ha)	3.53	3.14	3.52 (3.45)	▲ 0.01	12.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(11 April 2023)

IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の実作付けは、2022年9月以降、順次開始。

2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等												収穫 27.2(百万t)								
冬とうもろこし	作付 4.4(百万ha)												作付 17.6(百万ha)								
大豆	作付 43.6(百万ha)												収穫 153.6(百万t)								

資料：CONAB穀物レポート (2023. 4. 13)

< アルゼンチン > 干ばつにより、生産量は対前年度 4 割減

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、高温・乾燥が 3 月まで継続し、開花期を迎えていた遅植え大豆の単収に影響したことで、収穫面積、単収が下方修正され、前月予測から 6.0 百万トン下方修正された。高温・乾燥の影響を大きく受けた前年度より、単収見通しが更に減少することを受け、前年度より 38.5%減の 27.0 百万トンの見込み。2000/01 年度以降で最も低い水準の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.4.13）によれば、大豆の収穫進捗率は 4.3%であり、2022/23 年度の実産量は、25.0 百万トン（前年度（43.3 百万トン）より 42.3%減）の見込みであるが、今後、更なる下方修正の可能性もある。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から 3.3 百万トン下方修正され、前年度より 18.1%減の 37.7 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量が下方修正されたものの、前月予測から変更はなく、前年度より 18.9%増の 3.4 百万トンの見込み。

アルゼンチンは、丸大豆の搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第 1 位の輸出国である。

USDA によれば、2022/23 年度の輸入量は、生産量の減産を一部補うため、近隣国であるブラジル及びパラグアイからの輸入増により、前月予測から 1.1 百万トン上方修正され、前年度より 116.1%増の 8.3 百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%と設定。2022 年 3 月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2 %引き上げたが、2023 年 1 月からは 31%に戻っている。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形を発行するなどの救済施策を公表した。さらに、4 月 10 日には、各種税の支払い猶予措置などの救済施策を公表した。また、外貨獲得のため、4 月 10 日から 5 月 31 日までの間の 45 日間を超えない範囲で、大豆優遇為替レート（1 ドル＝300 ペソ）を適用する。

大豆ーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年10月～23年9月）			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	46.2	43.9	27.0	(29.0)	▲ 6.0	▲ 38.5
消 費 量	47.4	46.0	37.7	(35.8)	▲ 3.3	▲ 18.1
うち搾油用	40.2	38.8	32.0	(33.8)	▲ 3.3	▲ 17.6
輸 出 量	5.2	2.9	3.4	(2.1)	-	18.9
輸 入 量	4.8	3.8	8.3	(8.0)	1.1	116.1
期末在庫量	25.1	23.9	18.1	(2.0)	▲ 1.7	▲ 24.3
期末在庫率	47.6%	48.9%	44.0%	(5.3%)	▲ 0.6	▲ 4.8
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	15.90	15.50	(14.90)	▲ 0.40	▲ 2.5
単収(t/ha)	2.81	2.76	1.80	(1.95)	▲ 0.33	▲ 34.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(11 April 2023)

IGC「Grain Market Report」(16 March 2023)

写真：北部サンタフェ州の早植え大豆の圃場風景 （4月3日撮影）

圃場の大豆は成熟しているが、夏季の高温・乾燥の影響で、粒が小さく、サイズにばらつきがある。



< 中国 > 生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、主産地の黒竜江省等東北地区で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことに加え、政府の補助金による大豆生産奨励策等により収穫面積が大幅に増加したことから、前年度より23.7%増の20.3百万トンで史上最高の見込み。

なお、例年、4月後半から主産地の東北地区で播種が開始される見込み。

2月13日に公表された中国共産党・国務院（内閣に相当）の中央1号文件には、引き続き大豆の作付け拡大の取組等について記載された。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、搾油用需要の低下を踏まえ、前月予測から1.0百万トン下方修正されたものの、畜産向け国内大豆粕需要が前年度（景気減速により豚肉を中心に食肉需要が低調）と比べれば回復することにより、前年度より4.4%増の112.3百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より4.8%増の96.0百万トンの見込み。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測から1.0百万トン上方修正され、35.3百万トンで史上最高の見込み。2022/23年度の期末在庫率は、前年度から2.2ポイント増加し、31.4%となる見込み。

「OIL WORLD Weekly」（2023.4.14）によれば、中国では現在大豆備蓄を進めており、輸入量も増加している。北米、南米からの3月の大豆輸入量は、前年同月より16%増の11.5百万トン、2022/23年度の累計（2022年9月～2023年3月）は、前年同期より10%増の58.3百万トンとなった。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023年2月号」によると、2月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（6,060元/トン）から小幅に下落し、6,040元/トンとなった。主な要因としては、春節後、一定の在庫需要があり市場取引は回復したものの、東北部の農家の穀物余剰が市場に出回ったことによる。また、2月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、5,400元/トンと前月並みとなった。

大豆—中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.6	16.4	20.3	(20.3)	-	23.7
消 費 量	112.7	107.6	112.3	(114.6)	▲ 1.0	4.4
うち搾油用	93.0	87.5	91.0	(95.5)	▲ 1.0	4.0
輸 出 量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	-	-
輸 入 量	99.7	91.6	96.0	(95.1)	-	4.8
期末在庫量	31.2	31.4	35.3	(29.3)	1.0	12.4
期末在庫率	27.6%	29.2%	31.4%	(25.5%)	1.2	2.2
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.88	8.42	10.24	(9.90)	▲ 0.03	21.6
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.98	(2.05)	-	1.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 March 2023)

図：中国における大豆の期末在庫量の推移
(2022/23年度は35.3百万トンで史上最高の見込み)



出典：米国農務省「PS&D」（2023.4）を農林水産省で加工

＜ カナダ ＞ 2023/24 年度の生産量は収穫面積増で増産見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受け、前年度より 5.1%増の 6.5 百万トンの見込み。

カナダの大豆生産は、小麦やなたねと異なり、東部のオンタリオ州が主産地で、生産量の半分以上のシェアがある。オンタリオ州に隣接するマニトバ州、ケベック州でも生産されている。

カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2023.4.21）によれば、この春に作付けされる 2023/24 年度の実産量については、収穫面積が前年度から増加して、2.27 百万ヘクタールとなるとともに、平年並みの天候であれば単収が 3.0 トン/ヘクタールとなると予測されることから、前年度より 3.5%増の 6.8 百万トンであり、過去 5 年平均を上回る見込み。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、搾油用需要が前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの、前月予測からの変更はなく、前年度より 11.6%増の 2.6 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、輸出が好調なことから前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度より 5.0%増の 4.5 百万トンの見込み。

AAFC によれば、2022/23 年度の実輸出量は、前年度から 3 %増の 4.4 百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2022/23 年度（2022 年 8 月～2023 年 7 月）のうち、2022 年 8 月～2023 年 2 月の輸出量は 299.2 万トンとなり、国別では、中国（128.8 万トン）向けが 43%を占め、続いて、イラン（44.8 万トン）、アルジェリア（32.1 万トン）、イタリア（25.1 万トン）の順となっている。2023 年 2 月の輸出量は 5.8 万トンで、全量が中国向けである。

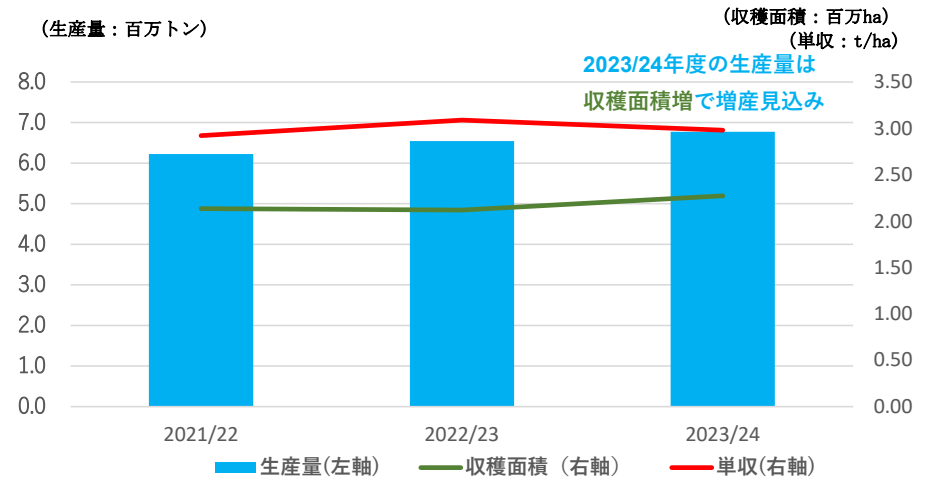
USDA によれば、2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、0.4 百万トンの見込み。2022/23 年度の期末在庫率は、前月予測から 4.6 ポイント下方修正され、4.9%の見込み。

大豆－カナダ

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)			
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	6.4	6.2	6.5 (6.5)	-	5.1	
消 費 量	2.6	2.3	2.6 (2.5)	-	11.6	
うち搾油用	1.6	1.8	2.0 (1.9)	0.1	5.7	
輸 出 量	4.6	4.3	4.5 (4.4)	0.3	5.0	
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	-	▲ 7.6	
期末在庫量	0.3	0.4	0.4 (0.4)	▲ 0.3	▲ 18.0	
期末在庫率	4.1%	6.5%	4.9% (5.1%)	▲ 4.6	▲ 1.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	2.04	2.08	2.12 (2.12)	-	1.9	
単収 (t/ha)	3.12	2.99	3.09 (3.09)	-	3.3	

資料：USDA 「PS&D」
「World Agricultural Production」 (11 April 2023)
AAFC 「Outlook for Principal Field Crops」 (21 April 2023)

図：カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC 「Outlook for Principal Field Crops」 (2023.4.21) をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

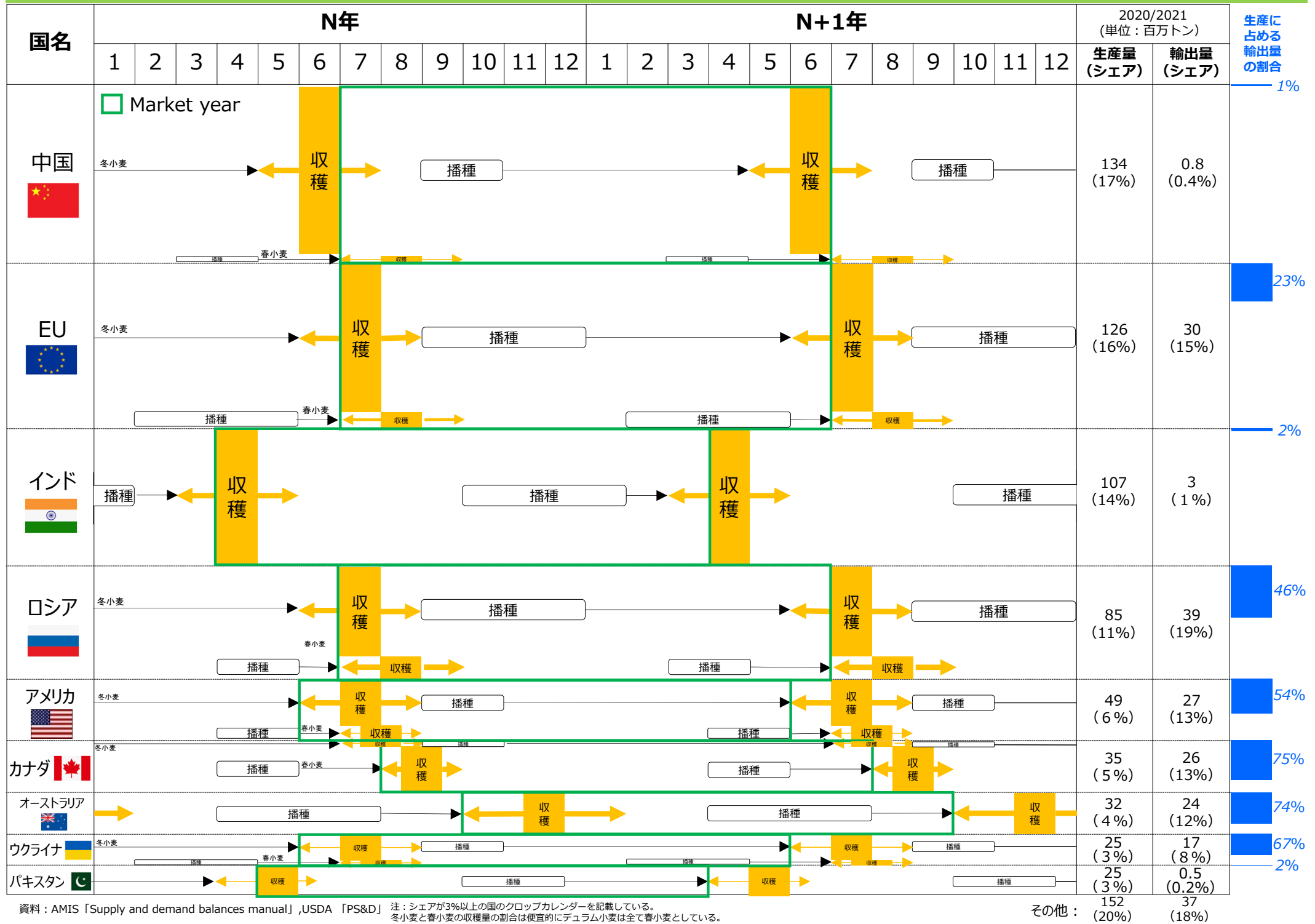
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏 : $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

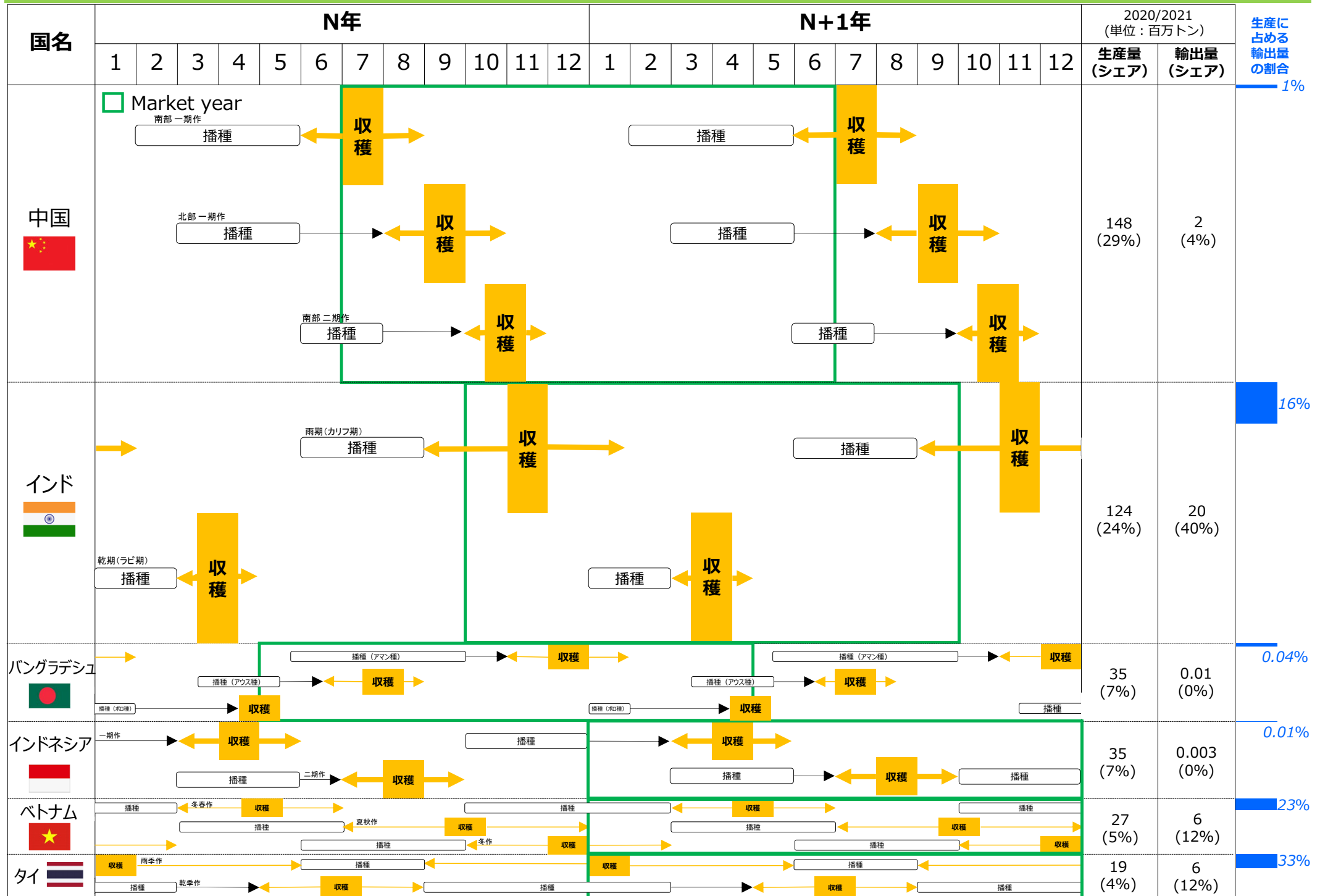
主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

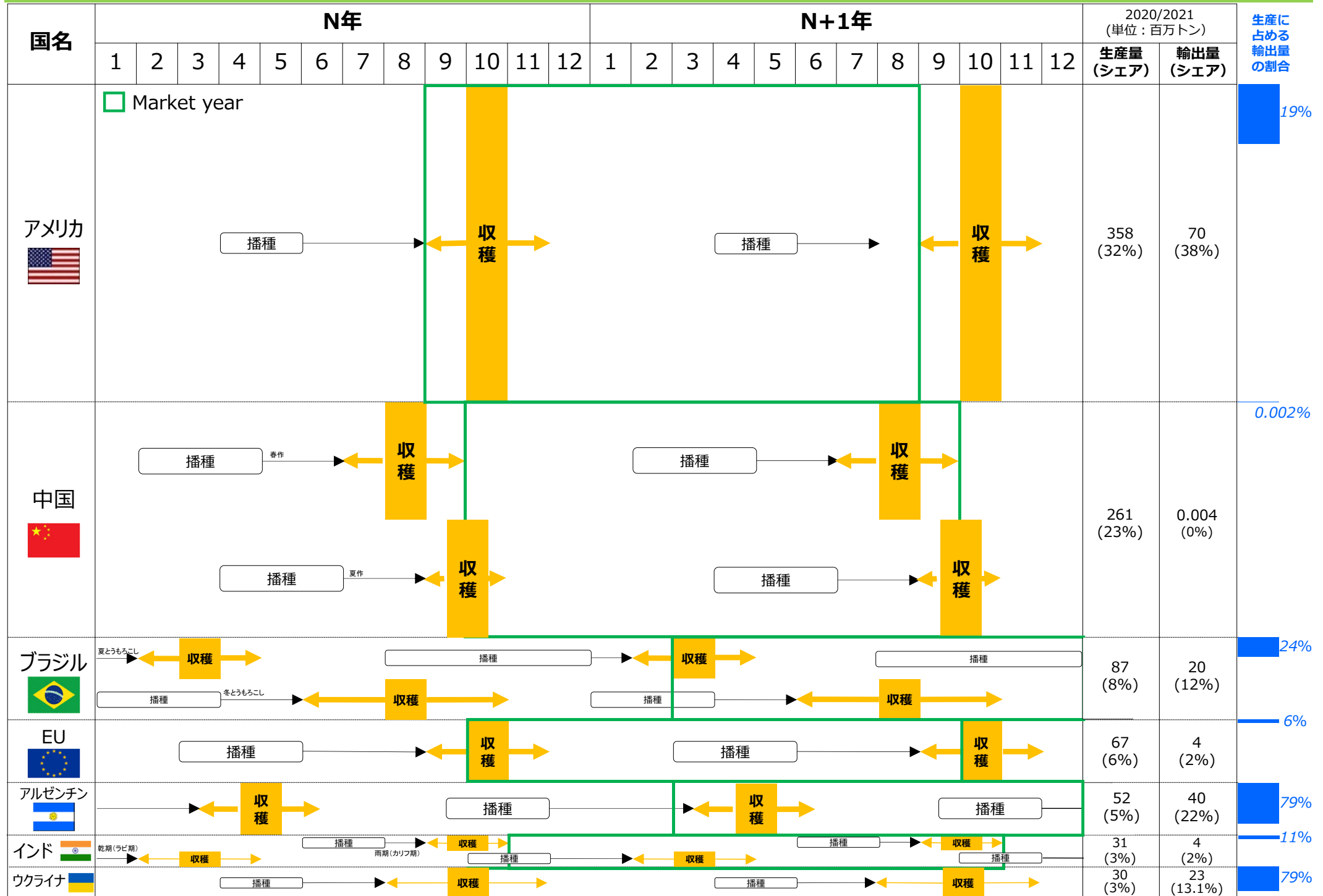


資料：AMIS「Supply and demand balances manual」,USDA「PS&D」 注：シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

その他：121
(24%) 16
(32%)

主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

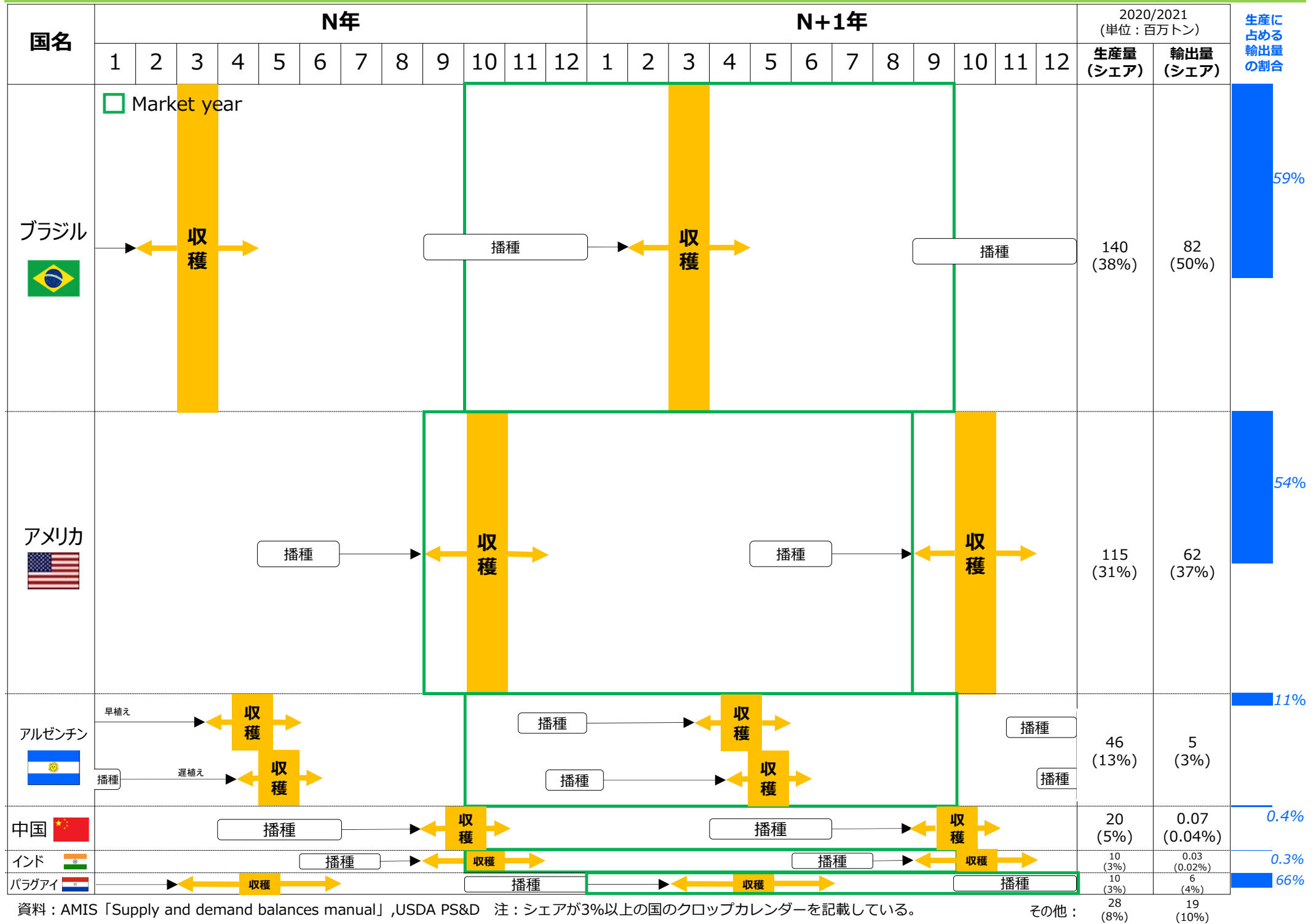


資料: AMIS「Supply and demand balances manual」, USDA「PS&D」注: シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他: 242 (19%) 21 (11%)

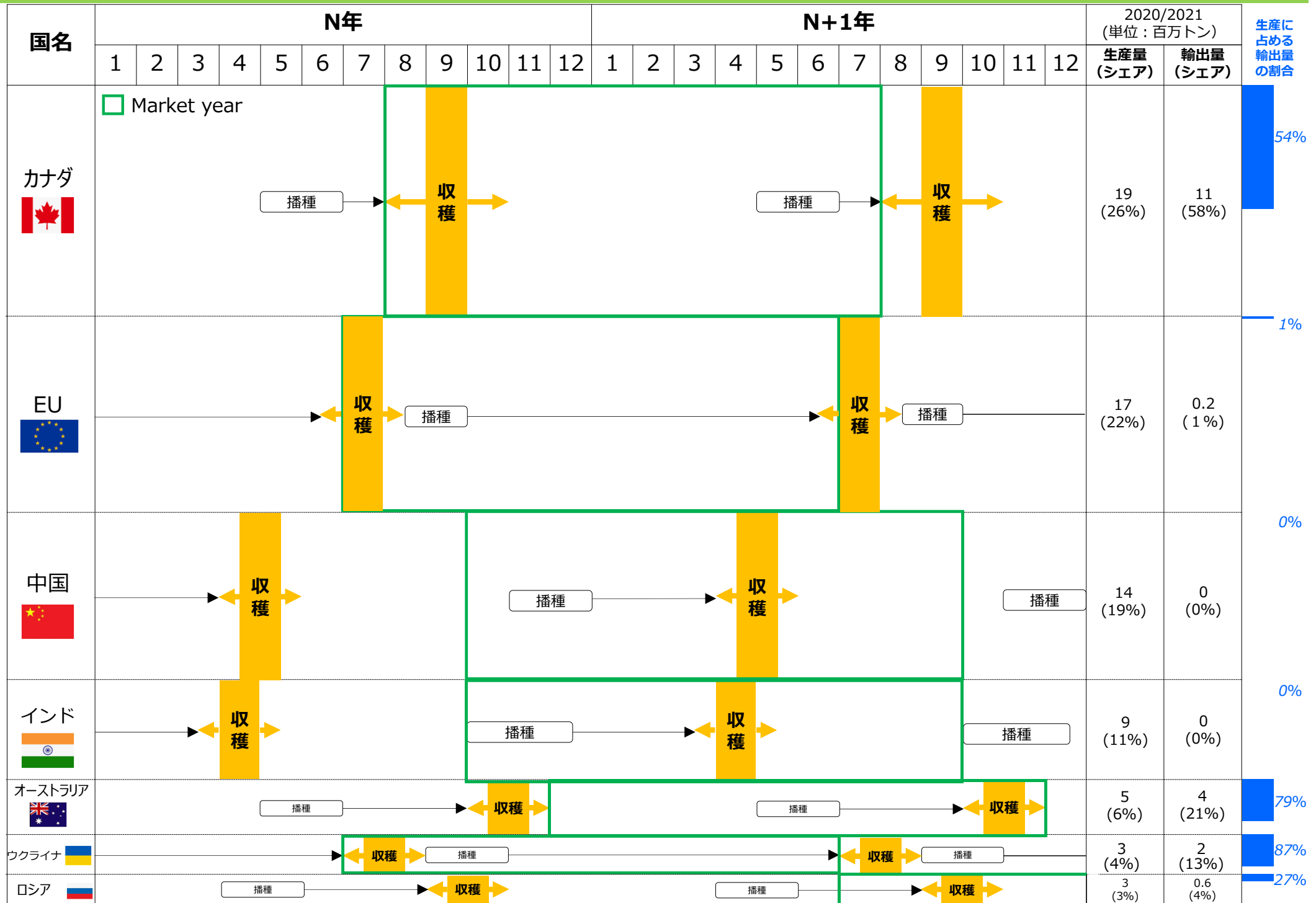
主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料: USDA「Crop Calendars」、「PS & D」 注: シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している

その他:

第22号特別分析トピック:世界食料需給の見通しについて

世界の食料需給の動向と 中長期的な見通し

ー世界食料需給モデルによる2032年の世界食料需給の見通しー

令和5年3月
農林水産政策研究所



目次

I. 動向編

1. 世界の穀物及び大豆の需給動向	1
2. とうもろこしの需要動向	2
3. とうもろこしの生産量変化	3
4. とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2002年とうもろこし貿易フロー図	4
5. とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2020年とうもろこし貿易フロー図	5
6. 大豆の生産量変化	6
7. 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2002年大豆貿易フロー図	7
8. 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2020年大豆貿易フロー図	8
9. 小麦需給と貿易動向	9
10. 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2002年小麦貿易フロー図	10
11. 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2020年小麦貿易フロー図	11
12. 米需給と貿易動向	12
13. 中国：食糧増産路線を再強化、食用油自給率向上目指し、大豆・油料の増産重視	13
14. 中国における豚肉生産・価格等の動向	14
15. ロシア・ウクライナ（1）：主要輸出国間の戦争は穀物等の市況に大きな影響	15
16. ロシア・ウクライナ（2）：農産物輸出は継続するも先行きは不透明	16
17. ブラジル：穀物・大豆の生産動向	17
18. アルゼンチン：穀物・大豆の生産及び輸出の動向	18
19. インドの穀物輸出・植物油輸入動向	19
20. 新型コロナウイルス禍・ウクライナ侵攻後の穀物等の価格動向	20
21. 海上輸送運賃の推移と消費者物価の上昇	21
22. バイオ燃料の需要動向	22
23. 国際商品価格・穀物及び大豆の価格の推移	23

II. 見通し編

1. 世界食料需給モデルによる予測の目的及び前提	24
2. 2032年における世界の食料見通し－『経済減速の懸念』－【概要】	25
3. 世界食料需給モデルの試算の前提に使用した総人口及びGDPの見通し	26
4. 地域別の需給見通し：とうもろこし	27
5. 地域別の需給見通し：大豆	28
6. 地域別の需給見通し：小麦	29
7. 地域別の需給見通し：米	30
8. 地域別の需給見通し：肉類	31
9. 穀物の需給見通し：世界の穀物の消費・生産量の内訳	32
10. 穀物・畜産物等の需給見通し：穀物及び大豆の国際価格見通し	33
11. 穀物・畜産物等の需給見通し：世界における各品目の消費増加と食料価格	34
（参考1）OECD－FAO、USDAにおける中期的な世界食料需給見通しの概要	35
（参考2）世界食料需給モデルの概要	36

I. 動向編

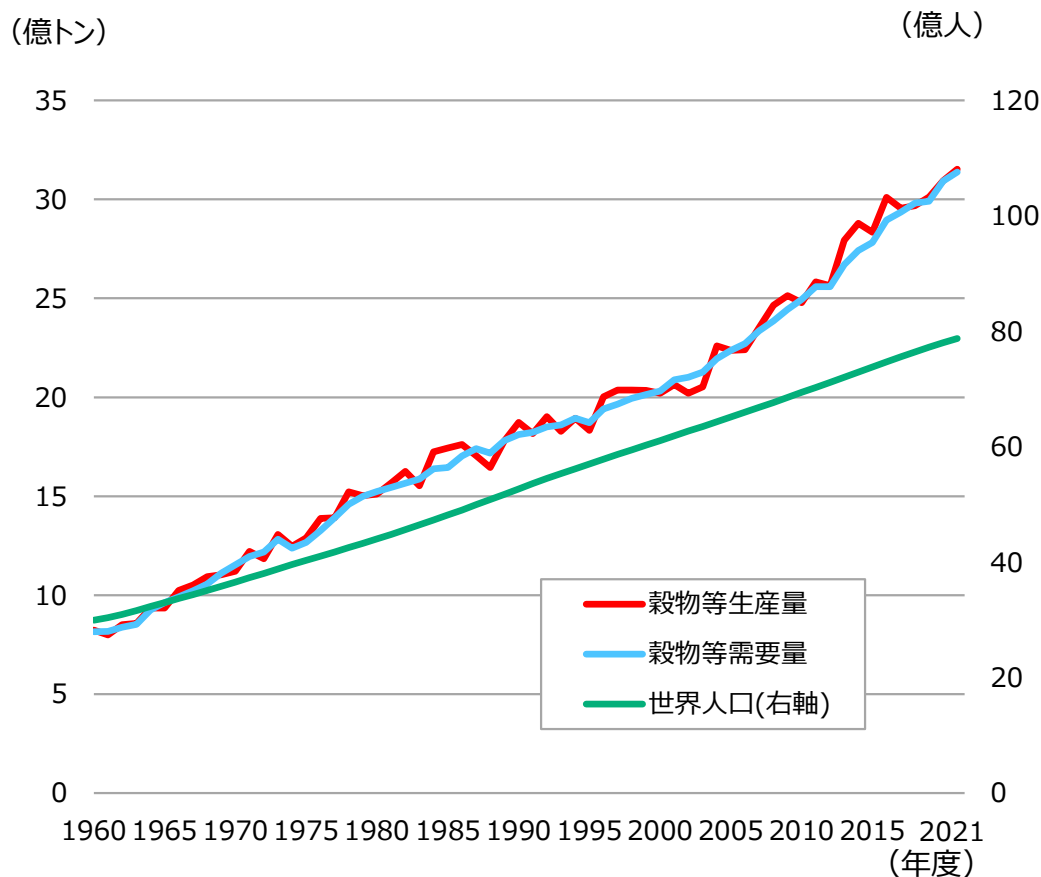
1 世界の穀物及び大豆の需給動向

- 世界の穀物及び大豆の需要量は、総人口の伸び率を上回って増加。
- 需要量は、とうもろこし及び大豆の伸びが大きく増加。穀物の中でとうもろこし需要量が最大。
- 需要量の増加に対して、生産量も増加。短期的には豊凶等による変動はあるが、コロナ前は生産量が需要量をやや上回り、近年は生産量と需要量がほぼ均衡している。

(参考) 1970年に比べ、2021年の人口は2.1倍、需要量はそれぞれ小麦が2.4倍、米2.4倍、とうもろこし4.2倍、大豆7.9倍

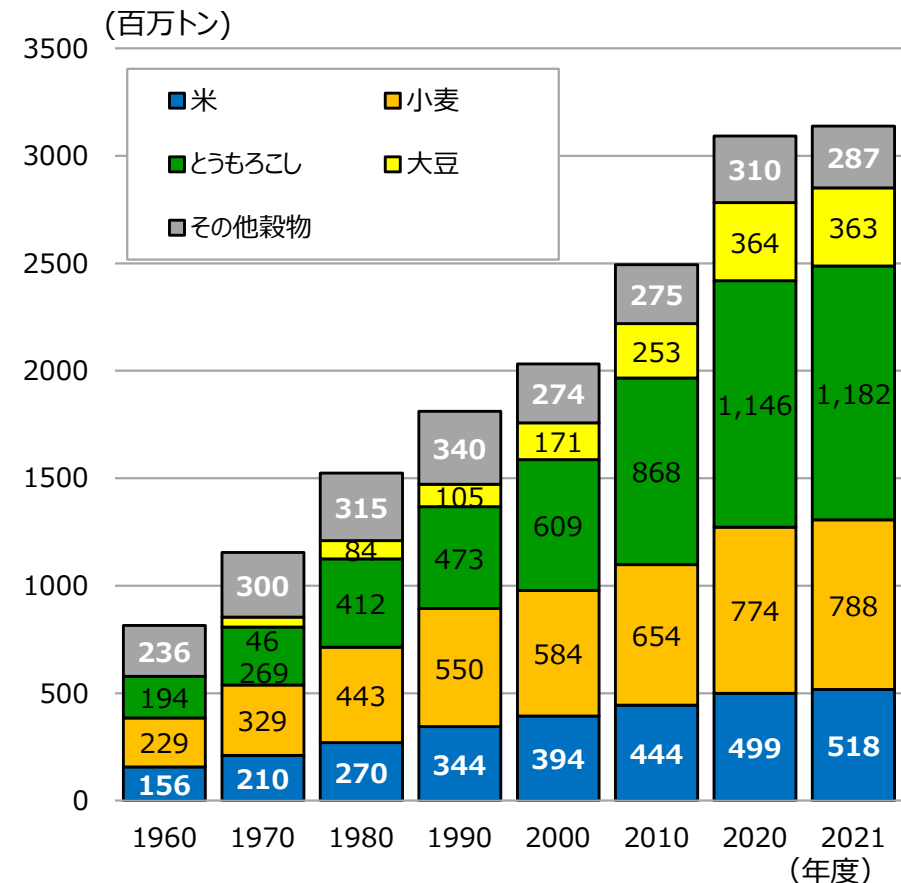
- 新型コロナウイルス感染症の世界的流行となった2020年以降も生産量及び需要量は増加。

① 世界の穀物及び大豆の需給と世界人口の動向



資料 : USDA PS&D Online data,
UN World Population Prospects: The 2022 Revision.

② 穀物及び大豆の需要の品目別内訳

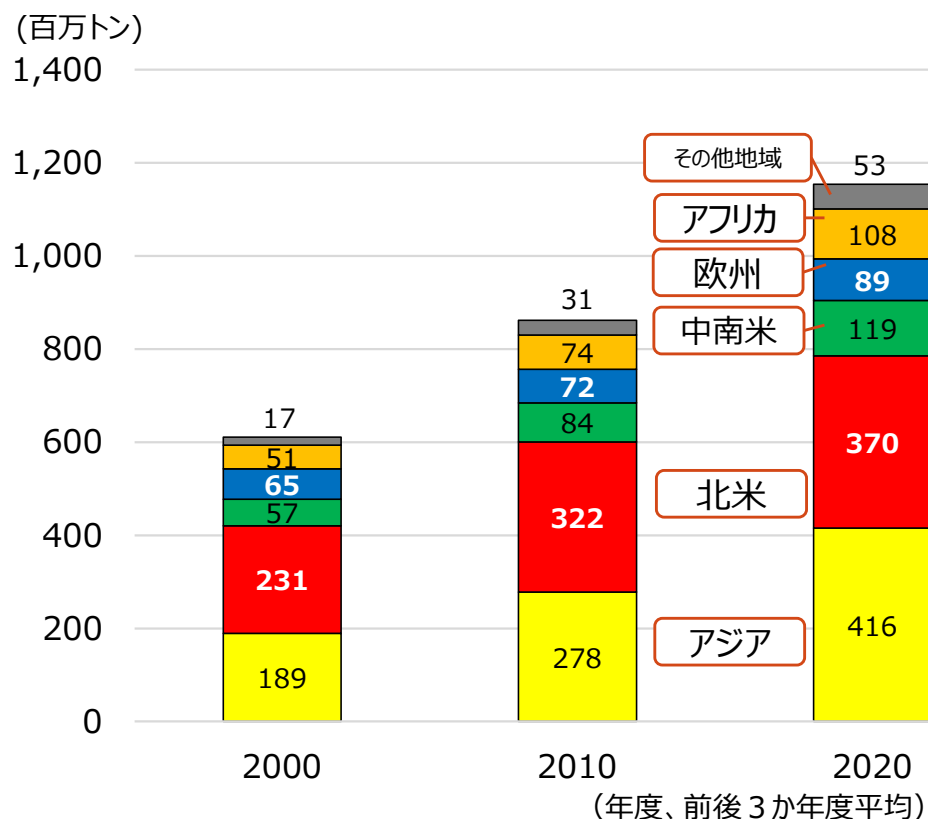


資料 : USDA PS&D Online data

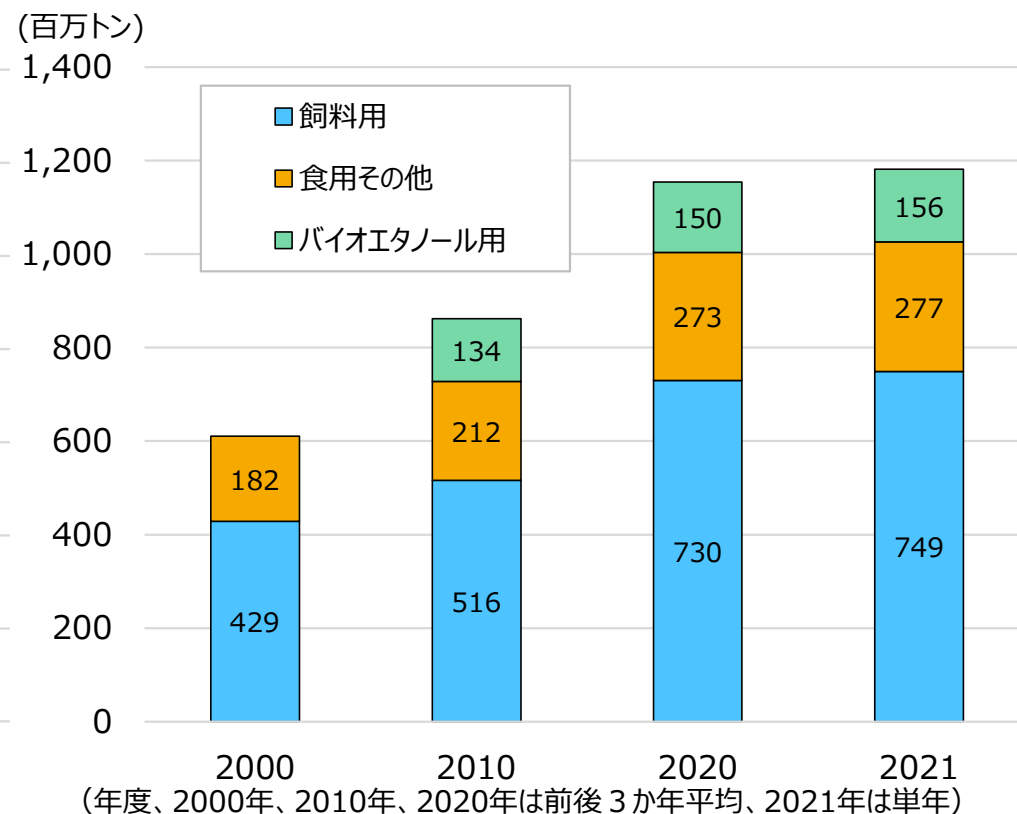
2 とうもろこしの需要動向

- 2020年度(前後3か年度平均)の世界のとうもろこし需要量は、2000年度(同平均)に比べて88%増加。地域別では、アジアの需要量が119%増加し、2020年度に36%のシェアを占める。
- 現在の用途別内訳では、2000年度に比べて飼料用が75%増加し、食用等は52%増加。2000年代後半からバイオエタノール用が新規需要として消費量を「底上げ」している。
- 2010年度(同平均)から2021年度までの用途別の増加率は、飼料用・食用等がそれぞれ45%・31%に対して、新規需要のバイオエタノール用の伸びは16%に留まる。
- コロナ禍でも2020年以降の世界のとうもろこしの需要量はわずかながらも増加。

① 世界のとうもろこし需要動向の地域別内訳



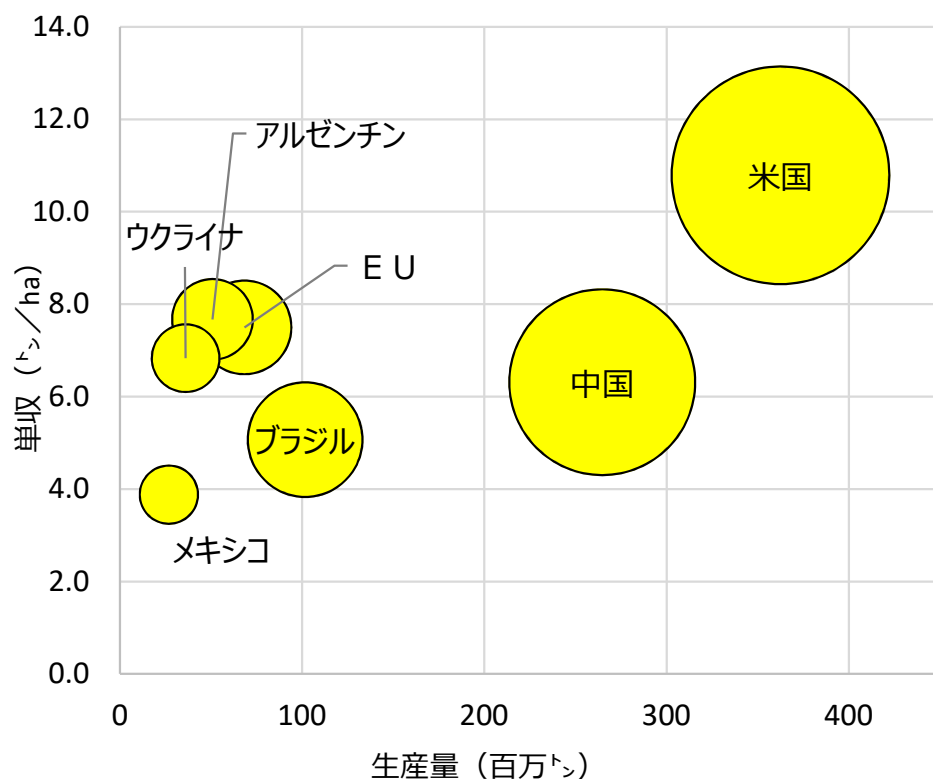
② とうもろこし需要の用途別内訳の動向



3 とうもろこしの生産量変化

- 世界のとうもろこしの生産(2019-21年度平均)は、米国が世界生産量の31%のシェアを占めてトップを維持し、中国、ブラジルを加えた上位3か国で63%のシェア。(※ウクライナ情勢による影響が懸念されている)
- 2010年代、米国は、主に単収の伸びが生産拡大に寄与。ブラジル、アルゼンチン、ウクライナは、収穫面積の拡大も生産に大きく寄与。単収は各国で差異があり、ブラジルの単収は5.3トン/haで、米国の11.1トン/haの約半分。ブラジルは2000年度に比べ生産量が2倍以上に増加。アルゼンチン、ウクライナの実産量は、それぞれ3倍以上、8倍程度に拡大。

① 世界のとうもろこし生産量・単収と主要国の生産量シェア（2019-21年度平均）



② 主要とうもろこし生産国における生産量の増減要因

(2020年度=100)

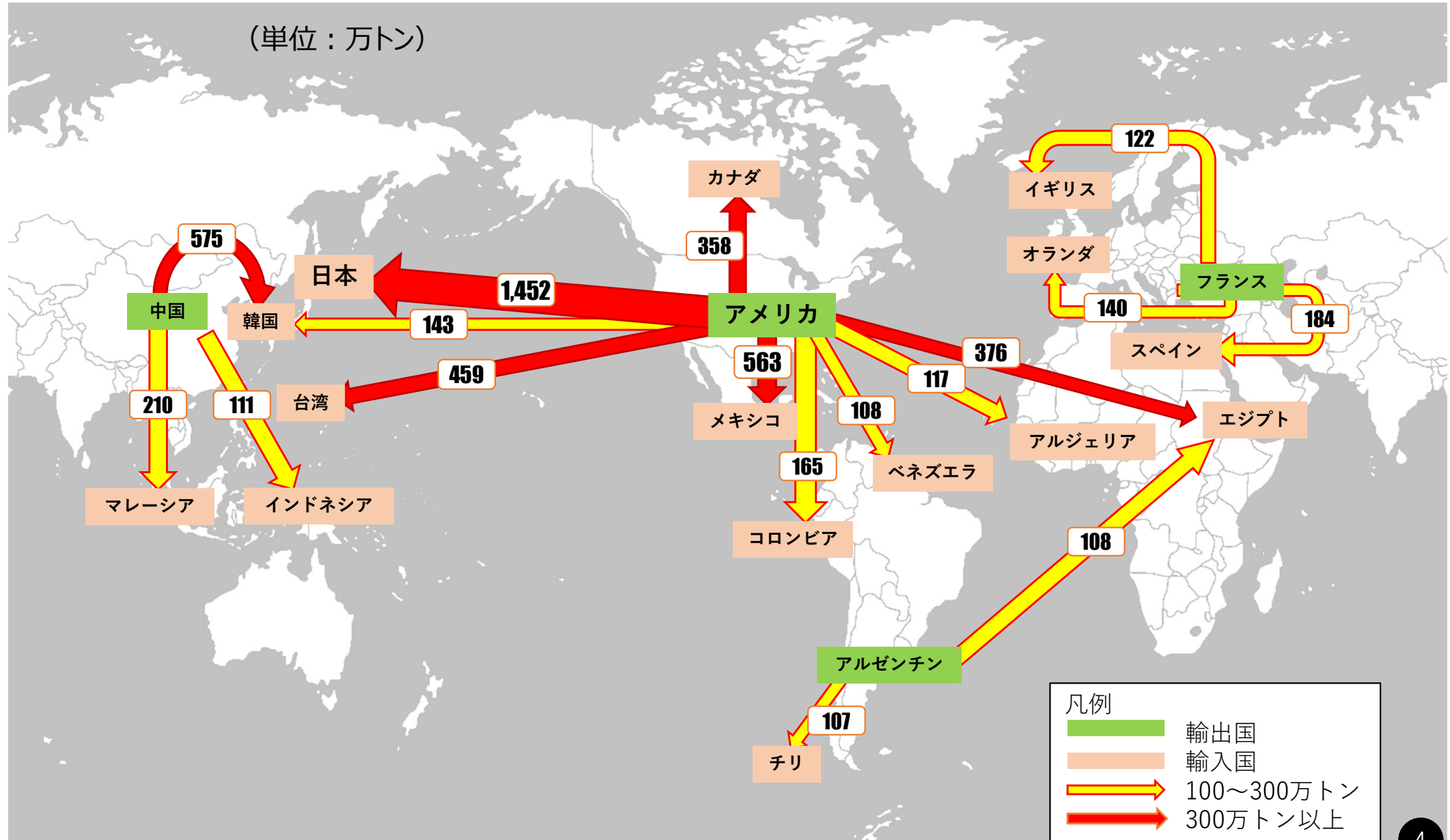
		1990年度	2000年度	2010年度	2020年度	2021年度
米国	生産量	56.22	70.26	88.05	100.00	106.82
	収穫面積	81.34	88.01	98.95	100.00	103.65
	単収	69.14	79.83	89.03	100.00	103.07
中国	生産量	37.14	40.66	73.18	100.00	104.56
	収穫面積	51.87	55.87	84.76	100.00	104.99
	単収	71.52	72.78	86.23	100.00	99.53
ブラジル	生産量	27.97	47.74	65.98	100.00	133.33
	収穫面積	67.79	65.19	69.35	100.00	109.55
	単収	41.19	73.23	95.19	100.00	121.74
アルゼンチン	生産量	14.78	29.54	48.46	100.00	95.19
	収穫面積	29.01	42.99	57.25	100.00	108.40
	単収	51.01	68.64	84.63	100.00	87.78
ウクライナ	生産量	15.64	12.70	39.34	100.00	139.04
	収穫面積	22.87	23.71	49.08	100.00	101.69
	単収	68.33	53.56	80.07	100.00	136.65
世界計	生産量	42.66	52.39	75.21	100.00	107.59
	収穫面積	64.79	68.84	83.64	100.00	103.94
	単収	65.96	76.19	89.95	100.00	103.53

4 とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2002年とうもろこし貿易フロー図

2002年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、米国が60%と圧倒的に高く、次いで中国が13%、アルゼンチンが12%と続く。また、輸入量におけるシェアは、日本が22%を占め、次いで韓国、メキシコ、エジプト等が続く。

(USDA PS&D Online data)

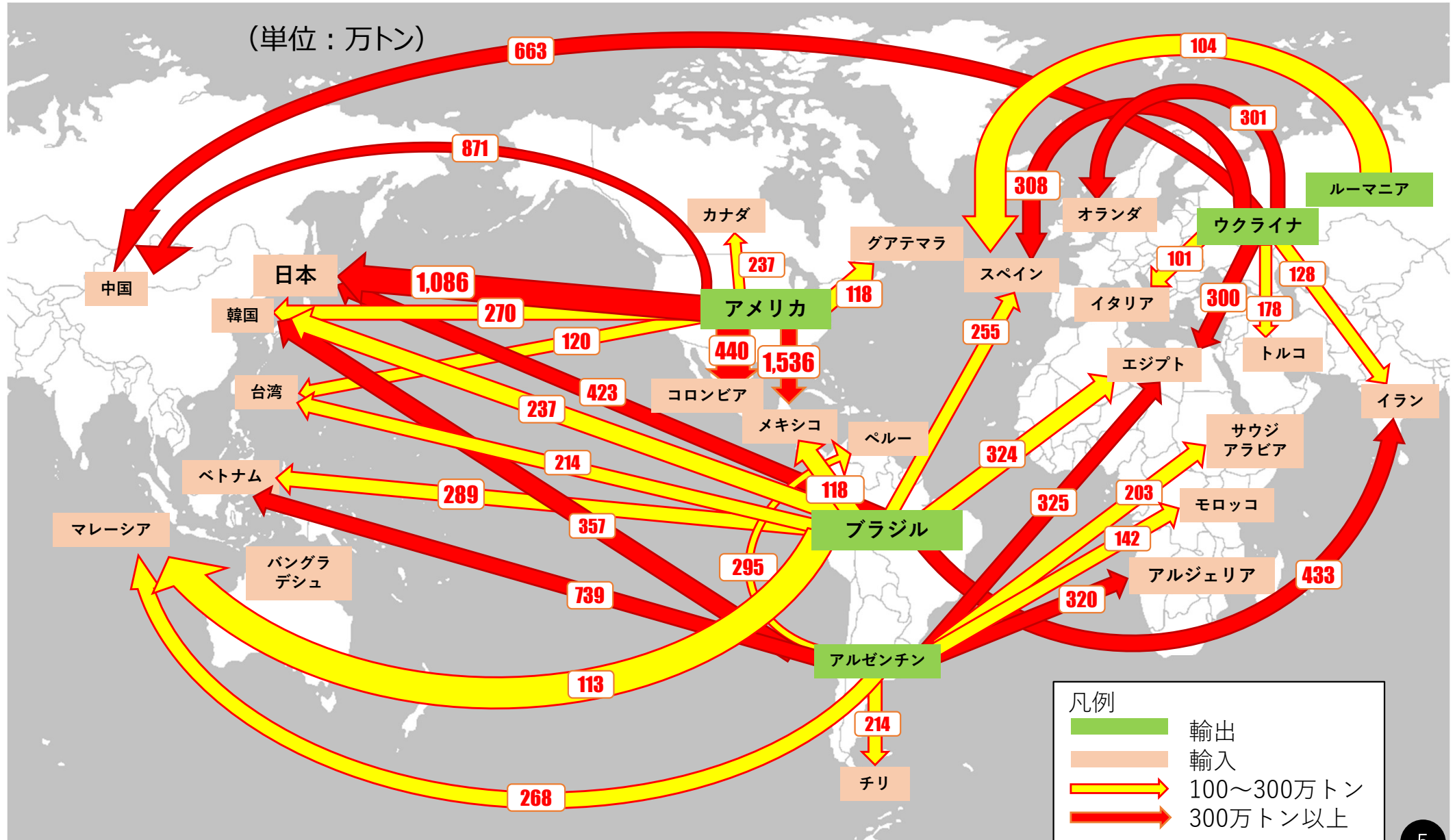
注：Global Trade Atlasのデータ（2020.01）で、とうもろこし(HS1005)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図



注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

5 とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2020年のとうもろこし貿易フロー図

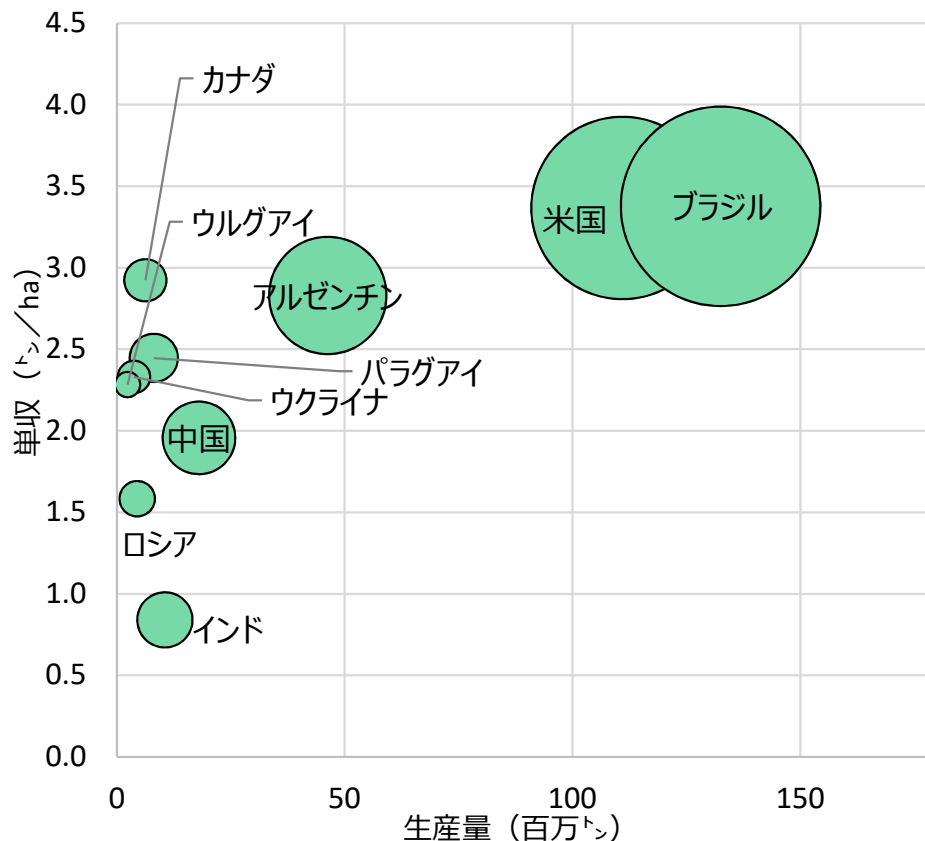
(USDA PS&D Online data)



6 大豆の生産量変化

- 大豆生産量は(2019-21年度平均)、ブラジル、米国がそれぞれ世界の生産量の37%、31%のシェアを占め、アルゼンチンを含めた上位3か国のシェアが82%を占めて偏在化している。
- 単収では、上位3か国に大きな差異はなく、アルゼンチンも約3トン/haに達している。ブラジル、アルゼンチンは2000年以降、単収だけでなく、収穫面積の増加が大きく生産量の増加に寄与し、それぞれ2000年度に比べて3倍、1.5倍程度まで拡大。米国は、単収の増加が主に寄与。

① 世界の大豆生産量・単収と主要国の生産量シェア
(2019-21年度平均)



資料 : USDA PS&D Online data

② 主要大豆生産国における生産量の増減要因

(2020年度=100)

		1990年度	2000年度	2010年度	2020年度	2021年度
ブラジル	生産量	11.3	28.3	54.0	100.0	92.8
	収穫面積	24.7	35.3	61.3	100.0	105.1
	単収	45.9	80.5	88.1	100.0	88.4
米国	生産量	45.7	65.4	79.0	100.0	105.9
	収穫面積	68.4	87.7	92.7	100.0	104.5
	単収	66.8	74.6	85.1	100.0	101.5
アルゼンチン	生産量	24.9	60.2	106.1	100.0	95.0
	収穫面積	28.8	63.1	111.1	100.0	96.5
	単収	86.1	95.0	95.4	100.0	98.2
中国	生産量	56.1	78.6	78.6	100.0	83.6
	収穫面積	76.5	94.2	88.0	100.0	85.1
	単収	73.7	83.8	89.4	100.0	98.5
インド	生産量	24.9	50.2	96.9	100.0	113.9
	収穫面積	19.8	44.9	74.3	100.0	96.8
	単収	125.9	112.3	130.9	100.0	117.3
世界合計	生産量	28.3	47.7	71.9	100.0	97.2
	収穫面積	42.2	58.6	80.4	100.0	101.5
	単収	67.1	81.5	89.2	100.0	95.8

資料 : USDA PS&D Online data

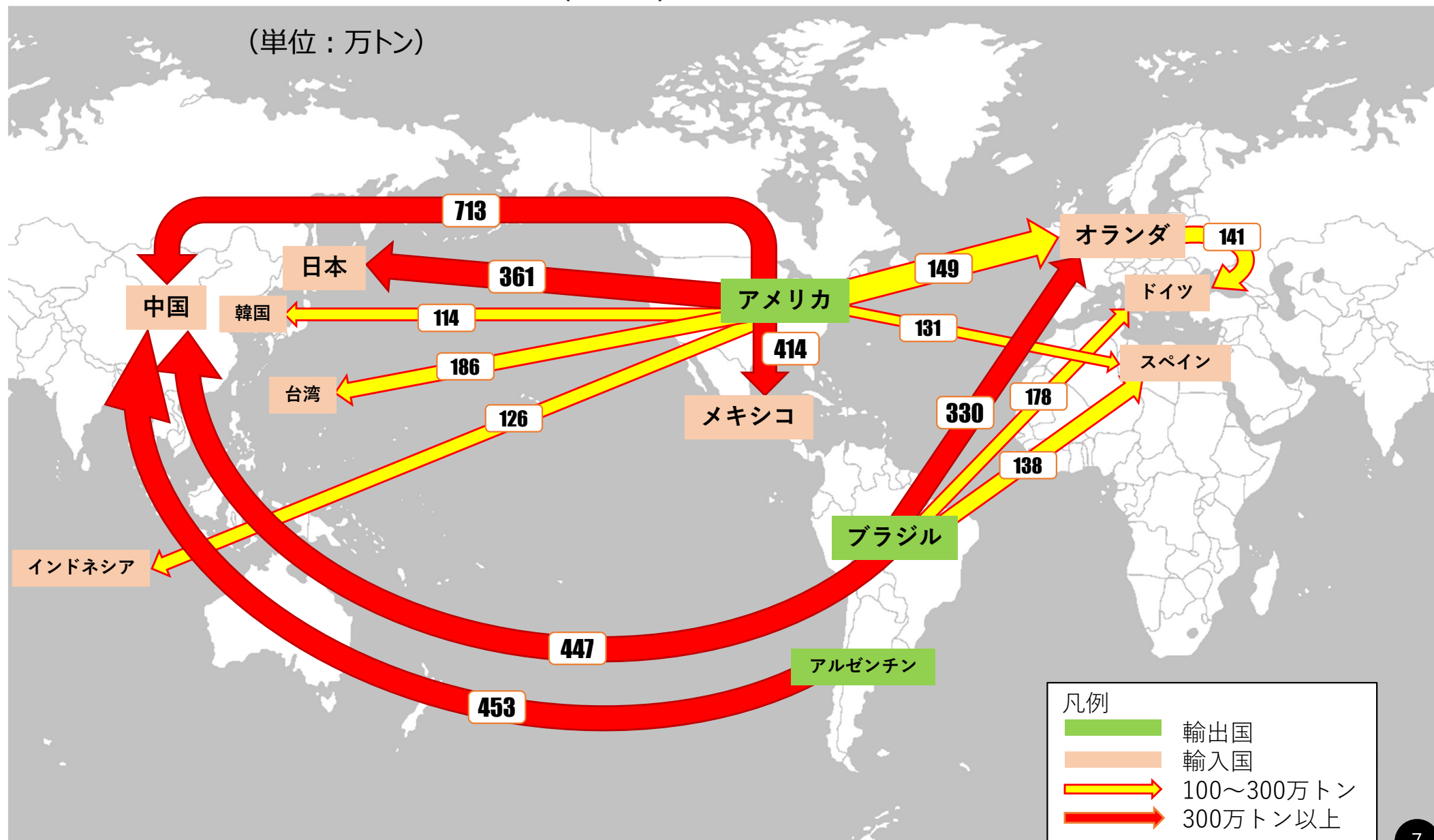
7 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2002年大豆貿易フロー図

2002年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、米国が48%と高く、次いでブラジルが32%を占めた。輸入量シェアは、中国が28%、日本とメキシコがそれぞれ約8%を占めた。

(USDA PS&D Online data)

注：Global Trade Atlasのデータ（2020.01）で、大豆(HS1201)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

(単位：万トン)



注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

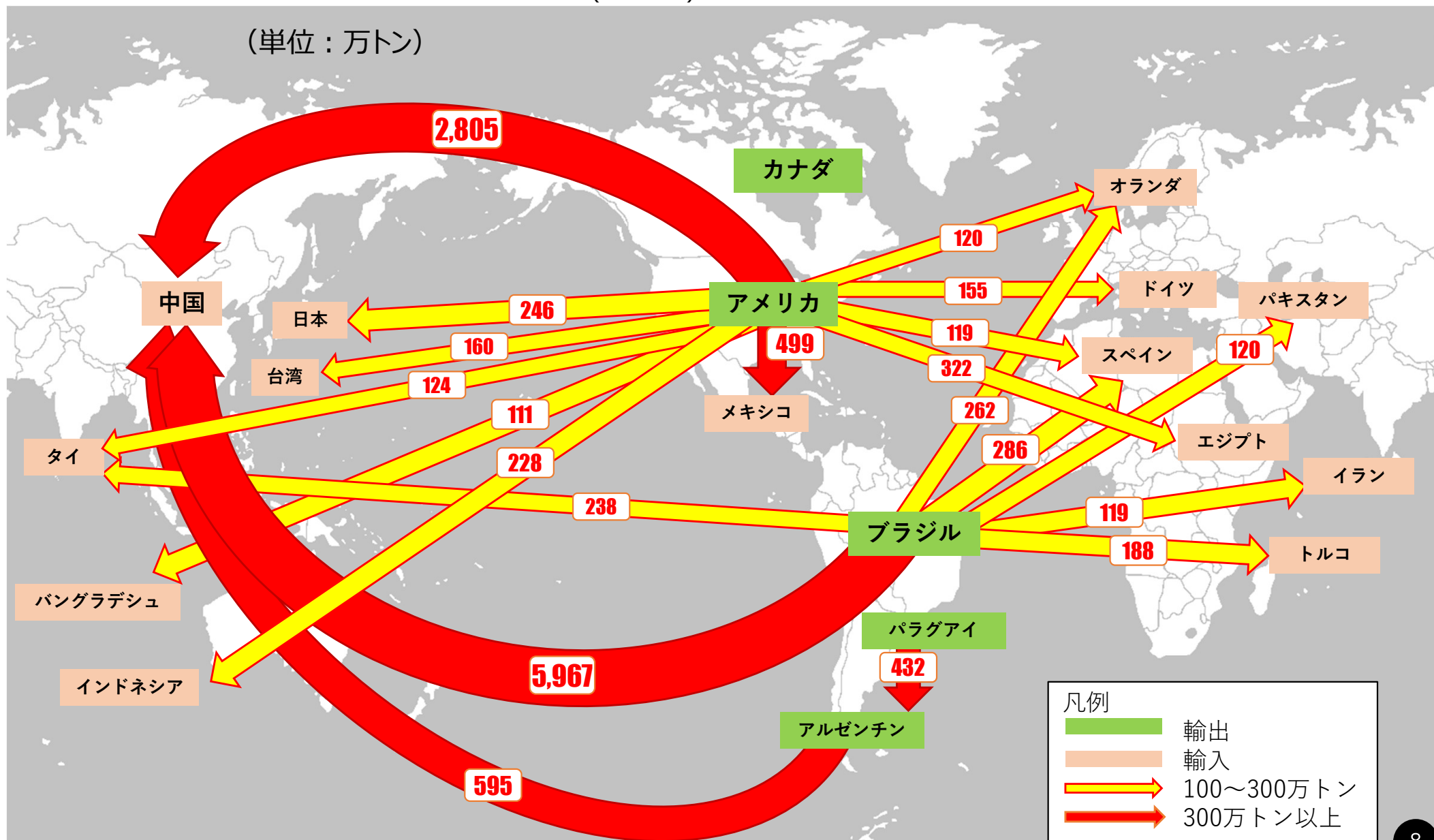
8 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2020年の大豆貿易フロー図

2020年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、ブラジルが52%と大幅に高まっている。輸入量シェアは、中国が59%と大幅に上昇する一方、日本は2%に低下。

(USDA PS&D Online data)

注：Global Trade Atlasのデータ（2023.01）で、大豆(HS1201)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

(単位：万トン)

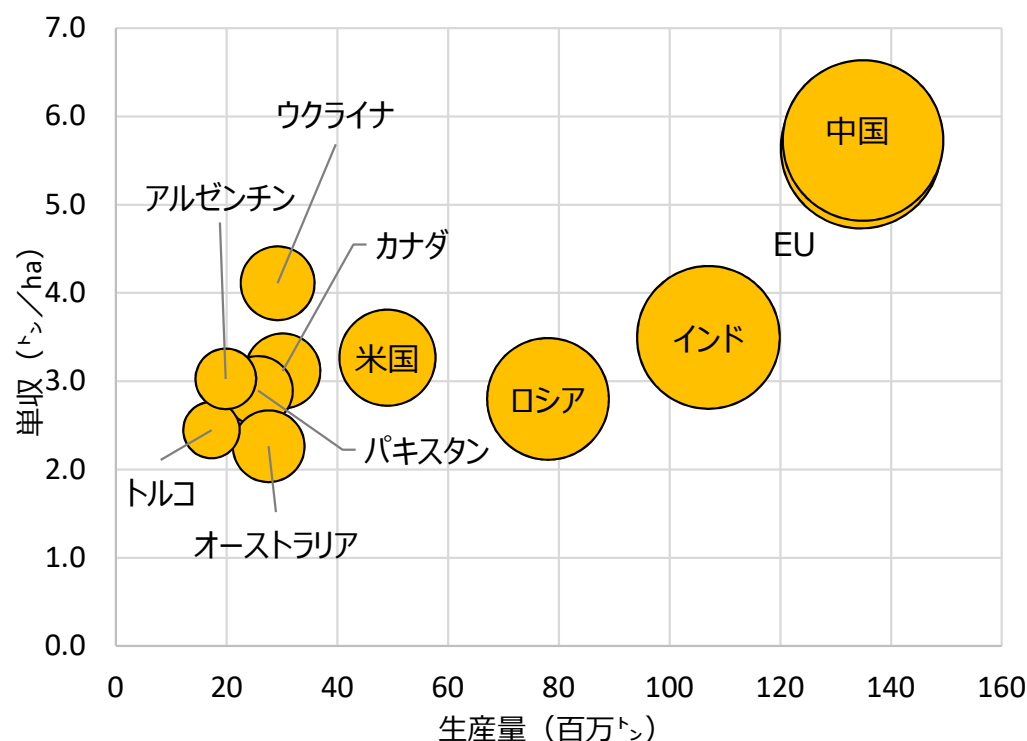


注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

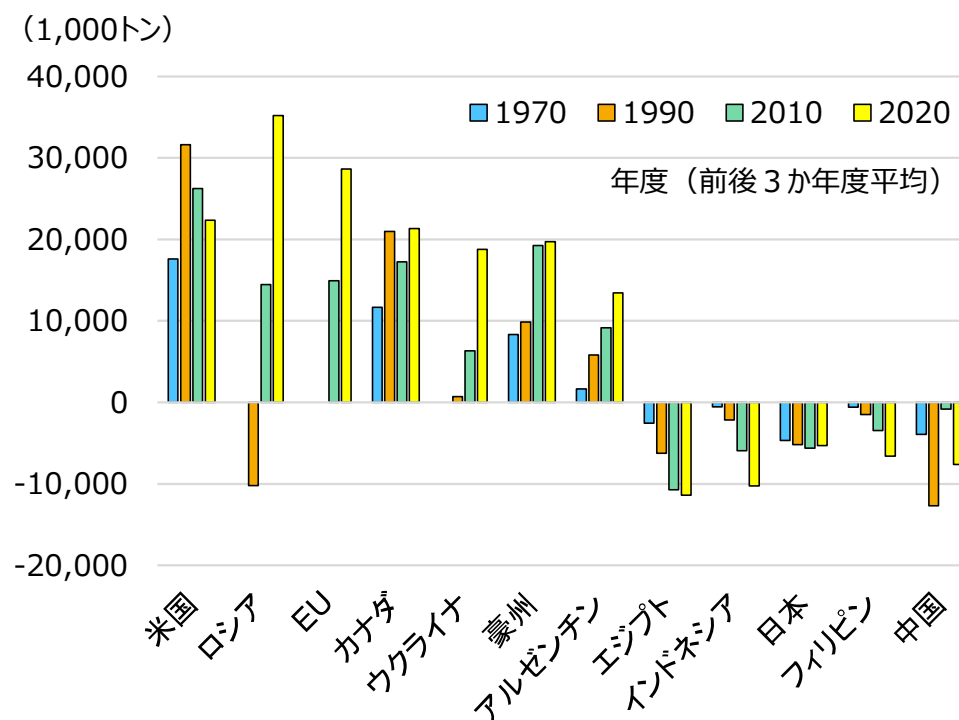
9 小麦需給と貿易動向

- 世界の小麦生産量(2019-21年度平均)は、中国、EUがそれぞれ17%を占め、次いで、インド、ロシア、米国と続き、上位5か国・地域で65%のシェア。米国のシェアは低下傾向。
- 小麦は、主に単収の伸びにより生産量が増加する一方、先進国の収穫面積は、若干の減少傾向にある。
(※ウクライナ情勢による影響が懸念されている)
- 2000年代以降、伝統的な主要輸出国である米国、カナダ等に加えて、新興のロシア、ウクライナが輸出市場で台頭。ロシアの輸出量は2010年代後半に米国の輸出量を超過している。
- 北アフリカ・中東地域ではエジプト等、東南アジアではインドネシア、フィリピン等が輸入拡大。ロシア、ウクライナ等の新興輸出国が、中東・北アフリカ等へ輸出を増やした。

① 世界の小麦生産量・単収と主要国の生産量シェア（2019-21年度平均）



② 国別小麦純輸出量の推移



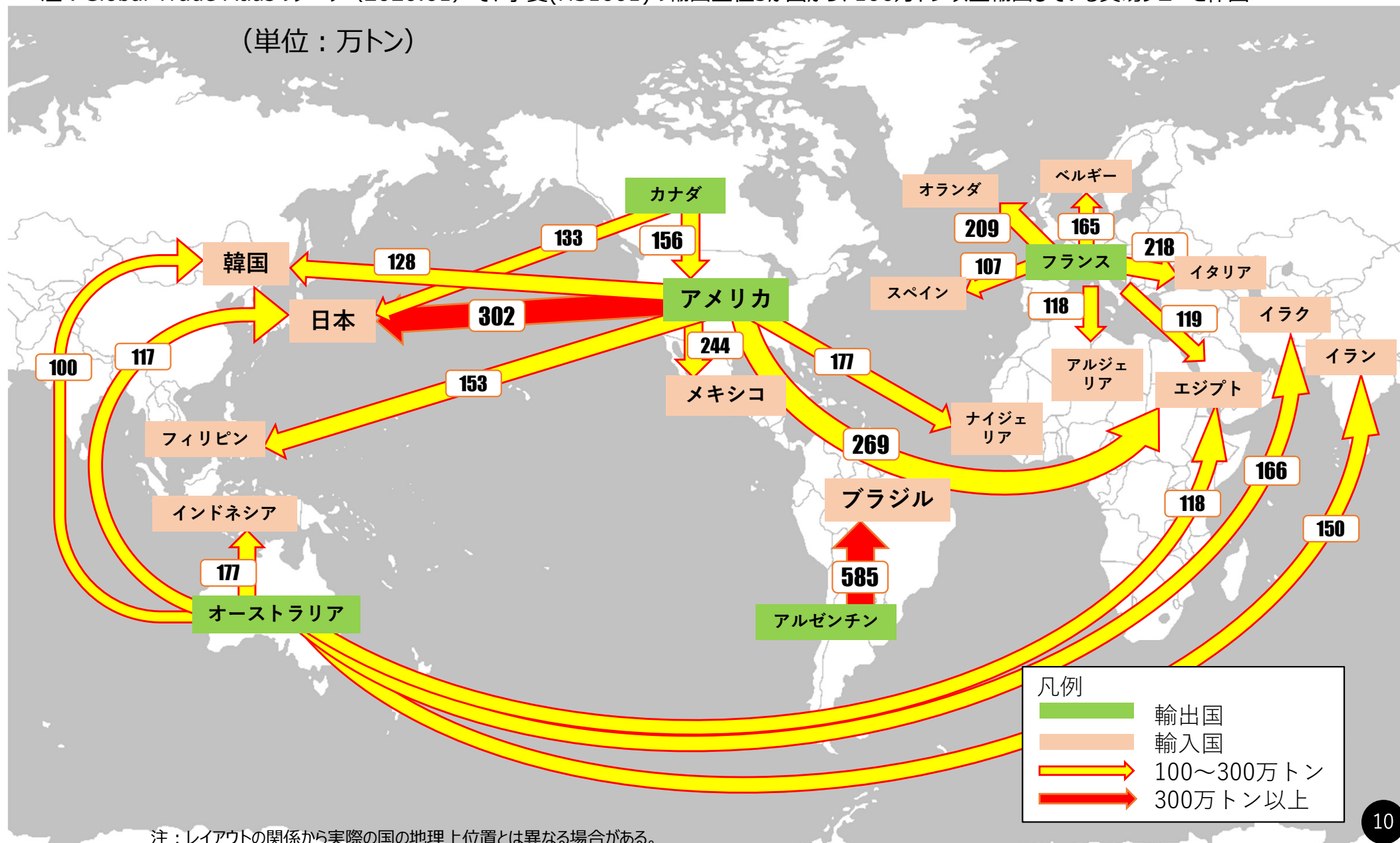
10 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2002年小麦貿易フロー図

2002年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、米国が25%で最大。豪州、カナダ、アルゼンチン等が続く。輸入量シェアは、エジプト、ブラジル、日本等がそれぞれ約6～8%を占めた。

(USDA PS&D Online data)

注：Global Trade Atlasのデータ（2020.01）で、小麦(HS1001)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

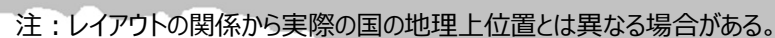
(単位：万トン)



注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

2020年（前後3年平均）の輸出量シェアは、米国が13%に低下する一方、ロシアが18%に増加。東南アジア、中東・アフリカへの輸出が増加。

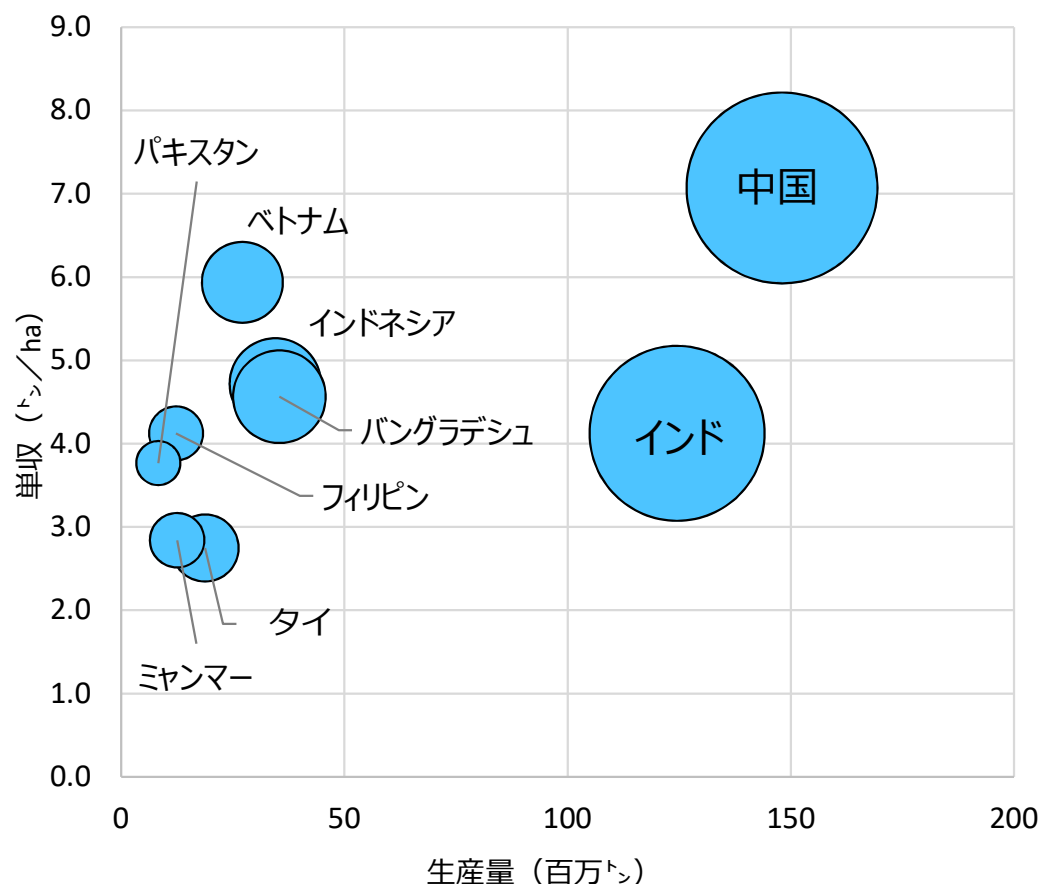
注：Global Trade Atlasのデータ（2023.01）で、小麦(HS1001)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図



12 米需給と貿易動向

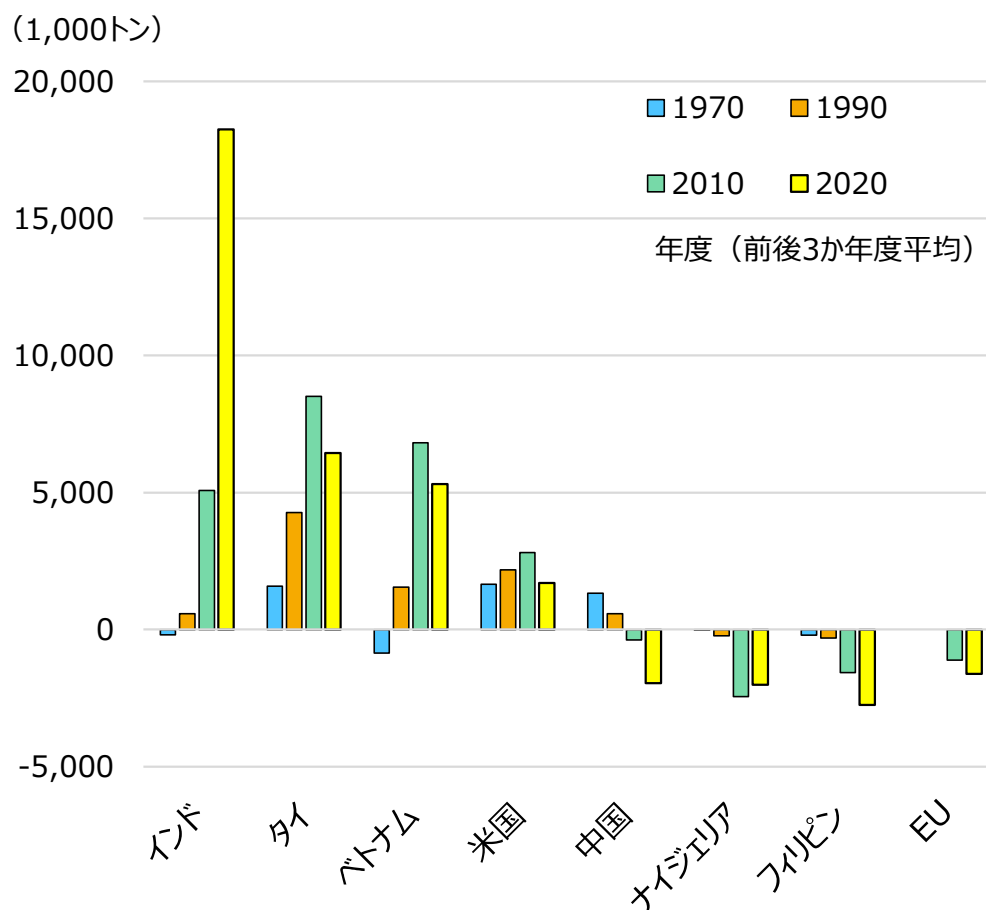
- 世界の米生産量(2019-21年度平均)は、アジアが生産量の9割を占める主要穀物。中国、インドの上位2か国で54%のシェアを占め、バングラディシュ、インドネシア、ベトナム、タイと続く。
- 輸出量は、インドが36%のシェアを占め、タイ、ベトナムが続く。
- 単収は、主要輸出国のインド、タイ、ベトナムや主要生産国の中国の間でも差が大きい。
- ナイジェリア等のアフリカ諸国の輸入量が増加。サブサハラ・アフリカの輸入量は世界の輸入量の約1/3。

① 世界の米生産量・単収と主要国の生産量シェア（2019-21年度平均）



資料：USDA PS&D Online Data

② 国別米純輸出量の推移

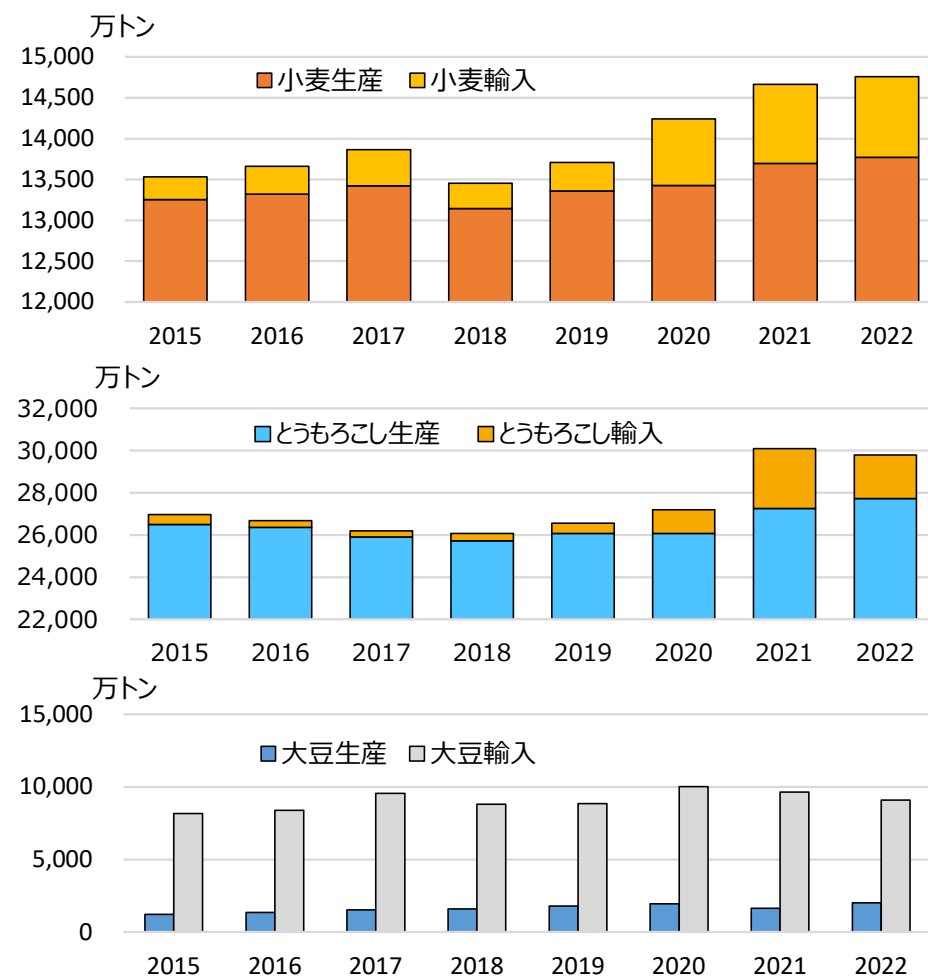


資料：USDA PS&D Online Data

13 中国：食糧増産路線を再強化、食用油自給率向上目指し、大豆・油糧の増産重視

- 2022年の食糧(米、小麦、とうもろこし、豆類、いも類、その他穀類)の総生産量は6億8,653万トンと史上最高を記録。2015年以降8年連続6億5千万トン超え、特に大豆は、前年より24%増の2,029万トン。菜種は6%増の1,553万トン。
- とうもろこし:2億7,720万トン、小麦:1億3,772万トン（共に史上最高）、米:2億0,850万トン（干ばつ等で2%減）。
- 輸入は小麦が前年を上回る987万トン、米も碎米等で25%増の616万トン、一方で、とうもろこし2,062万トン（27%減、米国・ウクライナからの輸入減少）、大豆9,108万トン（6%減）とも減少。油糧種子の輸入も11%減（496万トン）。
- 2023年より新たな5千万トン増産活動スタート、特に大豆と油糧種子（菜種等）の増産・食用油「自給率」向上を重視。
- 食糧生産の補助と最低買付価格保障を活用、「食糧省長責任制」に加え「副食品市長責任制」で生産目標達成を目指す。

① 小麦・とうもろこし・大豆の生産と輸入



② とうもろこし・大豆・米生産者補助制度（黒竜江省の例）

	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
とうもろこし	133元	25元	30元	38元	68元	28元
大豆	173元	320元	255元	238元	248元	248元
米			133元	136元	133元	地下水90元・地表水140元

注1：1ムー（1/15ヘクタール）当たりの補助単価

注2：補助対象は、とうもろこし・大豆は黒竜江・吉林・遼寧・内蒙古、米は各省

③ 近年の米、小麦の最低買付価格の推移（単位：元／50kg）

	早生 インディカ	中・晩生 インディカ	ジャポニカ	白小麦、混合麦、 紅小麦
2014年	135	138	155	118
2015年	135	138	155	118
2016年	133	138	155	118
2017年	130	136	150	118
2018年	120	126	130	115
2019年	120	126	130	112
2020年	121	127	130	112
2021年	122	128	130	113
2022年	124	129	131	115
2023年	126	129	131	117

注：対象は米が黒竜江省など11省・区、小麦が河北省など6省。

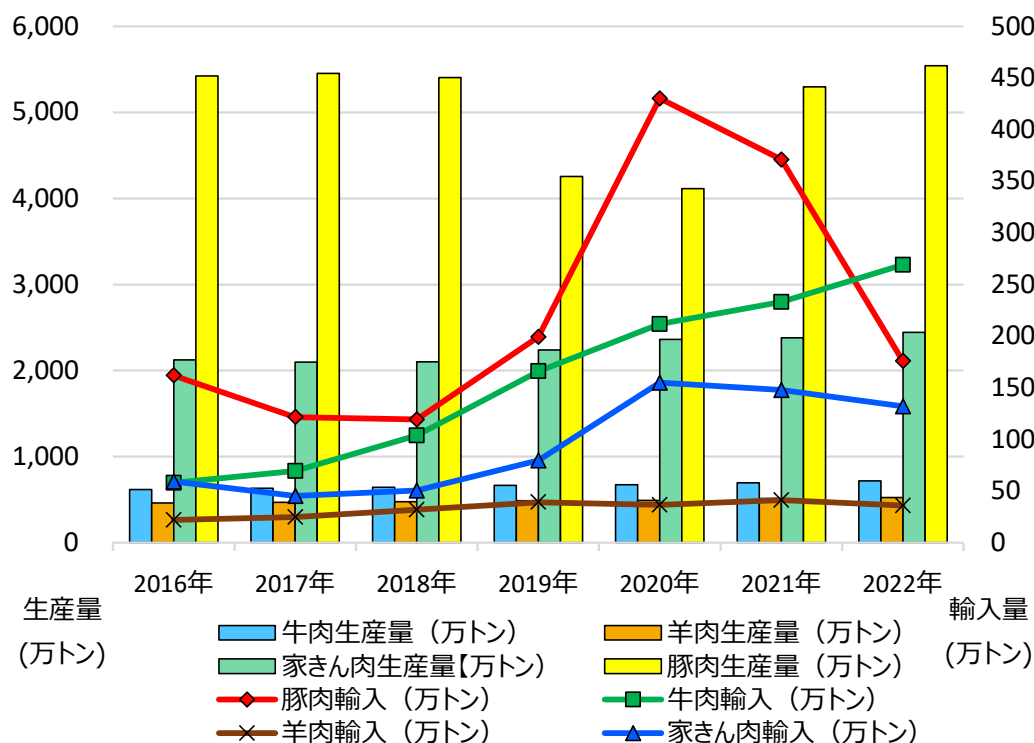
【参考】

2016年以降、「量から質への転換」と「糧経飼三元構造」を目指す方向。2021年からは、再度食糧増産へ転換へ。種子対策と耕地面積確保・圃場の高規格化を推進。
 ・とうもろこしは、養豚回復による飼料用需要のため輸入急増。2017年以降の生産抑制から、再度増産へ。大豆増産との両立目指し、「带状複合栽培」を推進。
 ・2022年より輸入減目指し大豆増産へ。大豆粕需要削減・代替原料探索にも注力。
 ・国民の節約と生産・流通・加工各段階の減損抑止に注力、備蓄と食糧管理も重視。

14 中国における豚肉生産・価格等の動向

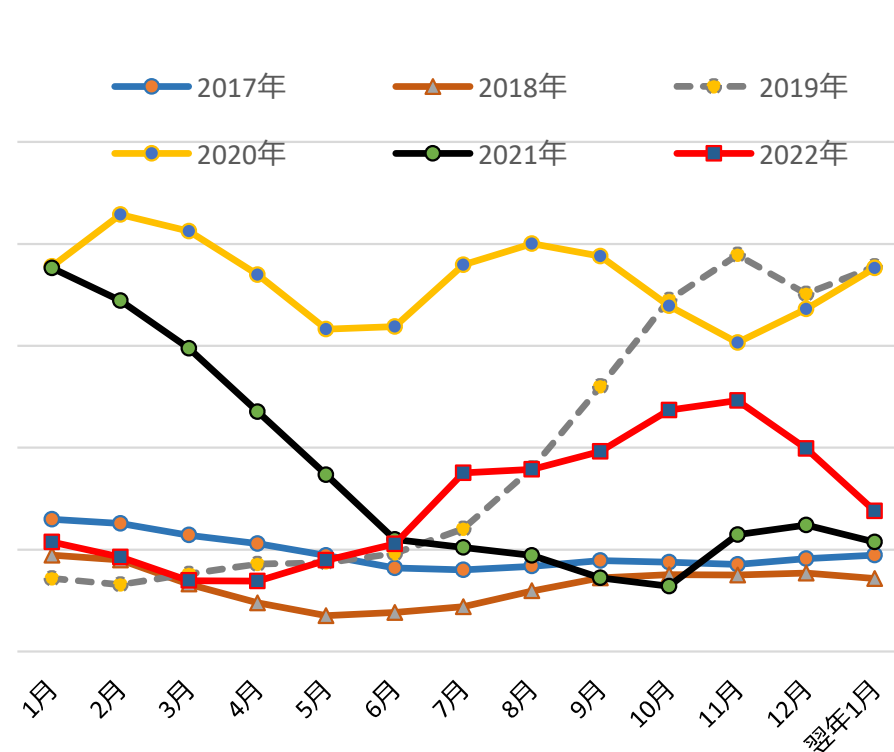
- 2018年8月にアフリカ豚熱（ASF）が発生し、2019年にかけて全国に拡大。豚肉生産量は5,404万トン（2018年）→4,133万トン（2020年）へ縮小。この間、輸入量は119万トン→430万トンへ増加。
- 2021年の豚肉生産量は5,296万トンへ急回復、2022年も5,541万トンと安定。2022年に豚肉輸入は176万トンまで減少。
- 2019年9月秋から急騰した、豚肉価格は2021年に急落。2022年も高騰から下落へ。備蓄政策等でも安定せず。
- 2021年7月から、政府は金融対策や、環境管理の適正化、繁殖母豚飼養数の合理的水準保持、養豚の大規模化や、リーダー企業と中小養豚の連結体制づくり等で生産能力の周期的変動の緩和に注力。有力企業主導の体制を強化。
- 畜産分野の5か年目標として、畜産物自給率は2025年末に、豚肉の95%、牛・羊肉の85%、家きん肉は基本自給。家畜家きんの遺伝的改良、育種・繁殖体制の強化策を推進。
- 2022年の牛肉輸入は16%増の269万トン。羊肉は13%減の36万トン、家きん肉は11%減の132万トン。

① 食肉の生産量と輸入



資料：生産量は国家統計局、輸入量は海関総署。

② 豚肉価格の推移（元/500g）



資料：農業農村部農産品需給形勢分析月報

15 ロシア・ウクライナ（1）：主要輸出国間の戦争は穀物等の市況に大きな影響

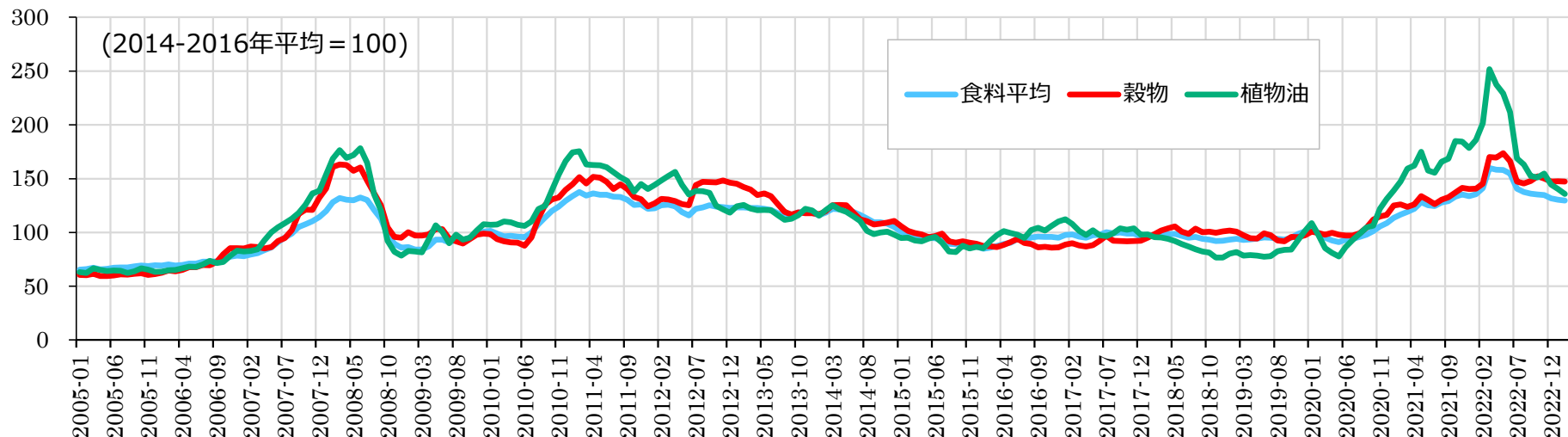
- ロシア・ウクライナは、穀物（小麦、大麦、とうもろこし）、植物油（ヒマワリ油）の主要輸出国。
- ウクライナ侵攻直後に穀物等の価格が高騰したが、その後沈静化。史上最高を記録したFAO食料価格指数（2022年3月：食料平均159.7）は、依然高水準ながら侵攻前の水準に戻る（2023年2月：食料平均129.8）。

① 世界の穀物等輸出における位置づけ（数値は戦争前）

世界の主要穀物・植物油輸出国（2018/19-2020/21年度平均、単位：千トン）								
順位	小麦		トウモロコシ		大麦		ヒマワリ油	
	国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量
	世界計	191,171	世界計	179,222	世界計	30,256	世界計	12,102
1位	ロシア	36,483	米国	55,830	EU	6,688	ウクライナ	6,007
2位	EU	31,403	アルゼンチン	38,146	ロシア	5,130	ロシア	3,243
3位	米国	26,308	ブラジル	31,942	豪州	5,118	アルゼンチン	747
4位	カナダ	24,998	ウクライナ	27,705	ウクライナ	4,244	EU	745
5位	ウクライナ	17,962	EU	4,465	カナダ	2,691	トルコ	617
参考			ロシア（6位）	3,610				
シェア	ロシア	19	ロシア	2	ロシア	17	ロシア	27
	ウクライナ	9	ウクライナ	15	ウクライナ	14	ウクライナ	50
	2国計	28	2国計	17	2国計	31	2国計	76

資料：USDA PS&D Online data

② FAO食料価格指数の推移（2005年1月～2023年2月）



資料：FAO, Food Price Index（2023.3）より作成。

16 ロシア・ウクライナ（2）：農産物輸出は継続するも先行きは不透明

- 2022年のロシア産穀物は史上最高の豊作（暫定値1億5,768万トン）。2022/23年度の穀物輸出は経済制裁等の影響から当初低調も徐々に加速。
- ロシアの輸出規制（穀物、油糧種子、ヒマワリ油等の輸出関税、無機肥料の輸出数量制限）は継続するも、供給過剰（＝輸出圧力）を背景に実質的な軽減。
- 「黒海穀物イニシアティブ」によるウクライナの穀物、油糧種子等の出荷実績は2023年3月18日までに23百万トン以上。合意は同月19日から再延長されたが、ロシアは、本来120日の延長期間を5月17日までの60日とし、その間に対口制裁緩和を実現するよう主張。

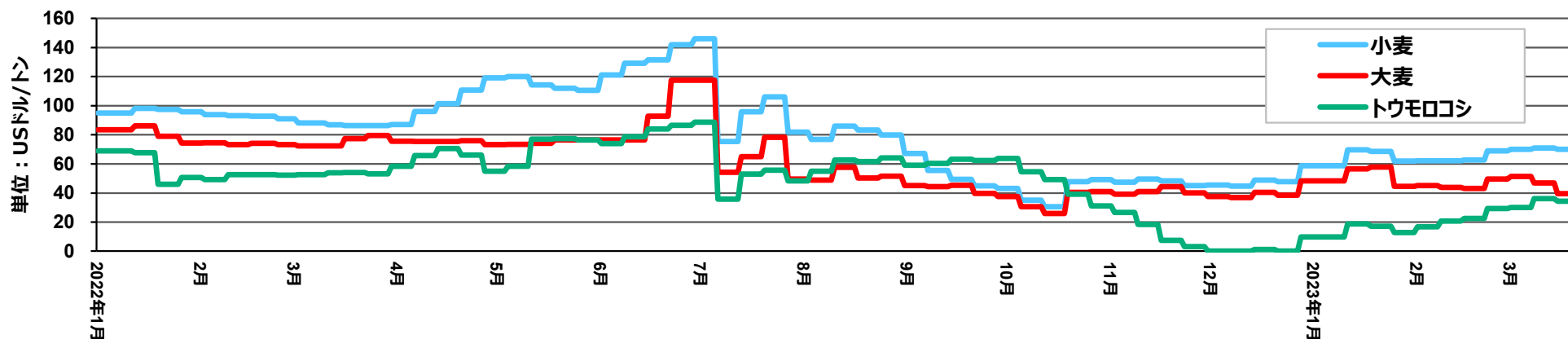
① ロシアの穀物生産・輸出動向

		2020/21年度		2021/22年度		2022/23年度	
		数量(万トン)	構成比(%)	数量	構成比	数量	構成比
収穫量	穀物計	13,346	100.0	12,140	100.0	15,768	100.0
	小麦	8,589	64.4	7,606	62.7	10,424	66.1
	大麦	2,094	15.7	1,800	14.8	2,339	14.8
	トウモロコシ	1,388	10.4	1,524	12.6	1,585	10.1
輸出量	穀物計	4,964	100.0	4,068	100.0	5,234	100.0
	小麦	3,910	78.8	3,300	81.1	4,350	83.1
	大麦	626	12.6	330	8.1	530	10.1
	トウモロコシ	399	8.0	400	9.8	330	6.3

資料：収穫量はロシア連邦統計庁、輸出量はUSDA PS&D Online data。

注：収穫量は2020,2021,2022の暦年、輸出量は農業年度（各年7月～翌年6月、2022/23年度は推計）。

② ロシアの穀物輸出関税額の推移：2022年7月の関税額USドル→ルーブル移行は実質的な減税

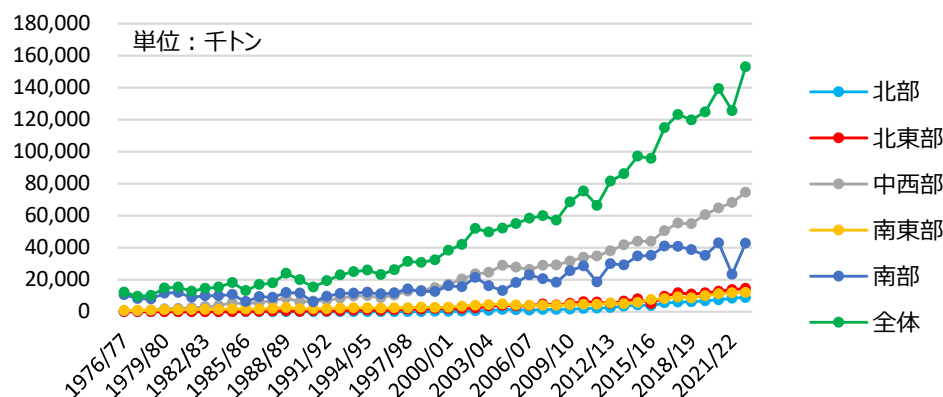


資料：ロシア連邦農業省から作成。輸出関税は当初のUSドル建てが2022年7月以降はルーブル建てに変更されたが、グラフではそれ以降もUSドル建てに換算。

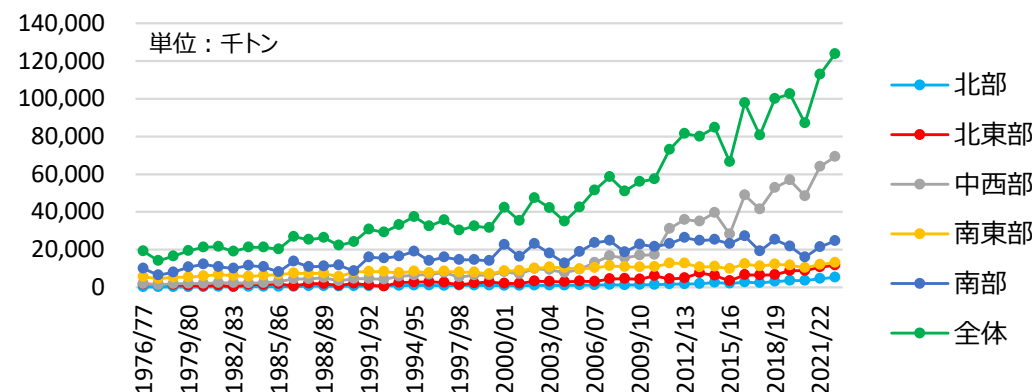
17 ブラジル：穀物・大豆の生産動向

- 大豆やとうもろこし生産は、「セラード」地帯が位置する中西部を中心に生産されている一方、小麦やコメについては伝統的な穀倉地域である南部で生産。
- 大豆：中国の堅調な輸入需要により、2022年度の生産量について1億5,289万トンと過去最高の生産量の見込み。
- とうもろこし：国内におけるバイオエタノール需要ならびに中国をはじめとする国外の需要の増加により、2022年度の生産量について1億2,374万トンと過去最高の生産量を見込む。
- 小麦：ウクライナ侵攻後の国際価格の高騰により、2022年度の生産量は1,055万トンと過去最高の生産量を見込む。
- 米：これまでの10年間の生産量は伸び悩んでおり、2022年度の生産量においても1,016万トンを見込む。

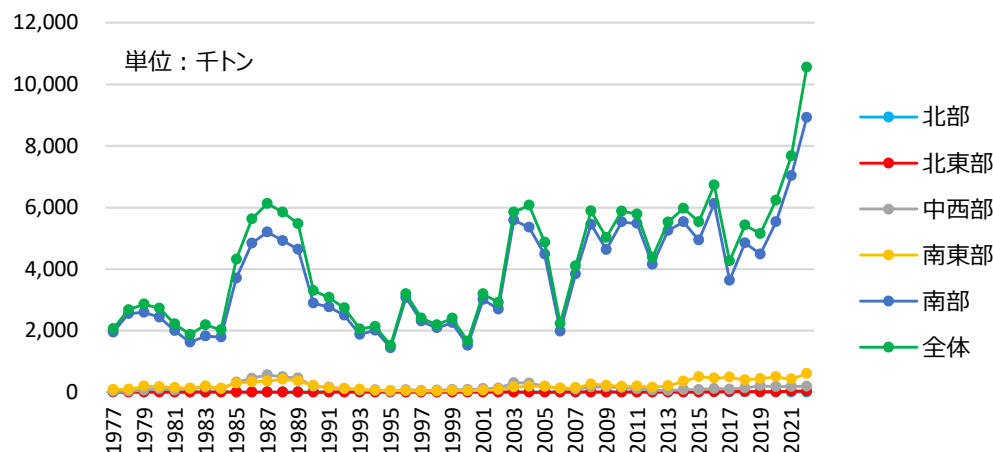
① 大豆生産量推移



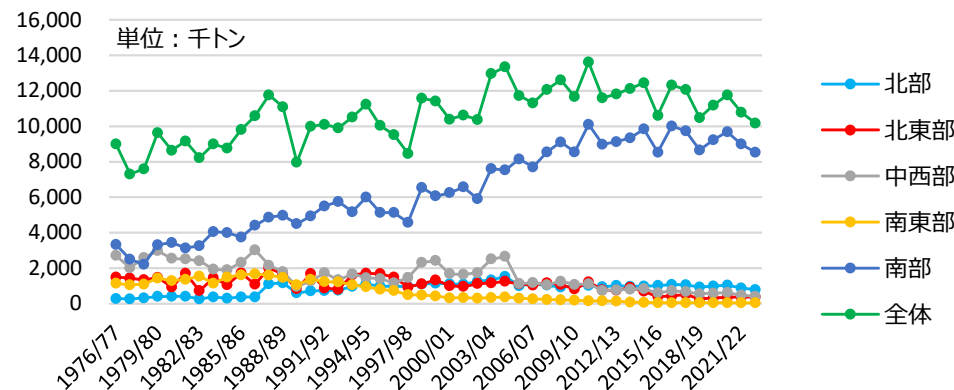
② とうもろこし生産量推移



③ 小麦生産量推移



④ 米生産量推移

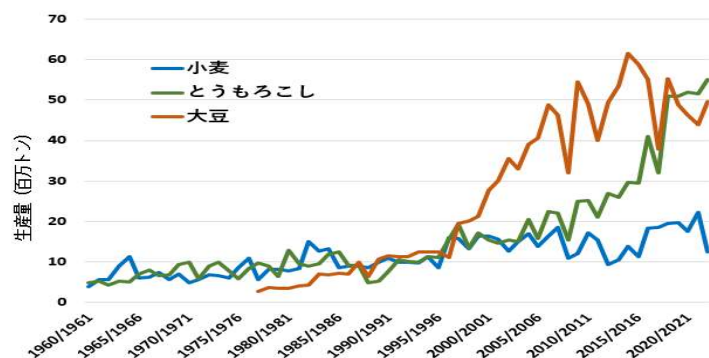


資料：(1)～(4) CONAB (2022)

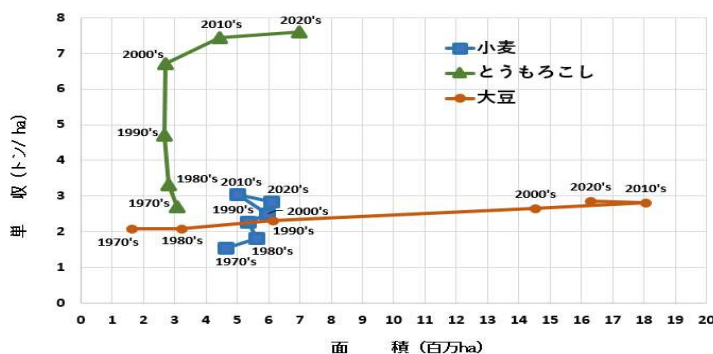
1 8 アルゼンチン：穀物・大豆の生産及び輸出の動向

- アルゼンチンの小麦生産量は過去50年で2.3倍に増加、とうもろこし生産量は過去50年で5.3倍に増加、大豆生産量は過去40年で7.5倍に増加したが、気候変動を背景としたエルニーニョ/ラニーニャ現象による作況の差が近年、顕著となっている。
- 小麦は栽培面積及び単収のバランスの取れた伸びが生産量を拡大し、とうもろこしは2000年代以降の単収の上昇に加えて2010年代からの栽培面積の伸びが生産量急増につながり、大豆は栽培面積の拡大が1990年代半ばからの生産量急増に係る要因（単収増には、化学肥料の使用量増、遺伝子組み換え作物・不耕起栽培・簡易型サイロバッグ等の新技術開発などが寄与）。
- 貿易率（輸出量／生産量）について、小麦やとうもろこしは、世界的に需給がひっ迫し、価格が高騰した場合、これらの輸出量が増大する傾向。一方、大豆は大豆油・大豆粕の生産・輸出が主であるため、原料である大豆の貿易率は比較的低い。これら主要穀物輸出に対する政府の輸出税賦課・輸出規制による外貨収入確保や国内への農産物安定供給に向けた介入強化の動向に引き続き注視する必要。

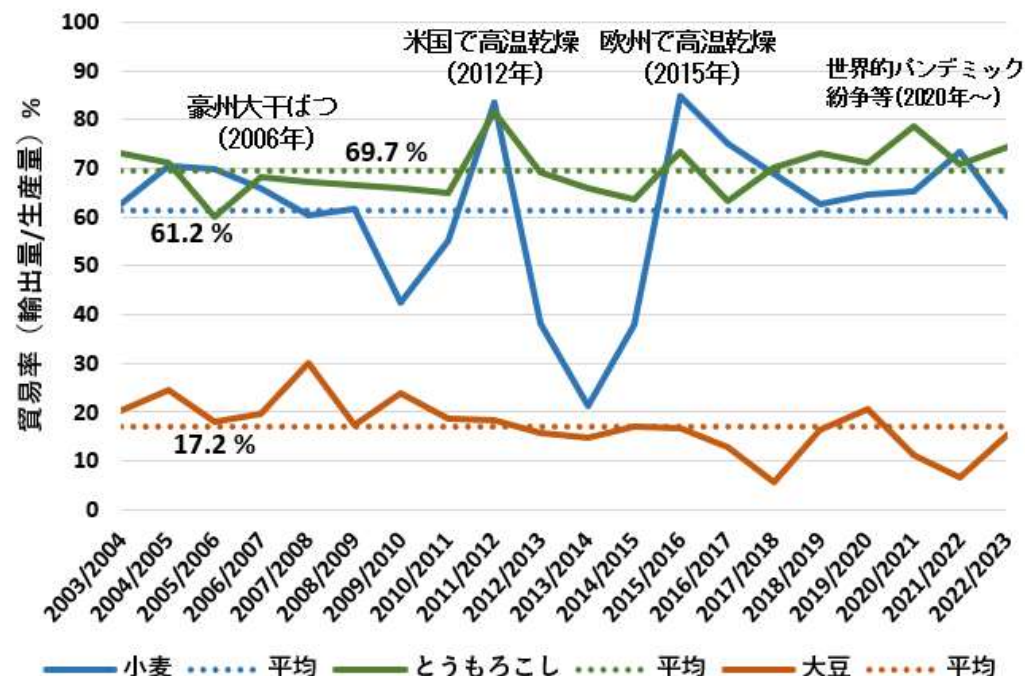
① アルゼンチンの小麦、とうもろこし、大豆の生産量の推移



② アルゼンチンの小麦、とうもろこし、大豆の栽培面積及び単収の推移



③ アルゼンチンの小麦、とうもろこし、大豆の貿易率（輸出量／生産量）

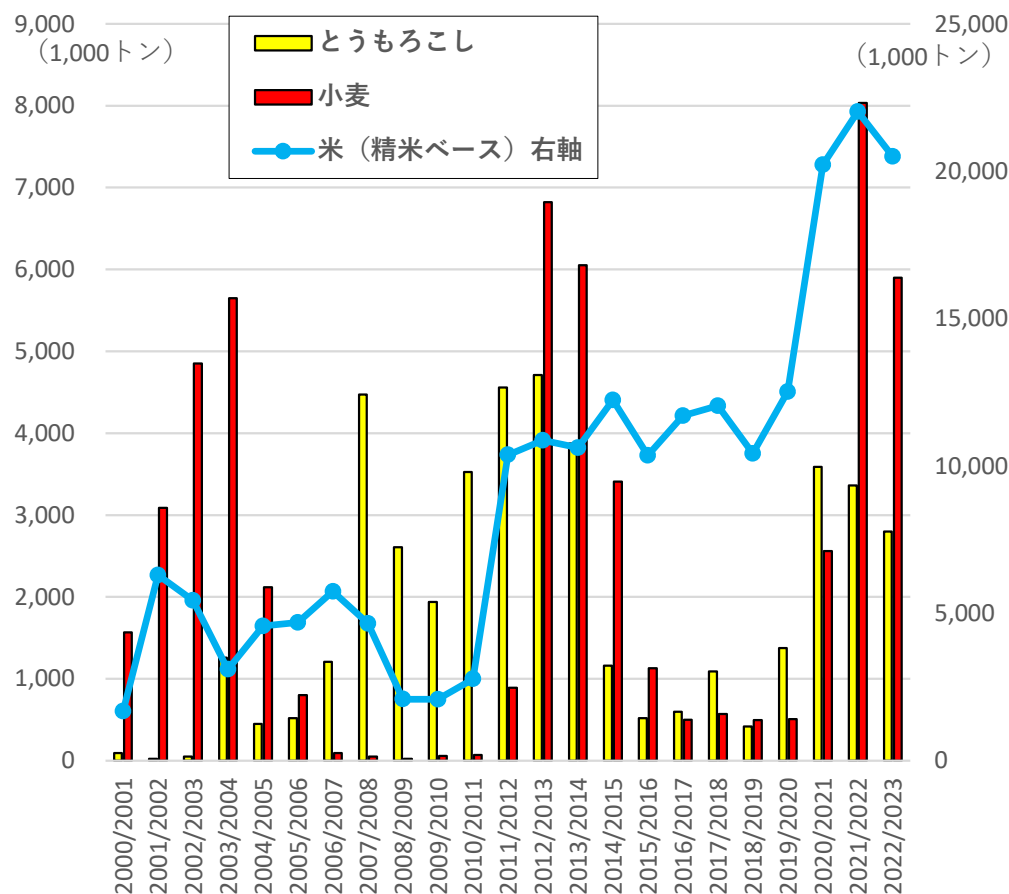


資料：①、②及び③USDA PS&D Online data

19 インドの穀物輸出・植物油輸入動向

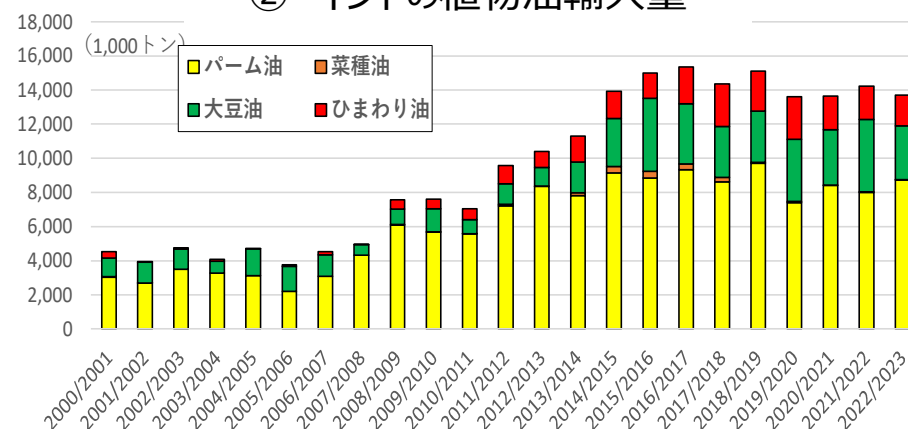
- インドの小麦や米等の主要穀物は基本的に自給し、輸出量も多い。米は2010年代後半にタイを抜いて世界一の輸出量を維持している。
- 一方、インドの植物油の輸入は年々増加し、2000年代前半の500万トン程度の輸入量から、2010年代後半には3倍程度まで拡大。特に、パーム油の輸入量が多く、輸入量の半分以上を占める。大豆油、ひまわり油の伸びも大きい。インドの植物油の生産量の増加は、消費量に比べて限られ、伸びは限定的である。

① インドの穀物輸出量

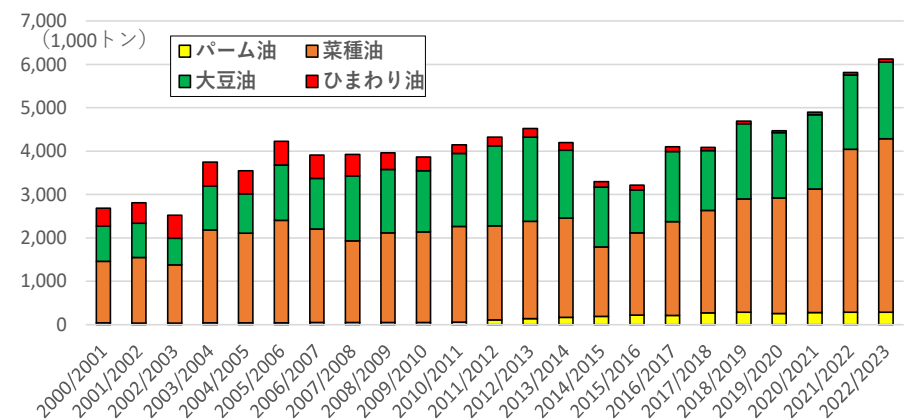


資料：USDA PS&D Online data

② インドの植物油輸入量



③ インドの植物油生産量

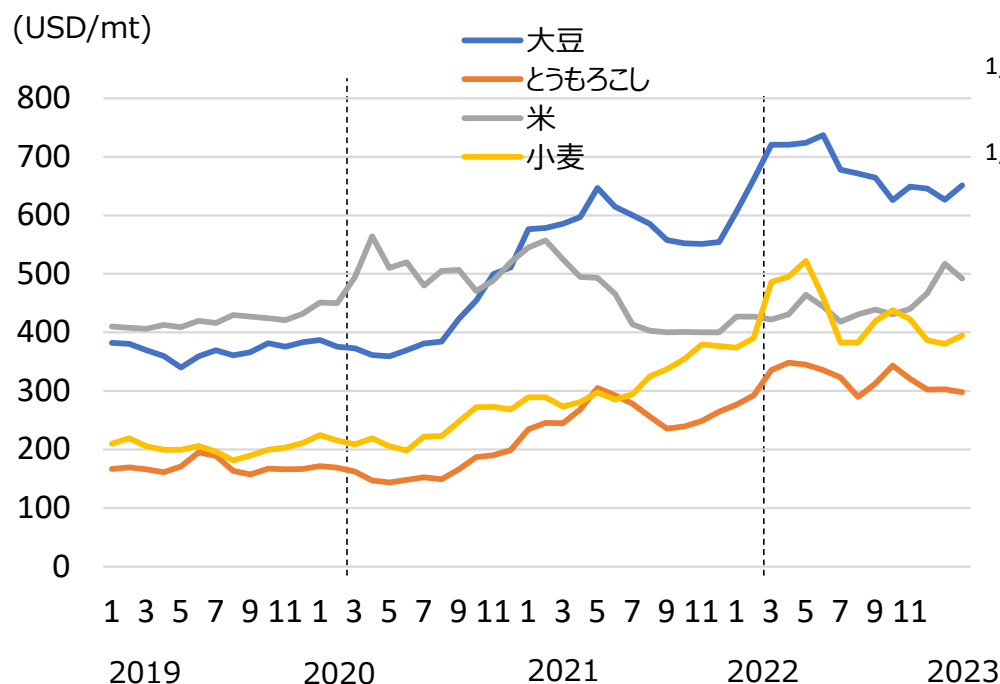


資料：USDA PS&D Online data

20 新型コロナウイルス禍・ウクライナ侵攻後の穀物等の価格動向

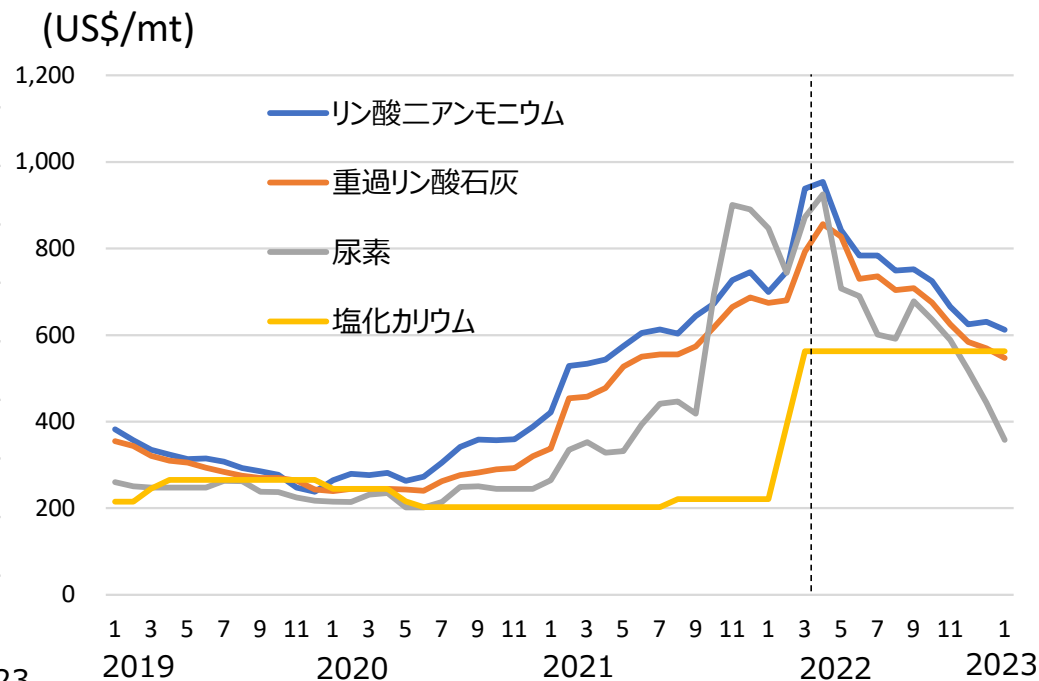
- とうもろこしは、パンデミック前の2020年2月まで、良好な生産見通し等を背景に価格は低位で推移。小麦も同様に、2020年2月まで、良好な生産見通しを背景に比較的低位で安定していた。その後、良好な生産見通し等を受けて、弱含みの価格推移となり、2020年夏頃まで穀物等市場全体に、豊作期待から価格は低く安定していた。
- 2020年夏以降、北米の乾燥、南米の降雨不足、飼料需要を中心とする穀物・大豆等市場で中国が輸入が急増。2021年には、ラ・ニーニャ現象等の影響による南米の乾燥や北米の高温乾燥、コンテナ船運賃高騰の継続も背景に、穀物・大豆価格は上昇基調で推移。
- ロシアによるウクライナ侵攻の多方面への影響により、2022年3月以降の穀物等の価格は上昇し、小麦はシカゴ先物市場で史上最高値を更新し、とうもろこし、大豆は10年ぶりの高値。同年夏以降、ウクライナ侵攻前の水準程度に戻るものの、高値で推移。一方、米は豊富な供給量を背景に比較的、安定的に推移するが、天候不良等から徐々に上昇。
- 窒素肥料の原料となるアンモニア生産に必要な天然ガス価格の高騰、ロシアを中心とする肥料輸出国による輸出規制、COVID-19による(サプライチェーンの混乱)肥料輸送の制約等により、2021年後半から肥料価格は高騰し、ウクライナ侵攻後の2022年4月にピークとなる。その後、下落基調で推移。ただし、COVID-19パンデミック発生前の水準を上回って推移。

① 国際穀物・大豆の月次価格(2019-2022年)



資料：World Bank Pink Sheet Data (2023.3)

② 化学肥料の月次価格(2019-2022年)



資料：World Bank Pink Sheet Data (2023.3)

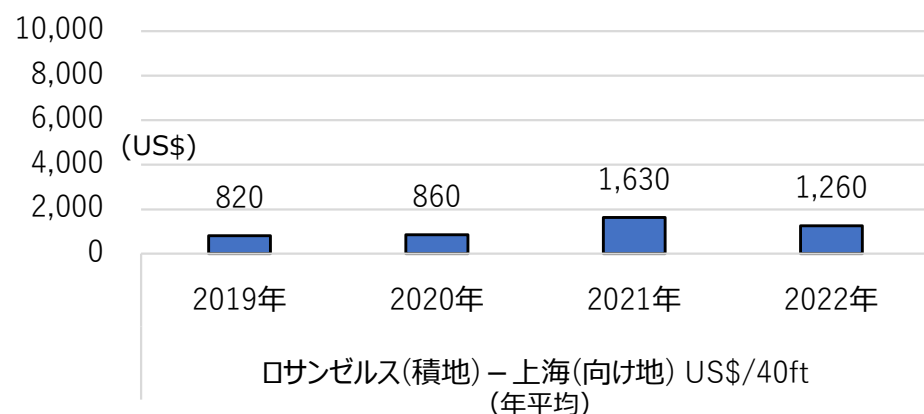
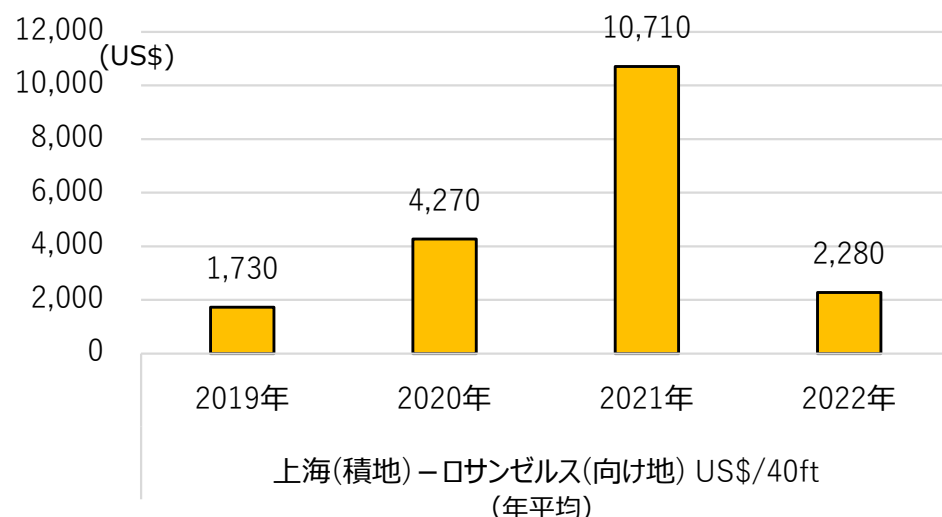
2 1 海上輸送運賃の推移と消費者物価の上昇

○ コンテナ船運賃は、COVID-19パンデミック下で、米中等の経済回復、サプライチェーンの混乱、港湾労働者の不足等により、米国等の港でコンテナ船の滞留が続き、世界的に高騰した。その後、経済減速が懸念される中、2022年末にはパンデミック前の水準まで戻っている。また、バルチック海運指数（BDI^注）が、世界的な経済回復やサプライチェーンの混乱等により急上昇するも、急速に低下し経済減速が懸念。

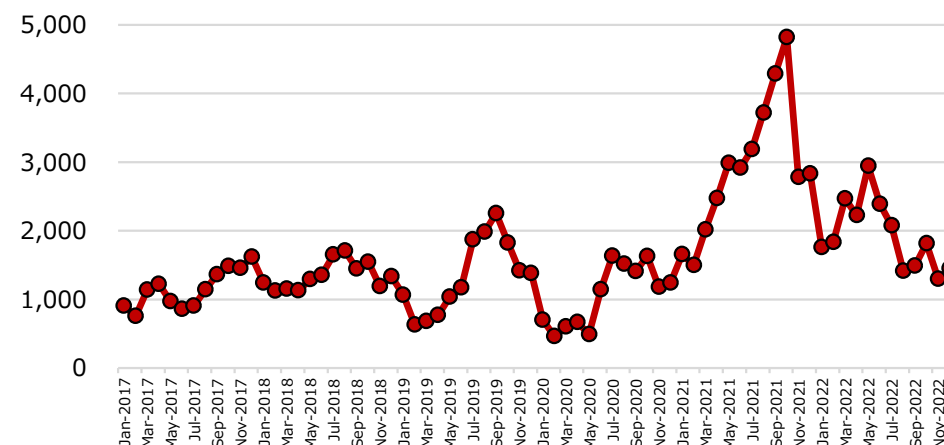
○ エネルギーや資源・食料等価格の上昇に伴って、2022年には消費者物価数が多い国で急上昇してインフレ圧力が増し、2023年以降、各国における景気後退が懸念。

（注：鉄鉱石、石炭、穀物等の梱包されないドライ貨物を運ぶばら積み不定期船運賃に関する総合指標。）

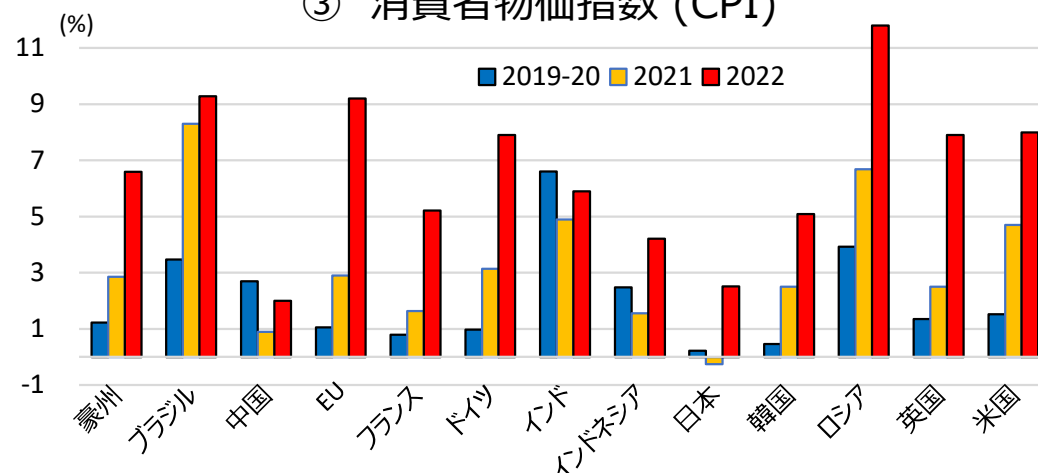
① コンテナ船運賃(US\$/20ft、US\$/40ft)



② バルチック海運指数 (BDI)



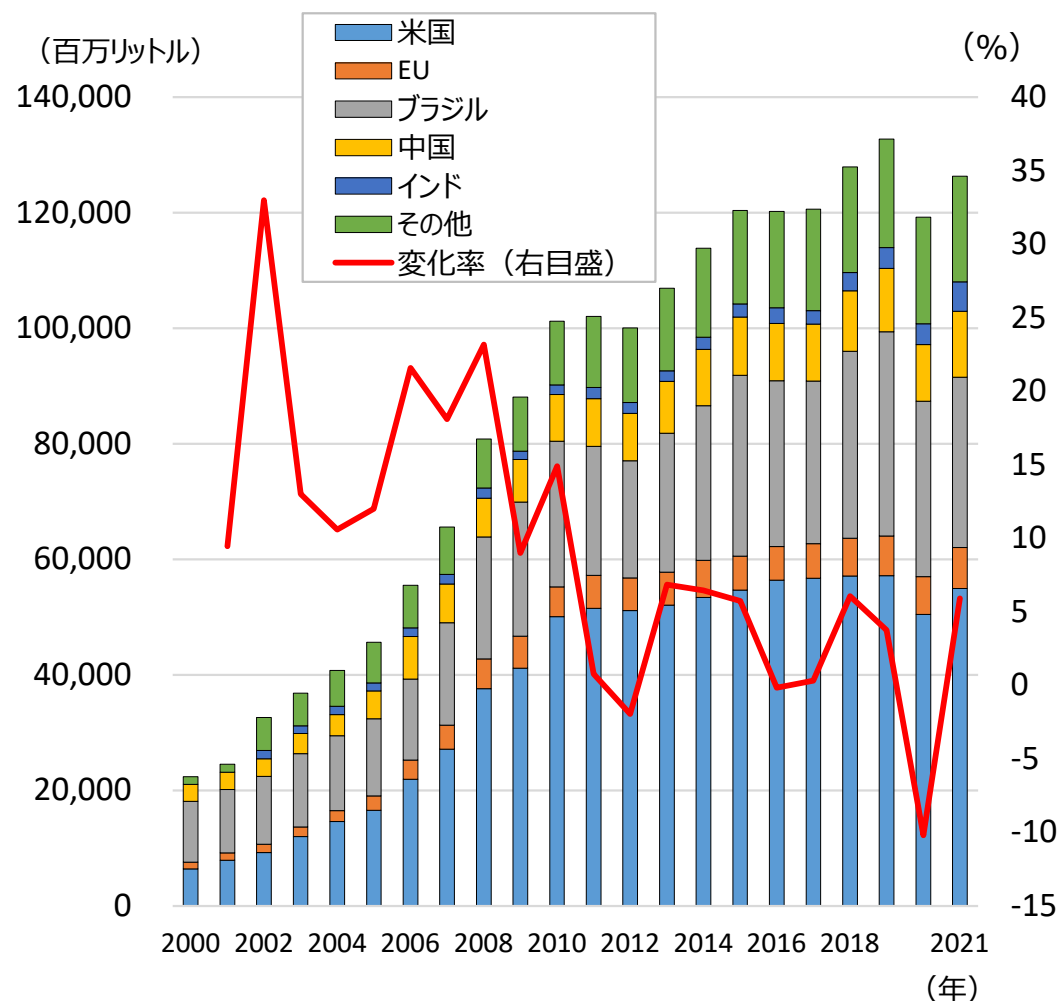
③ 消費者物価指数 (CPI)



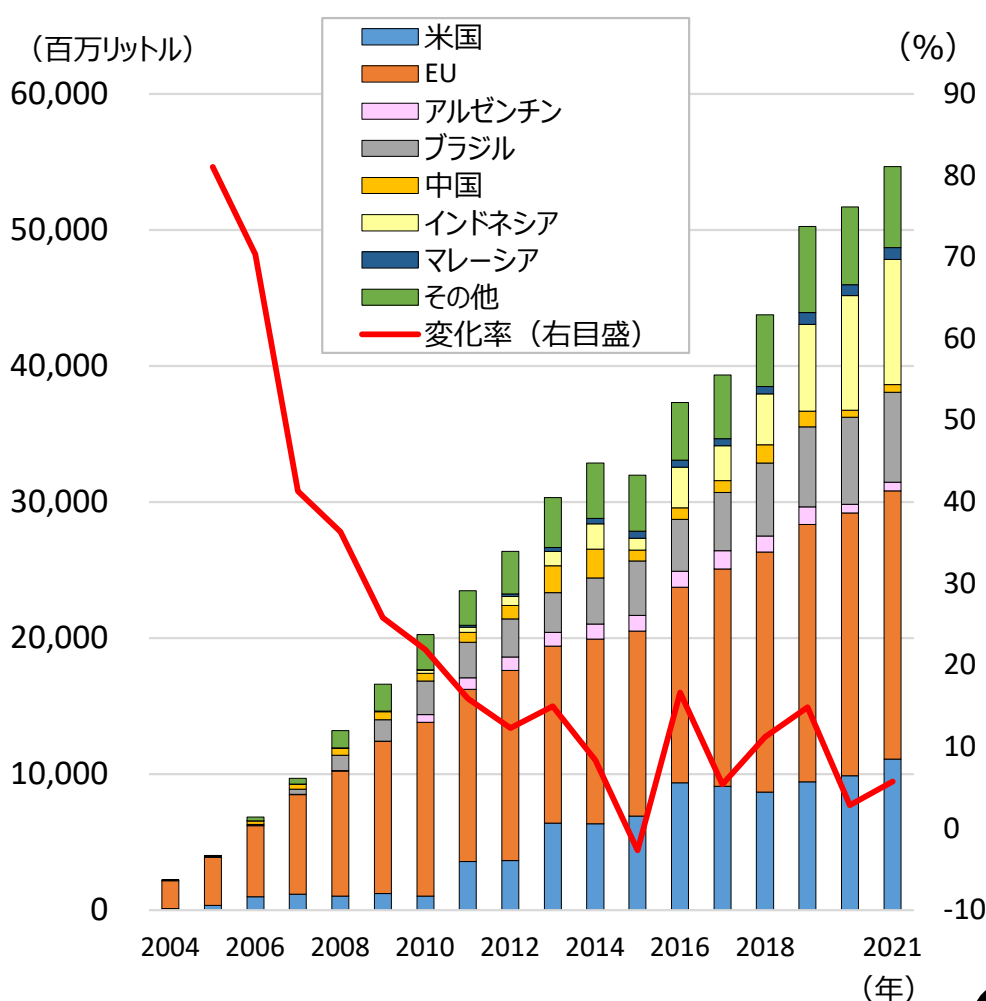
2.2 バイオ燃料の需要動向

- 世界のバイオエタノール需要量は、COVID-19のパンデミックに対する各国の移動制限措置等の影響を受けて2020年は急減。
- 2021年は輸送用燃料需要の回復等からバイオエタノール需要も増加するものの、パンデミック前の水準を下回る。一方、バイオディーゼル需要量は、インドネシアを中心とする混合率上昇等の影響から2020年、21年も増加。
- バイオエタノール需要量は米国の政策等の影響により、増加率が鈍化。バイオディーゼル需要量はインドネシア等における混合率上昇により、増加傾向を維持。

① 世界のバイオエタノール需要量と増加率



② 世界のバイオディーゼル需要量と増加率



資料：OECD-FAO Agricultural Outlook 2022-2031 (2022.6)

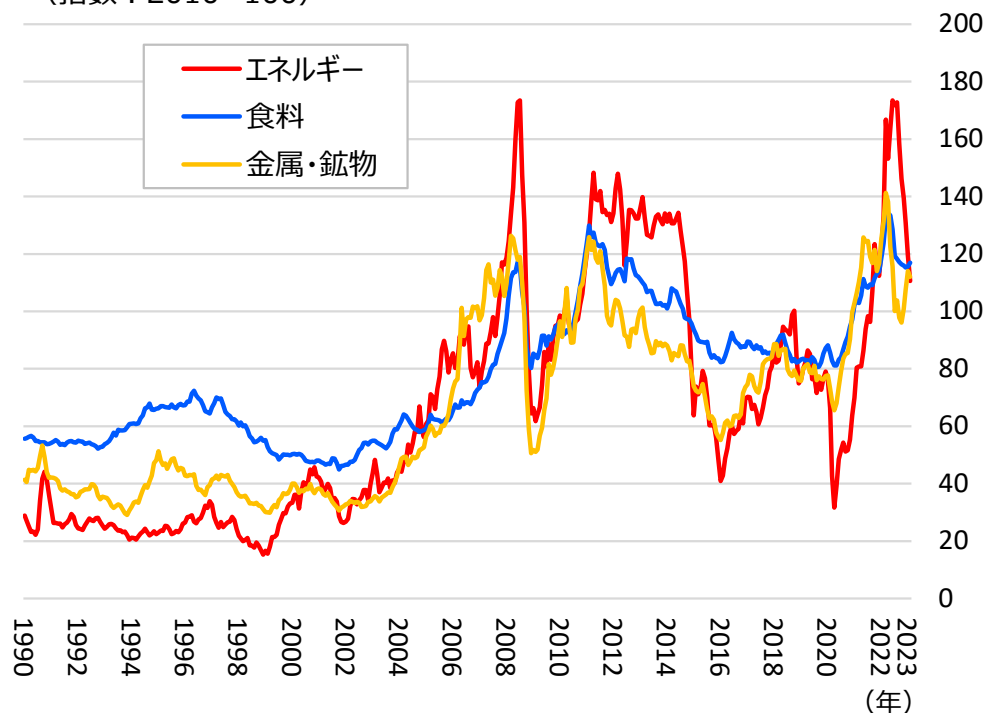
資料：OECD-FAO Agricultural Outlook 2022-2031 (2022.6)

2 3 国際商品価格・穀物及び大豆の価格の推移

- 食料、金属・鉱物の価格は、2021年以降、世界経済の回復基調とCOVID-19パンデミック禍の労働力不足やサプライチェーンの遅延、コンテナ船運賃の高騰、環境政策の影響等もあり、堅調に推移。
- 国際市場における穀物及び大豆価格は、2020年後半から北米・南米の乾燥とCOVID-19からの経済回復に伴う中国等の輸入増や、2021年の南米・北米の高温乾燥等の影響で高値圏で推移。
- ウクライナ侵攻により、2022年3～6月にかけて国際商品価格はさらに上昇し、食料指数は2008年や2011年の価格高騰の水準を更新。7月以降は下落し、前年同月の水準を下回るものの、パンデミック前の水準を上回って推移。

① 国際商品価格の月次推移

(指数：2010=100)

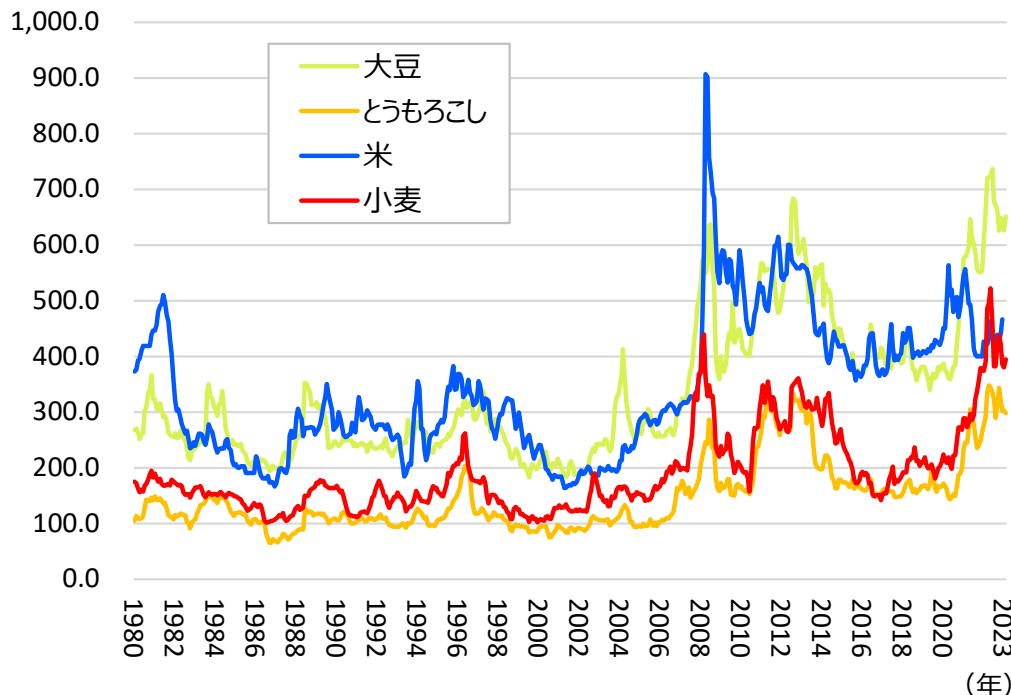


資料：World Bank Commodities Price Data (2023.3) より作成

注：食料は、穀物、植物油、肉類、砂糖、バナナ、オレンジ、エビ、フィッシュミールを含む。金属・鉱物は、鉄鉱石、銅、アルミニウム、すず、ニッケル、銅、亜鉛、鉛を含む。エネルギーは、原油、天然ガス、石炭を含む。

② 国際穀物及び大豆価格の月次推移

(USD/トン)



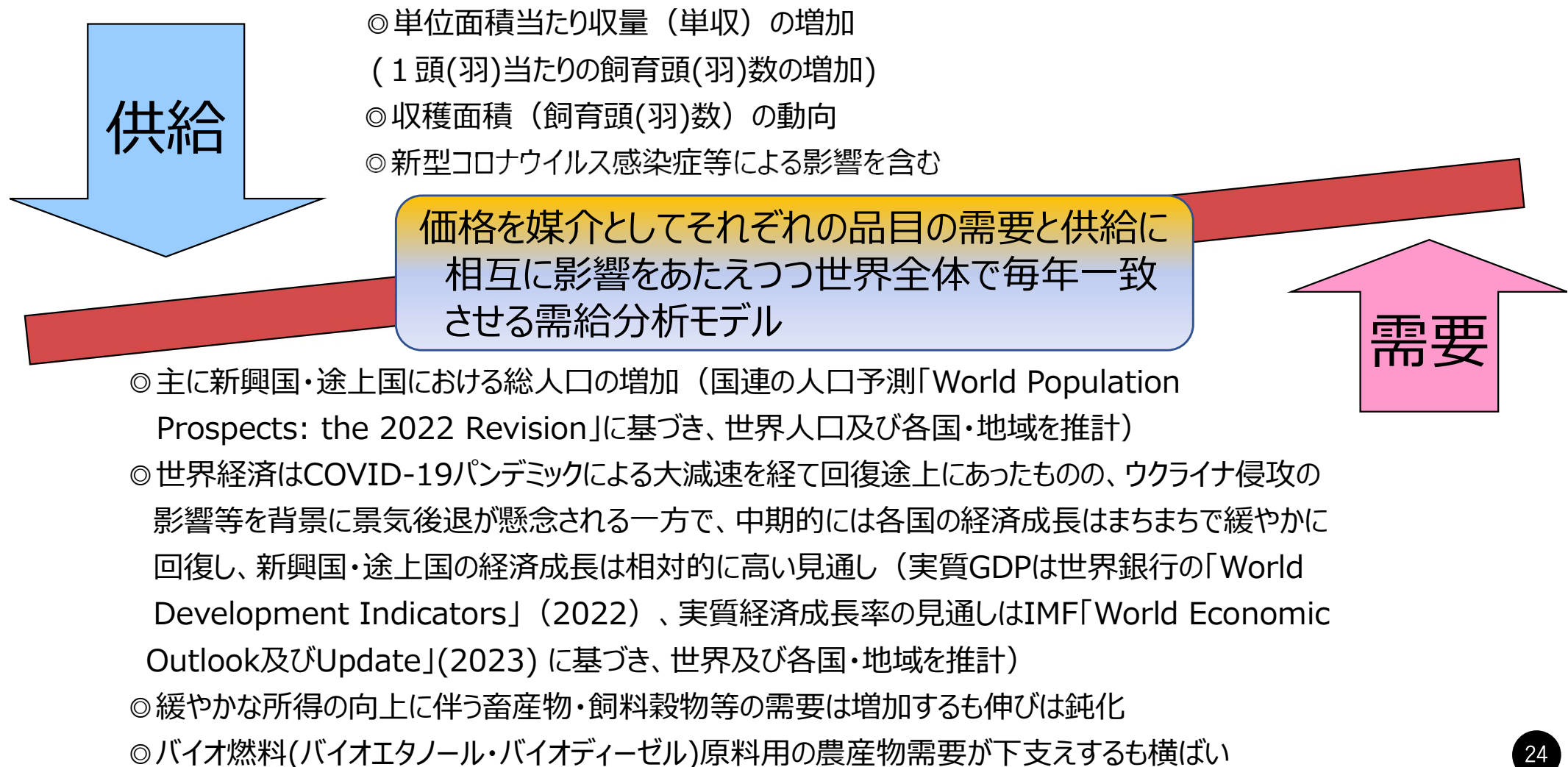
資料：World Bank Commodity Price Data (2023.3)より作成

注：とうもろこしはU.S. No.2 Yellow, FOB Gulf ports, price, 米は5 percent broken, white rice, milled Bangkok, 大豆はU.S. soybeans, cif Rotterdam, 小麦はNo.2, soft red winter, export price delivered at the US Gulf portの価格。

Ⅱ．見通し編

1 世界食料需給モデルによる予測の目的及び前提

- 「世界食料需給モデル」による世界の食料供給と需要の予測は、農産物輸入国である立場から、独自の将来の食料需給を、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響や経済減速のリスク等を踏まえて、自然体で見通し、我が国における食料の安定供給に資することを目的。
- 予測は、収穫面積（延べ面積）の変動に特段の制約がなく、現行の単収の伸びが継続し、各国政策が現状を維持し、天候・紛争等の不確実性を含まず平年並みの天候を前提。



2 2032年における世界の食料見通し－『経済減速の懸念』－【概要】

世界経済は、2020年の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)による世界的流行(パンデミック)等の影響から歴史的な大減速に見舞われ、その後、各国のさまざまな政策支援等により、経済は回復へ進むとみられた。しかし、2022年2月に勃発したロシアのウクライナ侵攻によって多方面に影響が続いている。世界の農産物需給・価格にも影響を及ぼしつつあり、経済の回復やCOVID-19の収束に向けた道のりは途上にある。

現在、各国の経済回復はまちまちで、ロシアのウクライナ侵攻による戦闘が続き収束も不透明となる中で、多くの国でインフレ圧力や経済成長鈍化の強まりが懸念される。中期的には、中国の成長の鈍化及び人口減少が見込まれる一方で、インド等の新興国・途上国において相対的に高い経済成長率が維持されるとみられる。将来的に先進国だけでなく途上国の多くの国で、経済成長率はCOVID-19前より鈍化するとみられ、世界経済はこれまでより緩やかな成長となる見込み。

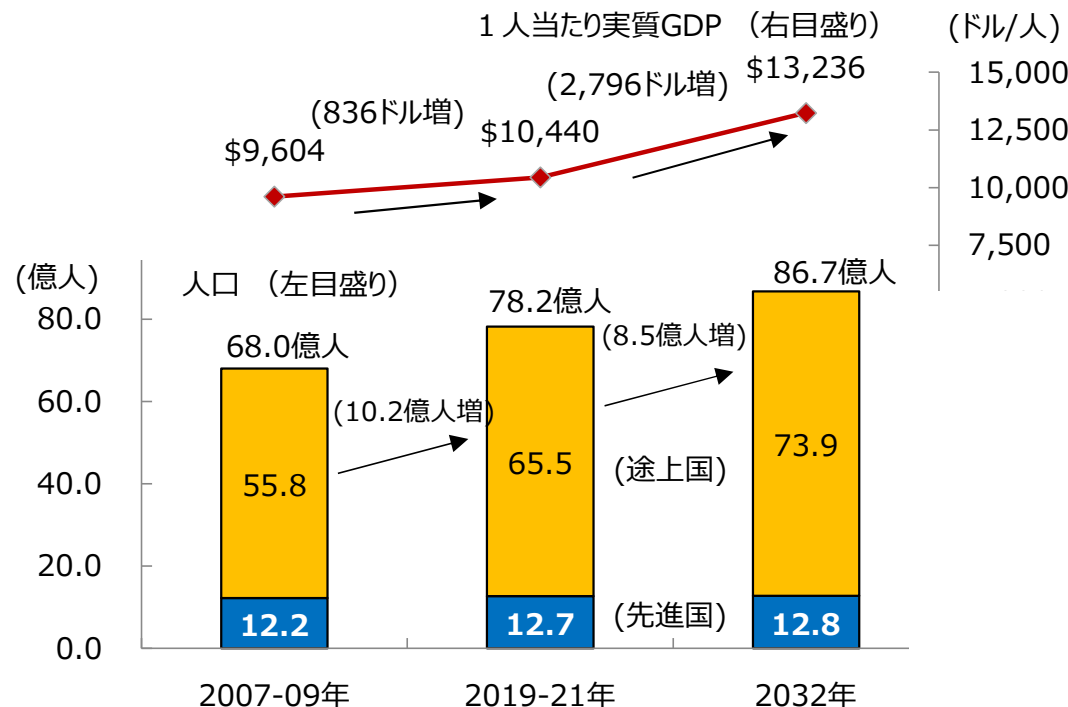
世界の穀物等の需給について、需要面では、南アジア・アフリカ等の途上国の総人口の増加、新興国・途上国を中心とした相対的に高い所得水準の向上等に伴って食用・飼料用需要の増加が中期的に続くものの、先進国だけでなく新興国・途上国においても今後の経済成長の弱含みを反映して、穀物等の需要の伸びは鈍化してCOVID-19前より緩やかとなる見通し。供給面では、今後、全ての穀物の収穫面積がわずかに減る一方、穀物等の生産量は、主に生産性の上昇によって増加する見通しである。

穀物等の国際価格について、畜産物価格にも下押し圧力が強まる中で、世界の穀物等の需要量と供給量の増加がほぼ拮抗するものの、穀物等の価格はやや低下傾向を強める見通し。ただし、ロシアによるウクライナ侵攻の不確実性や経済の減速懸念等のリスクを背景に、エネルギー・資源価格の高騰によるインフレ圧力やサプライチェーンの混乱等もあり、2023年以降、短期的に、穀物等価格が大きく上振れするリスクが残っている（ロシアによるウクライナ侵攻は、世界の農産物需給・価格に影響を及ぼしつつあるが事態はいまだに流動的であり、統計データ等の不足もあり、本見通しには構造的に織り込まれていない）。

3 世界食料需給モデルの試算の前提に使用した総人口及びGDPの見通し

- 総人口は、COVID-19を経て伸び率が鈍化しつつも、南アジア・サブサハラアフリカ等を中心に、途上国で増加が続く。
- 世界経済は、COVID-19のパンデミックによって大減速し、その後、経済回復が見込まれたが、ロシアによるウクライナ侵攻等の影響によって、インフレ圧力の高まりや景気後退による経済への下押し圧力の強まりが懸念される。一方で中期的には、世界経済はパンデミック前の経済見通しより鈍化するものの緩やかに成長する見込み。一人当たりGDPもより緩やかに成長する。
- 各国・地域の経済も、ウクライナ侵攻による多方面への影響を受け、景気後退が懸念される中で、経済成長はまちまちとなる。中期的には、中国の人口減少や経済成長の鈍化が見込まれるものの、新興国・途上国の経済成長は先進国より相対的に高くなる見込み。

① 世界の総人口及び一人当たり実質GDPの推移



② 主要国の経済成長率の推移と見通し

(単位: %)

	2005-2010年 平均	2010-2015年 平均	2016-2020年 平均	2021年	2022年	2023-2032年 平均
中国	11.3	7.9	5.8	8.4	3.0	4.6
インド	8.3	6.8	3.7	8.7	6.8	6.6
日本	0.0	1.1	-0.3	2.1	1.9	0.8
ブラジル	4.5	1.2	-0.6	5.0	3.1	2.0
ロシア	3.7	1.9	0.8	4.7	-2.2	1.0
米国	1.0	2.1	1.1	5.9	2.1	1.7
E U	1.2	1.1	0.7	5.5	3.3	2.0

注: 世界銀行「World Development Indicators」(2022)、
国連「World Population Prospects: The 2022 Revision」(2022)、
I M F「World Economic Outlook 2022」(2022) 及び
「World Economic Outlook Update」(2023)の見通しから試算。

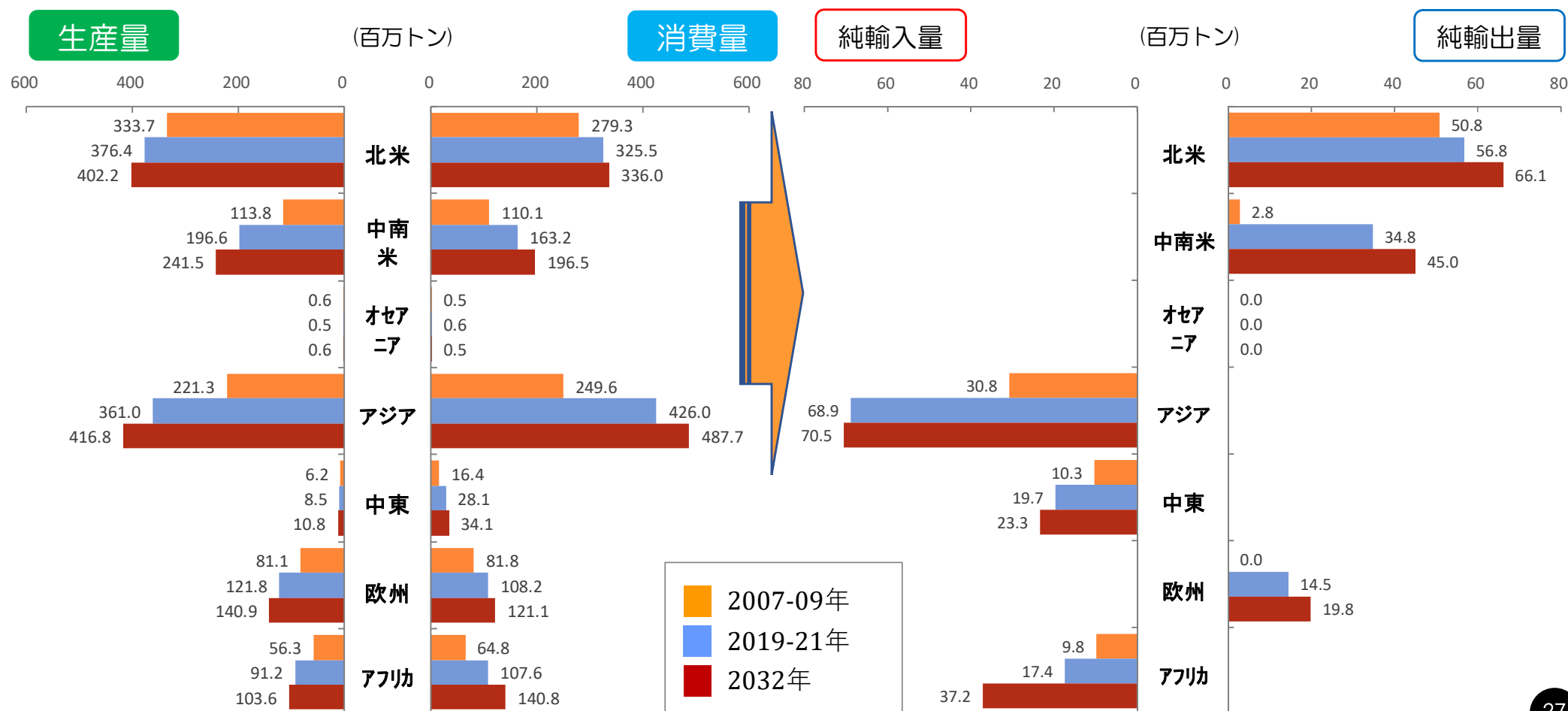
注: 2021年まで実績値で、2022年以降は推計値及び予測値。
一人当たり実質GDPは2015年基準。2019-21年はCOVID-19の
影響により一人当たり実質GDPが低くなる。

4 地域別の需給見通し：とうもろこし

- 世界の生産量及び消費量は今後も増加し、畜産物需要の増加に伴って飼料用消費量も増加する。ただし、多くの地域で伸び率は鈍化。今後も世界全体で飼料用消費量が総消費量の6割超を占める。一方でアフリカは、食用消費量が7割弱を占め、人口の増加に伴ってその割合はやや上昇する。世界経済の減速が懸念され成長率の見通しの鈍化等で需要量の伸びも鈍化する。
(※ウクライナ情勢による不確実性は大きい)
- とうもろこしの国際市場は、アジア・中東・アフリカにおける純輸入量の増加を、北米・中南米が中心に純輸出量の増加でまかなう見通し。
- 米国では国内のバイオエタノール向けとうもろこし需要量が横ばいとなるため、純出量は増加する。中南米のブラジル・アルゼンチンでも純輸出量が増加。ウクライナは侵攻前の純輸出量の水準には戻らない。

① とうもろこしの地域別生産量及び消費量の見通し

② とうもろこしの地域別貿易量(純輸出入量)の見通し



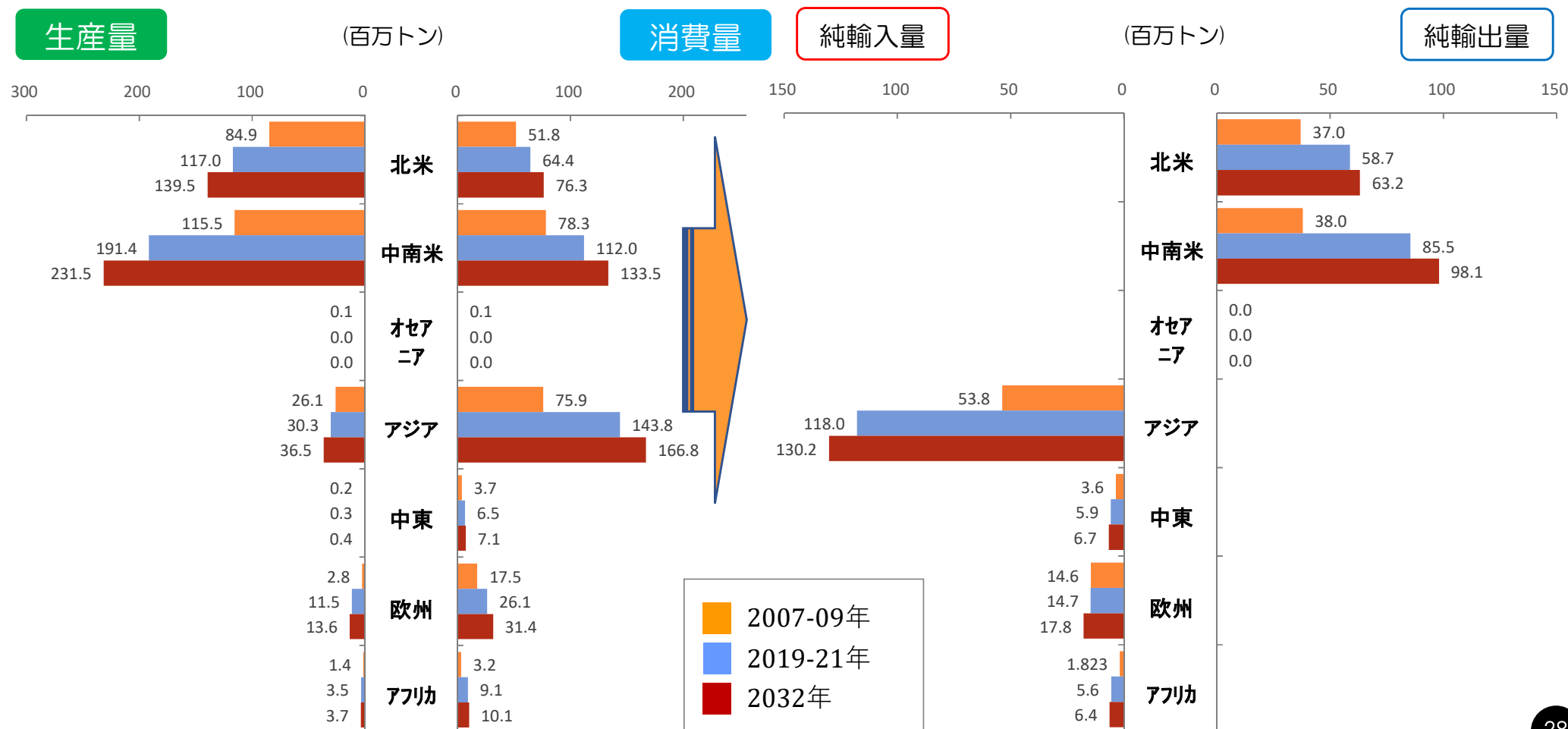
資料：2032年における世界の食料需給見通し

5 地域別の需給見通し：大豆

- 今後、生産量が中南米・北米を中心に拡大する一方、消費量は中国を中心としたアジアの途上国を中心に拡大し、欧州でも増加する。
(※ウクライナ情勢による不確実性はまだ大きい)
- 大豆は搾油後、主に食用の大豆油と飼料用の大豆ミール(粕)として消費される。大豆油は、食用としてインド・中国等のアジアで増加。一部の大豆油は、中南米・北米でバイオディーゼルとして輸送用燃料に混合されて消費量が増える。大豆ミールの需要は、アジアだけでなく中南米や欧州でも増加する。
- 大豆の純輸入量はアジア及び欧州で増加し、純輸出量は中南米と北米で増加。
- 大豆の国際市場は、中国・東南アジア諸国等のアジアにおける純輸入量の増加を、中南米・北米の純輸出量の増加でまかなうが、ブラジルの増加が著しい。ウクライナは侵攻前の輸出量の水準には戻らない。

① 大豆の地域別生産量及び消費量の見通し

② 大豆の地域別貿易量(純輸出入量)の見通し



6 地域別の需給見通し：小麦

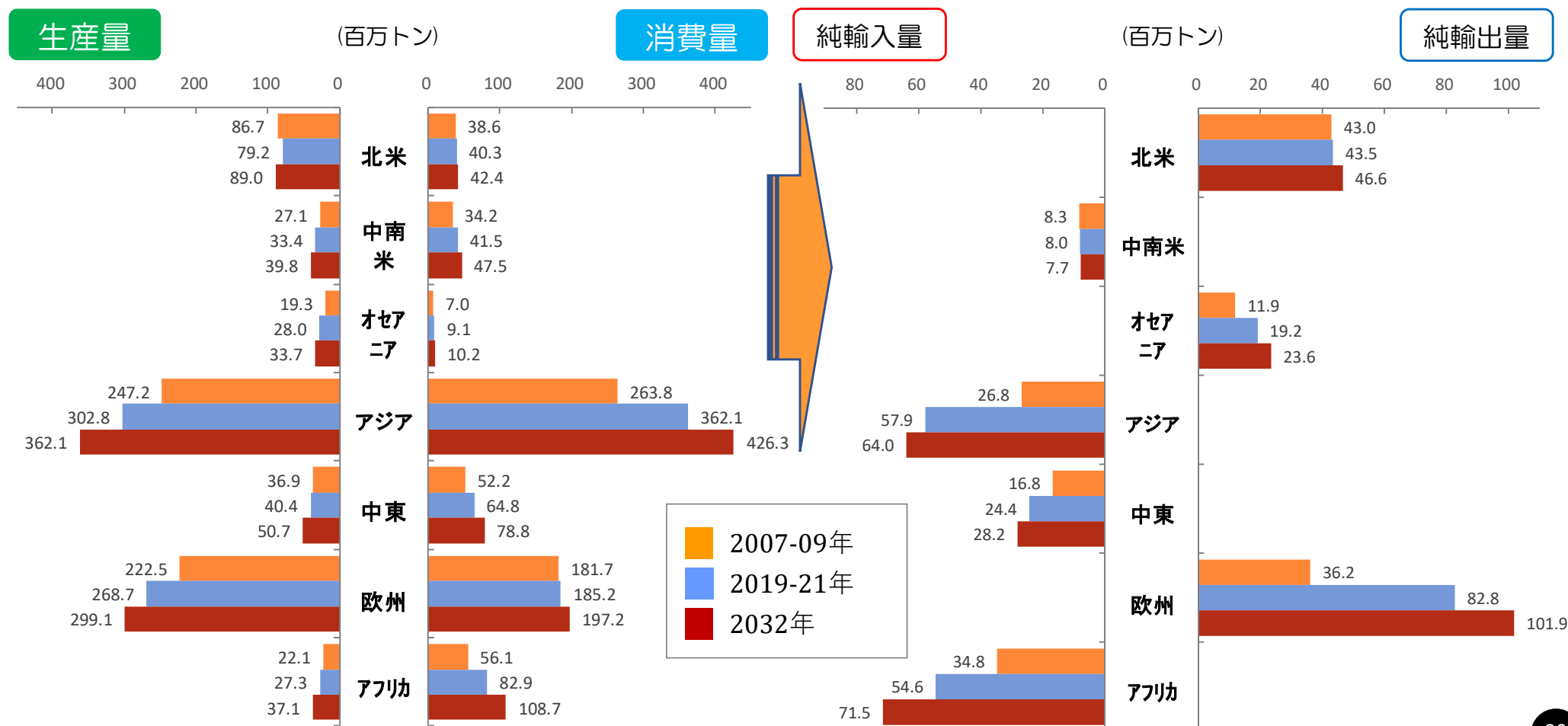
- 世界の生産量及び消費量は、アジアと欧州で7割程度を占める見通し。ロシア等の新興の輸出国が台頭して今後もシェアが増加し、米国等の伝統的な輸出国のシェアは低下。これまで台頭したウクライナは侵攻前の輸出量の水準には戻らない。東南アジア諸国の輸入量は今後も拡大し、アジアや中東・アフリカの消費量の増加が今後も継続する。

(※ウクライナ情勢による不確実性はまだ大きい)

- 消費は主に食用で増加するが、飼料用も増加して総消費量の2割程度を占める見通し。
- アフリカ、アジア、中東では、相対的に少ない生産量の増加に対して消費量の増加が大きく、消費量は今後も拡大が見込まれ、純輸入量は増加。また、純輸出量は伝統的な輸出国を含む欧州、北米、オセアニアで増加する。ただし今後、伝統国の欧州や北米等の産地における高温乾燥や熱波による減産リスクを注視する必要。

① 小麦の地域別生産量及び消費量の見通し

② 小麦の地域別貿易量(純輸出入量)の見通し

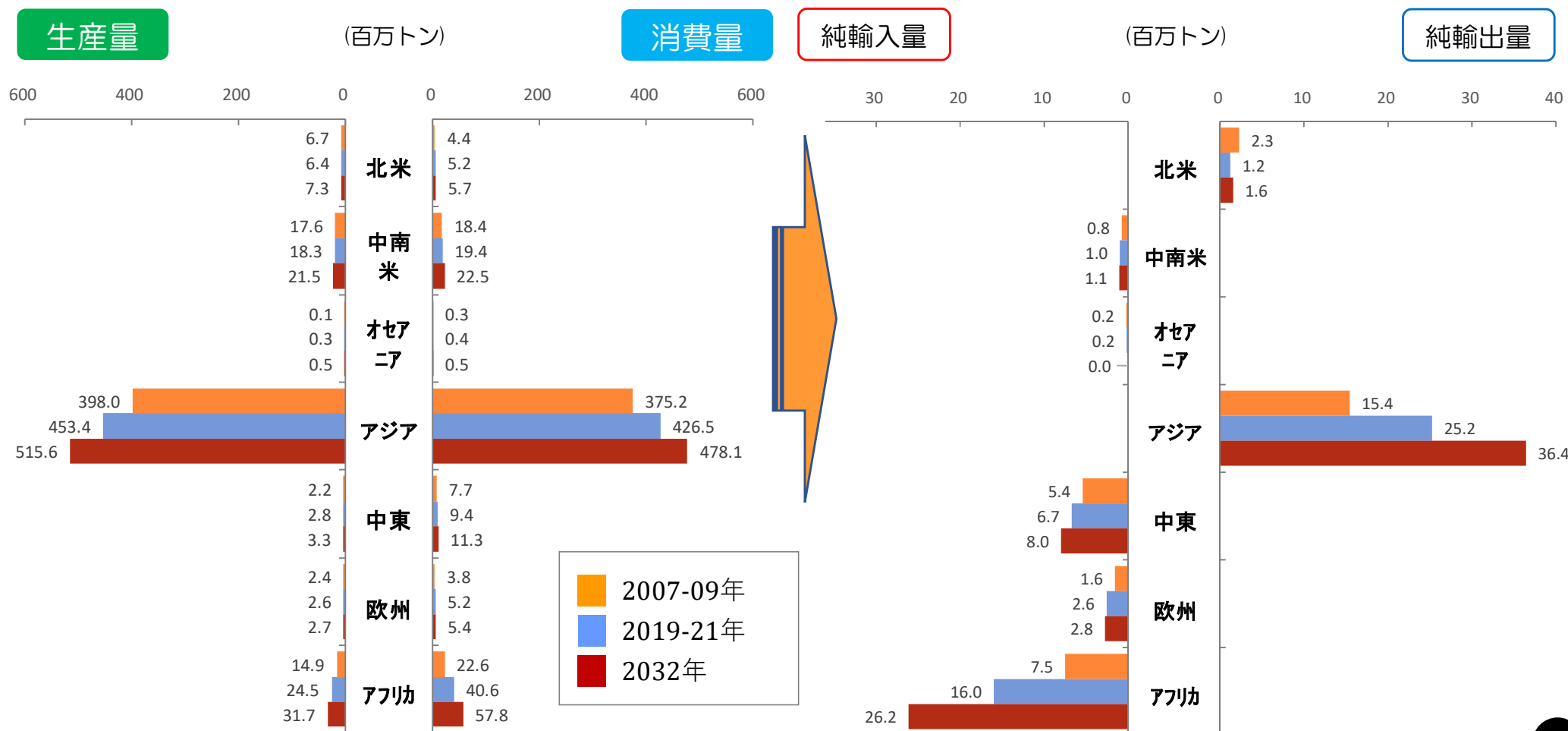


7 地域別の需給見通し：米

- 世界の生産量の9割弱、消費量の8割超をアジアが占め、アジア中心の品目として今後も拡大する。
- 米の消費量のほとんどが食用で、途上国等の総人口の増加に伴って消費量の増加を押し上げる。
- 消費量は、特に、相対的に高い人口の伸びが見込まれるアフリカ(特にサブサハラ)及び中東で大きく増加するが、経済成長率の鈍化で、アフリカ・中東の需要の伸びも鈍化。
- 純輸入量は、アフリカや中東で増加し、特にサブサハラ・アフリカ地域の増加が大きい。欧州はわずかに純輸出量が増加。純輸出量は、インドで拡大して世界一を維持し、次いでタイ、ベトナムが続く。また、新興の輸出国としてミャンマー、カンボジア等が台頭しアジアで純輸出量が増加。北米は若干増加。

① 米の地域別生産量及び消費量の見通し

② 米の地域別貿易量(純輸出入量)の見通し

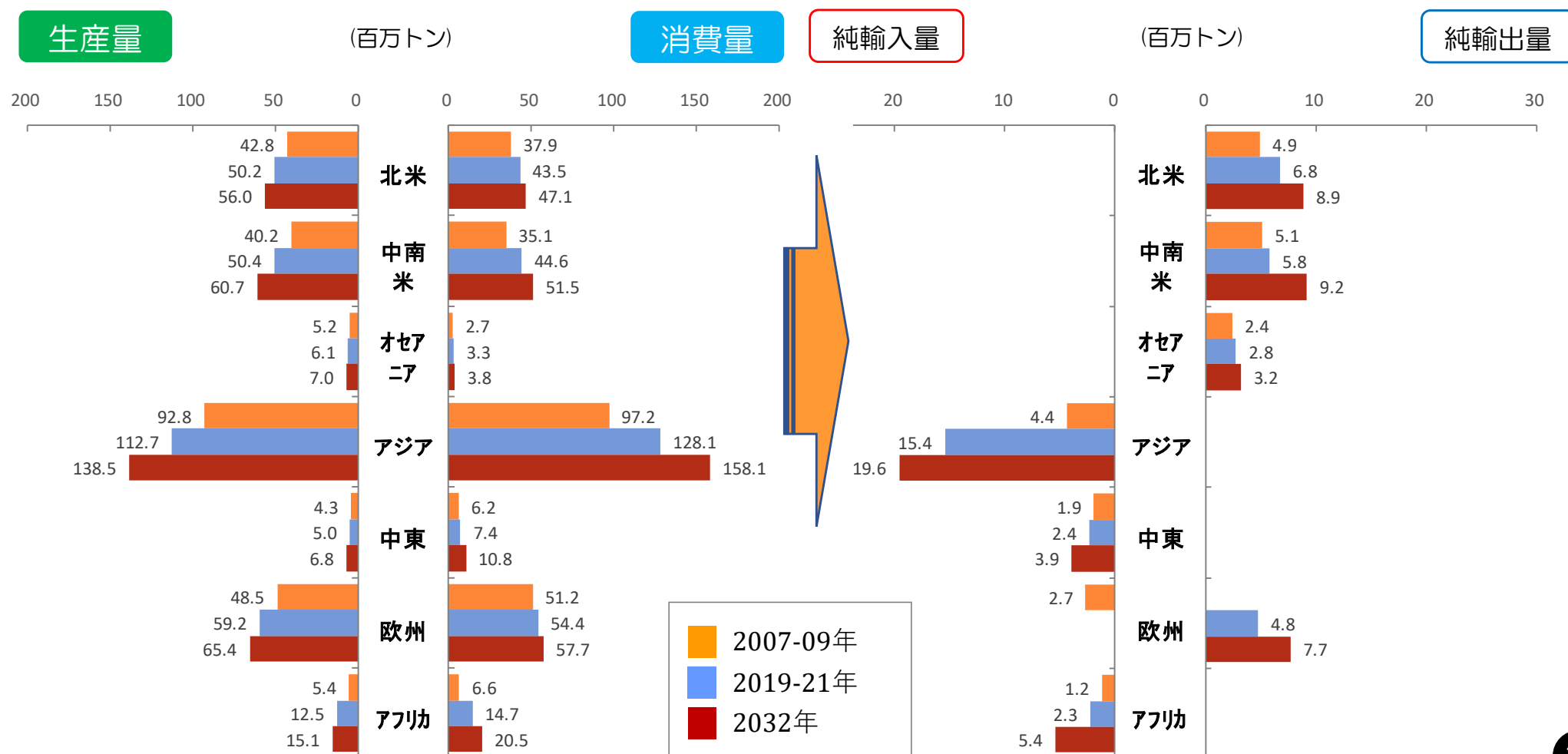


8 地域別の需給見通し：肉類

- COVID-19後の経済回復の途上でウクライナ侵攻が起こり、世界経済の成長見通しの鈍化によって、肉類消費量の伸びも抑えられて鈍化する。生産量及び消費量は、健康志向等により、鶏肉の伸びが肉類のうちで最も高く、増加量が最も大きい。世界で鶏肉の生産と消費が増加。牛肉の消費量の伸びに比べて、豚肉の伸びは低い見通し。アジアが6割弱の消費量を占める豚肉は中国の成長の鈍化等によって消費量の伸びも鈍化する。
- 肉類の純輸入量は、アジア、中東、アフリカ・アジアで増加するが、特に所得向上に伴ってアジアの増加が大きい。次いで中東で輸入増となり、サブサハラ・アフリカは生産量が限られるため輸入が増加する。
- 肉類の国際市場は、所得の上昇に伴って需要量が増加するアジアを中心とする純輸入量の増加を、中南米のブラジル・アルゼンチン、北米の米国、オセアニアの豪州等を中心として純輸出量が増加してまかなう。

① 肉類の地域別生産量及び消費量の見通し

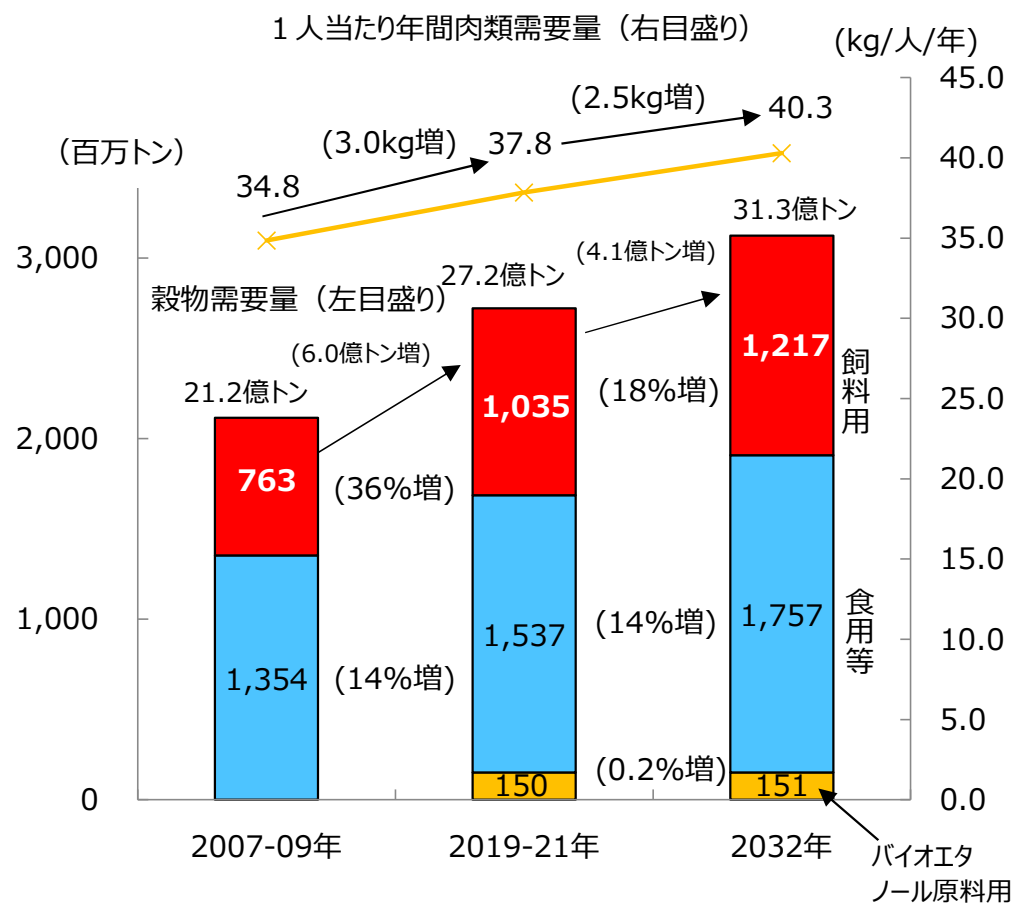
② 肉類の地域別貿易量(純輸出入量)の見通し



9 穀物の需給見通し：世界の穀物の消費・生産量の内訳

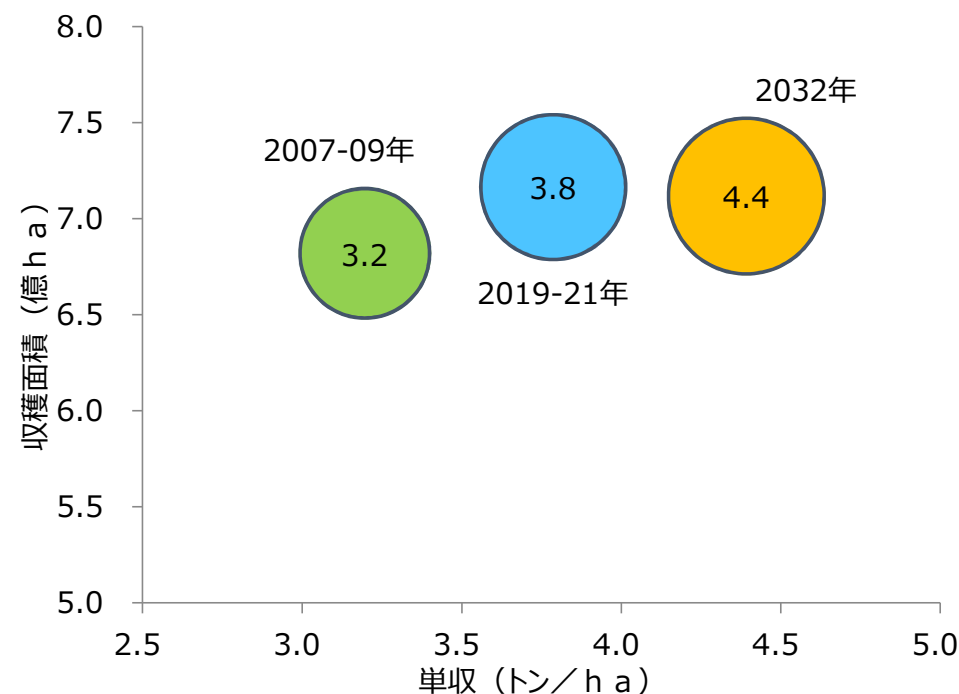
- 穀物消費量について、世界経済は、COVID-19を経て回復に向かう途上で、ウクライナ侵攻による多方面への影響から、下押し圧力を受ける中で、将来的に中国の人口減少や成長の鈍化があるものの新興国及び途上国を中心として、所得の向上を背景とした肉類消費量の増加に伴った飼料用需要の増加と、伸び率が鈍化しつつも総人口の増加を背景に食用消費は増加する。
- 穀物生産量について、全ての穀物の収穫面積がやや減少傾向となる中で、単収の伸びはこれまでに比べて鈍化するものの、単収の増加が寄与して、生産量は増加する見込み。

① 用途別穀物消費量と1人当たり年間肉類消費量
(世界合計)



② 穀物の生産量、単収、収穫面積 (世界合計)

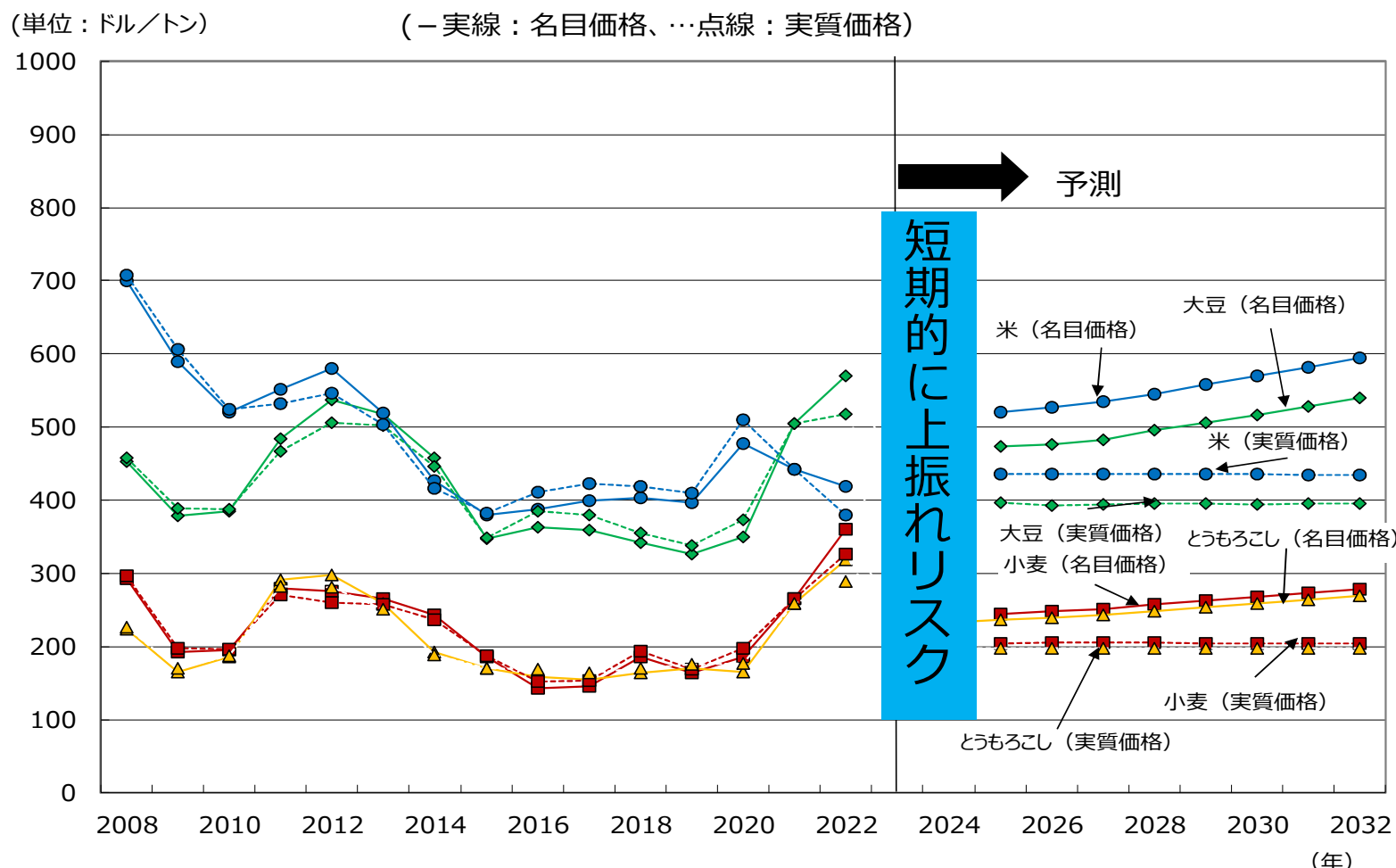
世界合計	2007-09年 (I)	2019-21年 (II)	2032年 (III)	増加率 (II)/(I)	増加率 (III)/(II)
収穫面積 (億ha)	6.8	7.2	7.1	5.1%	-0.7%
単収 (トン/ha)	3.2	3.8	4.4	18.5%	16.0%
生産量 (百万トン)	2,180	2,713	3,126	24.5%	15.2%



注：数字は単収 (トン/ha)、円の大きさが生産量。
資料：2032年における世界の食料需給見通し

10 穀物・畜産物等の需給見通し：穀物及び大豆の国際価格見通し

- 穀物及び大豆の国際価格は、実質価格ベースで、ウクライナ侵攻による多方面への影響等から下押し圧力が強まり、将来の経済成長の鈍化見通しから食料需要の伸びの鈍化を強めつつ、弱含む傾向となる見通し。ただし、短期的に強まるインフレ圧力やウクライナ情勢を背景に上振れリスクが残る。
- インフレーション等の物価上昇を勘案すると、これらの名目価格は上昇する見込み。
(これら国際価格の推移に対して、日本国内の円貨ベースは円安傾向にあり、輸入価格も為替動向によって上昇のリスク)



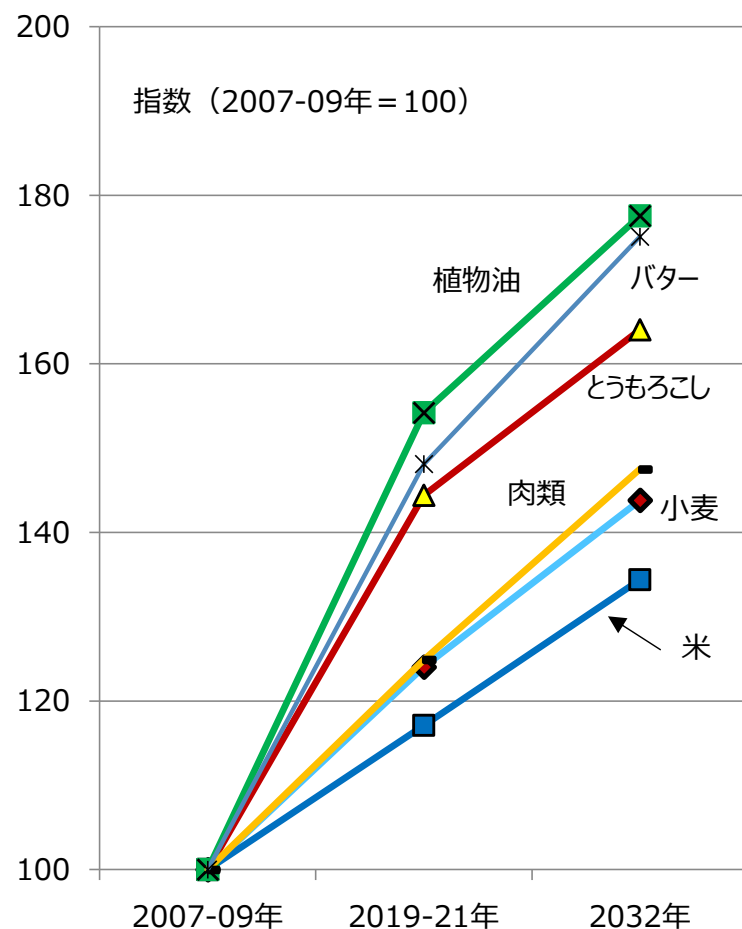
注：2022年までが実績値で、2023年から2032年までは需給データによる予測値。名目値について、小麦，とうもろこし，米，大豆は、製造業輸出価格指数（Export price of manufactures、IMFによるインフレーション指数の一つ）を基に算出。製造業輸出価格指数は、近年の10%を超えるインフレ圧力を踏まえた見通しとなり、名目値と実質値の差が相対的に大きくなる。

資料：2032年における世界の食料需給見通し

1 1 穀物・畜産物等の需給見通し：世界における各品目の消費増加と食料価格

- 2020年からのCOVID-19パンデミックを経た経済回復の途上で、ウクライナ侵攻を受けた不確実性の高まりとインフレ圧力の強まり等を背景に、経済の減速が懸念され、中長期的には中国の人口減少や成長の鈍化が見込まれ、途上国を中心とした所得の向上と人口の増加等による世界の消費量の増加率が鈍化する品目が増える見通し。
- 経済成長やバイオ燃料の伸びの鈍化等によって、穀物の実質価格はマイナスとなる見通し。
大豆、肉類、植物油等の実質価格の伸びはプラスとなるものの、今後、これらの需要の伸びは鈍化する傾向となる。
- 各品目の実質価格の上昇率は、食の嗜好の変化や加工度の違い等によって異なる。

① 主要品目の世界の総消費量の変化



② 各品目の実質価格の増減率に差異

(単位：ドル/t (耕種作物)、ドル/100kg (畜産物))

品 目	基準年 (2019-21年) の価格	2032年 (目標年)	
		実質価格	増減率 (%)
小麦	205	204	-0.4
とうもろこし	198	197	-0.5
米	439	435	-0.9
その他穀物	131	130	-0.8
大豆	394	396	0.4
植物油	882	897	1.8
牛肉	475	480	1.2
豚肉	157	158	0.5
鶏肉	260	267	2.6
バター	482	537	11.3
脱脂粉乳	266	320	20.1
チーズ	401	410	2.4

資料：2032年における世界の食料需給見通し

(参考 1) OECD-FAO、USDAにおける中期的な世界食料需給見通しの概要

- 中長期的な世界食料需給見通しに関しては、各機関が公表しているが、目的の違いにより、それぞれ輸出国の立場や加盟国の農業政策の影響への強い関心等が反映されている。
- 我が国の「世界食料需給モデル」では、国際機関や食料輸出国の予測だけに依存することなく、食料の輸入国の立場から分析を行うという視点に立ち、日本と同様に食料輸入国であるアジア各国の需給分析も強化して、我が国独自の将来の食料需給を自然体で見通し、世界の食料事情の変化に対応した食料戦略の検討等に活用されている。

機関名	公表資料名 (公表年月)	見通しの目的	見通しの概要
経済協力開発機構 (OECD) 及び 国連食糧農業機関 (FAO)	OECD-FAO Agricultural Outlook 2022- 2031 (2022年6月)	各国の農業政策が世界の農産物需給に与える影響について分析することを目的として中期的な世界食料需給見通しを実施	農産物と食品の供給の伸びの一方で、需要の伸びの鈍化により、 <u>今後10年間、ほとんどの農作物の実質価格は現在の水準から下落する見込み。</u> ただし、世界の農産物市場は様々な不確実性によって価格が変動する可能性。
米国農務省 (USDA)	USDA Agricultural Projections to 2032 (2023年2月)	米国の農業政策コストを予測するとともに、米国の中期的農産物貿易動向を予測するために、米国農産物市場を中心に中期的な食料需給見通しを実施	<u>今後10年間、穀物等の実質価格は現在の水準から下落する見込み。</u> 米国はとうもろこしの輸出量を増加させるものの、大豆の輸出量はほぼ横ばいで推移し、米国の農業は世界の農産物市場において引き続き競争力を有するが、主要輸出国との競争は激化する見込み。

(参考2) 世界食料需給モデルの概要

1 対象品目（合計20品目）

- ① 耕種作物 6 品目（小麦、とうもろこし、米、その他穀物、大豆、その他油糧種子）
- ② 食肉・鶏卵 5 品目（牛肉、豚肉、鶏肉、羊肉、鶏卵）
- ③ 耕種作物の加工品 4 品目（大豆ミール、その他のオイルミール、大豆油、その他の植物油）
- ④ 生乳・乳製品 5 品目（生乳、バター、脱脂粉乳、チーズ、全脂粉乳）

2 目標年次、基準年次、比較年次

- ① 目標年次：2032年（現在から10年後）
- ② 基準年次：2019～2021年の3年平均
- ③ 比較年次：2007～2009年の3年平均

3 予測項目

品目別・地域別の消費量、生産量、純輸出入量及び品目別国際参照価格（実質・名目）

4 対象範囲及び地域分類

- ① 対象範囲：世界全体（全ての国）
- ② 地域分類：
 - i 予測に用いるデータの地域分類は、地理的基準により8地域区分に分類した。
（小分類として31か国・地域に分類）
 - ii 品目毎の需給予測は、基本的にこの8地域区分により示した。
なお、各種パラメータ等について精度を向上させたことから、この8地域区分に加え参考値として品目毎に主要な生産・消費国の需給予測の結果も併せて示した。

(参考 2 : 続き) 世界食料需給モデルの国・地域分類

- 世界全体を対象範囲として、予測に用いるデータの地域分類は、
地理的基準により 8 地域区分
- 小分類として 31 か国・地域
- モデルは世界全体としての食料需給の基調を予測するため、国別での予測は行わず、
8 地域区分の予測値を示す
- 各品目の主要生産・消費国のみを参考値として追記

地域区分	小分類(国名・地域名)
北米	米国、カナダ
中南米	アルゼンチン、ブラジル、メキシコ、その他中南米
オセアニア	豪州、ニュージーランド
アジア	日本、中国、韓国、タイ、ベトナム、インドネシア、 マレーシア、フィリピン、インド、パキスタン、 バングラデシュ、台湾、 その他アジア（中央アジア含む）
中東	中東
欧州	EU（27か国）＋UK、ロシア、ウクライナ、 その他ヨーロッパ
アフリカ	南アフリカ共和国、ナイジェリア、北アフリカ、 その他アフリカ（サブサハラ・アフリカ）
その他世界	その他世界
合計	31か国・地域

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2023 年 4 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 月報で一番関心／参考にしている項目のうち、特別分析トピックを選択された場合、特に関心があったテーマがあれば教えてください。
- 7 最近で最も興味を引いた／役立った記事は何ですか。（自由記載）
- 8 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
中国の需要・輸入動向
- 9 特別分析トピックで取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
- 10 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html

